

超自然の世界

聖書が語る見えない世界―それが重要な理由

マイケル・S・ハイザー

テイラー尚子訳

Supernatural

Copyright © 2015 by Michael S. Heiser

『超自然の世界』 原題 『Supernatural』)

© 2017, Miqlat

この翻訳書は、著者および著作権所有者の承認を得て、あらゆる形式でコピーおよび流布することを許可します。この許可は、Miqlat.org によって出版された翻訳のみに適用されます。Miqlat.org は、米国における 501(c)(3) 非営利法人です。この許可は Lexham Press によって出版された、同じ言語による他の翻訳、または他の言語の翻訳には適用されません。

聖書の引用は特に指定のない限り、日本聖書協会発行 『聖書』 口語訳) 1954 および 55 年改訳) を使用しています。

赦しの祈り」の邦訳は、AllAboutGod.com から転載したものであり、その著作権は AllAboutGod.com に帰属します。

ISBN

訳者 テイラー尚子

私の父母

エド&ジャン・スペローへ

これを誰が予測できたでしょうか？

答えはわかっていると思います。

第一サムエル記1章1〜28節

原書（英語版）の謝辞

『超自然の世界』は、私の著書『*The Unseen Realm*』に基づいているため、ここではその本の謝辞で表した思いを簡潔に綴ることにします。

私が学術上のキャリアで、聖書神学の天上の会議と見えない世界を焦点とすることを決めて間もなく結成されたオンラインのディスカッショングループに感謝します。当然のことながら、私はそれを天上の会議スタディーグループ *Divine Council Study Group* :DCSG)と呼んでいました。私が博士課程を修了し、*Logos Bible Software* に勤務し始めた後、2004年にDCSGは解散しましたが、そこでの訓練はこれら両方の本を書くための準備となりました。

『*The Unseen Realm*』は、ウェブсайтコンテンツと私の小説『*The Facade*』に興味を持たれたフォロワー向けに私が製作した『*The Myth That Is True*』というタイトルの原稿として始まりました。その大半の資料は、まずニュースレターに、そして後にブログで紹介しました。この趣旨は毎月何かを製作することでした。『*Myth Book*』と呼ばれるようになった最初の完全な原稿は、2012年に完成しました。原稿は読者のフィードバックを受けて改善されました。個々の貢献者のリストは『*The Unseen Realm*』の謝辞に含まれています。

『*The Unseen Realm*』は、わたがって『*Supernatural*』の出版の大きな推進力となったのは、*Faithlife Corporation/Logos Bible Software* のボブ・プリチェット、デール・プリチェット、およびビル・ニーホイスの三人の役員でした。彼らは、私の原稿を次の段階に進めただけでなく、そのコンテンツの本質を抽出したバージョンの必要性も予見しました。したがって、『*Supernatural*』は彼らのビジョンの成果と言えます。

『The Unseen Realm』の編集者デイブ・ランバートは、『Supernatural』の編集も担当してくれました。彼の専門知識と豊富な経験による恩恵は、各ページに反映されています。読者の皆さんに最後まで興味を持って本書をお読みいただけるのは、彼の功績だと思います。

最後に、妻のドレナに感謝します。私が行うことすべては、彼女のお陰です。

本翻訳書の謝辞

Midlat.org への寄付者の方々に心から感謝します。彼らの寛大なご寄付がなければ、翻訳プロジェクトは不可能でした。

目次

- 第1章 聖書を信じる
- 第2章 見えない世界・神と神々
- 第3章 かつての王と未来の王
- 第4章 天上の反逆
- 第5章 宇宙的地理観
- 第6章 言、御名、御使い
- 第7章 交戦の規則
- 第8章 聖なる空間
- 第9章 聖戦
- 第10章 ありふれた風景の中に潜む
- 第11章 超自然的な意図
- 第12章 クラウドライダー 天の雲に乗って来られるお方

第13章 大逆転

第14章 この世のものではない

第15章 神の性質にあずかる者

第16章 御使いたちを治める

結論

赦しの祈り

著者からのお願い

第1章

聖書を信じる

あなたは聖書に書かれていることを本当に信じていますか。

主にクリスチャによって読まれる本にしては、奇妙な質問だと思われる方もおられることでしょう。しかし、私はそんなに奇妙な質問ではないと思います。聖書にはかなり奇妙なこと、特に現代世界においては信じ難いことも書かれています。

イエス様が地上に來られて十字架で死を遂げられ、死からよみがえられた神であるかどうかなどという大きな問題について言っているではありません。神が紅海に道を作られ、イスラエルを救われた出エジプトのような奇跡の物語を考えているわけでもありません。ほとんどのクリスチャンは、これらの物語を信じていると言うでしょう。神とイエスを信じなければ、または神とイエスが奇跡を起こすことができることを信じなければ、クリスチャンであると言っても何の意味があるでしょう。

私が言っているのは、あまり知られていない超自然的なことです。聖書を読むときにときどき遭遇するにもかかわらず、教会ではそれについて聴くことがほとんどないことについてです。

例を挙げてみましょう。第一列王記22章に、イスラエルの邪悪な王アハブの話が書かれています。この王は、ユダの王と同盟してラモテ・ギリアダで敵を攻撃することを望みました。ユダの王は、攻撃するとどうなるかということ、つまり将来を知りたいと思いました。そこで二人の王は、アハブの預言者たちにそれを尋ねたところ、全員からゴーサインを得ました。しかしこれらの預言者たちはアハブの望みどおりのことを告げただけで、そのことはどちらの王にもわかっていました。そこで、王たちは神の預言者ミカヤという者に尋ねることにしました。ミカヤの預言はアハブにとって良い知らせではありません。

ミカヤは言った、それゆえ主の言葉を聞きなさい。わたしは主がその玉座にすわり、天の万軍がそのかたわらに、右左に立っているのを見たが、主は「それがアハブをいざなうラモテ・ギレアデに上らせ、彼を倒れさせるであろうか」と言われました。するとひとりはこの事を言い、ひとりはほかの事を言いました。それで主は偽りを言う霊をあなたのすべての預言者の口に入れ、また主はあなたの身に起る災を告げられたのです。主は「どのような方法でするか」と言われたので、彼は「わたしが出て行って、偽りを言う霊となつて、すべての預言者の口に宿りましょう」と言いました。そこで主は「罪まえば彼をいざなう、それを成し遂げるであろう。出て行って、そうしなさい」と言われました。それで主は偽りを言う霊をあなたのすべての預言者の口に入れ、また主はあなたの身に起る災を告げられたのです。 第一列王記22・19〜23)

ここで聖書が何を信じることをあなたに求めているのかに気付きましたか。神が霊的存在たちと会合し、地上で何が起こるかを決めているということではないですか。本当でしょうか。

もうひとつ例を挙げます。これはユダの手紙からです。

主は、自分たちの地位を守ろうとはせず、そのおるべき所を捨て去った御使たちを、大いなる日のさばきのために、永久にしばらくつけたまま、暗やみの中に閉じ込めておかれた。(ユダ1・6)

神が多くの御使いたちを地下の牢獄に送ったのですか。本当ですか。

先ほども申しあげたとおり、聖書には、特に目に見えない霊界についてなど、奇妙なことがたくさん書かれています。聖書に含まれる、超自然的なことに關する比較的論議の少ない当たり障りのない教えについては全く問題を感じていないという多くのクリスチャンに出会いましたが、前述のような箇所にはかなり違和感があるため、彼らは無視する傾向にあります。私はそのような傾向を間近に見ました。妻と私がかつてある教会を訪ねたときに、その牧師がペテロの第一の手紙に基づくシリーズを説教していました。その朝、この牧師はペテロの第一の手紙3章18〜22節について説教しました。説教壇に立って彼が最初に口にしたのは、「この部分の御言葉はスキップします。奇妙すぎますから」でした。この牧師が「奇妙」と言ったのは、その御言葉に超自然的要素が含まれていて、彼の神学としっくり合わないという意味でした。たとえば、次のような御言葉です。

キリストも、あなたがたを神に近づけようとして、自らは義なるかたであるのに、不義なる人々のために、ひとたび罪のゆえに死なれた。ただし、肉においては殺されたが、霊においては生かされたのである。こうして、彼は獄に捕われている霊

どもものところに下って行き、宣べ伝えることをされた。これらの霊というのは、むかしノアの箱舟が造られていた間、神が寛容をもって待っておられたのに従わなかった者どものことである。 第一ペテロ3・18〜20)

この「獄に捕われている霊ども」とは何者でしょう。そして彼らはどこにいたのでしょうか。あの牧師は、その答えを知らなかった、あるいはその答えを気に入らなかつたのでしょう。ですからこの箇所を無視することを選んだのでしょう。

私は聖書学者として、奇妙に思われる御言葉の箇所。そして、あまり知られていない箇所やあまり理解されていない箇所)は、実際には非常に重要であることを学びました。そのような箇所は、神、見えない世界、およびわれわれ独自の人生に関する特定の観念を教えてください。信じるかどうかにかかわらず、それらを意識し、それらがどれだけ難解で不可解であっても、その意味を理解することにより、私たちの神について、お互いについて、私たちがこの地上に存在する理由について、さらに私たちの最終的な宿命についての考え方が一変することでしょう。

コリント人へ宛てた使徒パウロの第一の手紙の中で、パウロはコリントの教会の信者が争いをお互いに裁判所に持ち込んで解決しようとしていたことに憤慨しています。それは時間と感情的エネルギーを無駄にするだけでなく、信仰を否定的に反映するものであるとパウロは感じたのです。 あなたたちは、この世をさばく者となることを知らないのですか。御使いたちをも治めることになることを知らないのですか」 第一コリント6・3 著者による意識)。

世を裁く？ 御使いたちを治める？

この不可解な御言葉でパウロが言っているのは、ショッキングであると同時に人生を一転させるようなことです。聖書は、超自然的存在の活動を私たちの人生と宿命に結び付けています。私たちはいつかこの世を裁きます。パウロが言ったとおり、私たちは御使いたちを治めるようになります。このことについては後で詳しく述べます。

パウロがコリント人たち、そして私たちにあのように言える理由は、神が、私たちを創造され、私たちが神の天の家族の一員となることを望んでおられるということが聖書の物語の主題であるからです。聖書で、神、イエス、見えない世界の存在、および信者(つまり私たち)を集散的に記述する際、一緒に暮らす、共に働くといった家族関係を表す言葉が使用されているのは偶然ではありません。

私たちはだれでも天に行われるとおり、地にもという概念を知っています。主の祈り(マタイ6・10)にある観念、そして表現から取ったものです。神は初めから、見えない世界の家族である天の万軍と共に、神に属する人類の家族が完全な世界で神と一

緒に暮らすことを望んでおられました。本書は、聖書と同様に、その物語 神の目的、それに対する闇の世の権威による敵対、その失敗、そして最終的な将来の成功) について書いたものです。この物語の一部でありながら聖書教師の多くに無視されている超自然的なキャラクターも含め、当事者を「すべて」含まなければ、聖書の物語のドラマを正しく理解することはできません。

神の天軍のメンバーは、聖書で語られている私たちの物語、つまり人類の物語に対して周辺的な存在でも、取るに足らない存在でも、無関係の存在でもありません。彼らは中心的な役割を果たしているのです。しかし、聖書の現代の読者は、彼らについて把握することなく、聖書の中でも最もよく知られている数十の挿話に巧みに織り込まれている超自然的世界について読み過ぎることが多すぎます。私も、聖書について現在の見識を得るまでに何十年もかかりました。長年にわたる研究の成果を皆さんにお伝えしたいと思います。

しかし、冒頭で私が投げかけた質問から注意をそらさないようにしましょう。聖書に書かれていることを本当に信じていますか。それが肝心なことです。見えない世界について、そしてそれがあなたの人生とどのように交わっているかについて聖書が何を言っているかを学んでも、それを信じない限り何の役にも立ちません。

第二列王記6章8〜23節では、預言者エリシャが(再び)苦境に陥っています。怒った王が軍隊を送りエリシャの家を包囲しました。召使いがうろたえたと、エリシャは「恐れることはない。われわれと共にいる者は彼らと共にいる者よりも多いのだから」と、この若者に伝えます。この召使いが異議を唱える前に、エリシャは祈りました。主よ、どうぞ、彼の目を開いて見させてください」と。神はその場で祈りに応えられました。主はその若者の目を開かれたので、彼が見ると、火の馬と火の戦車が山に満ちてエリシャのまわりにあった。」

エリシャの祈りは皆さんのための私の祈りでもあります。神があなたの眼を開いて見えるようにしてください、あなたの聖書についての考え方が刷新されますように。

第2章

見えない世界 — 神と神々

人々は、超自然的なこと、超人的なことに心を惹かれます。近年のエンターテインメント業界を考えてみてください。過去10年に天使、異星人、モンスター、悪霊、幽霊、魔女、魔法、吸血鬼、オオカミ人間、スーパーヒーローなどを扱った書籍、テレビ番組、映画は数千に及びます。『Xメン』、『アベンジャーズ』、『ハリー・ポッター』シリーズ、『スーパーマン』、『トワイライト・サーガ』など、ハリウッドの大ヒット作のシリーズの多くに超自然的存在が登場します。『リング』、『スーパーナチュラル』、『Xファイル』などのテレビ番組には、新しいエピソードの撮影の終了後、ずっと経ってから熱心なファンがいます。実際に、これらの超自然的な事柄は物語、本、芸術などで常に人気を集めてきました。

なぜでしょう。

答えの一つは、それらが平凡からの逃避を可能にするためです。私たち独自の世界よりも面白く、刺激的な世界を提供するからです。宇宙規模で拡大された善と悪の対決には、私たちがワクワクさせる何かがあります。『ロード・オブ・ザ・リング』三部作で中つ国のヒーローたち（ガンダルフやフロドとその仲間たち）が冥王サウロンと繰り広げる壮絶な戦いは、半世紀以上も読者をそして現在では映画ファンをも魅了してきました。悪役が異世界的であるほど、勝利は壮観なものとなります。

別のレベルでは、人が異世界に惹きつけられるのは、伝道の書にあるように神が「大の心に永遠を思う思いを授けられた」伝道の書3・11) ためです。人間のありようには、人間の経験を超えた何か、つまり天与のものを切望する何かがあります。使徒パウロもこの切望について書いています。パウロは、それは単に、神が創造された世界で生きることからくると教えています。被造物は、創造主の存在の証であり、したがって私たち独自の世界を超えた世界を物語ります（ローマ1・18〜23）。実際、パウロはこの衝動は非常に強力なので、意図的に抑制しなければならいと言っています（ローマ1・18）。

それでも私たちは、聖書の大物語を、本、映画、伝説などにおける超自然的存在に関する私たち独自の物語と同様には考えていないようです。それには理由があり、それらは特殊効果の不足の域を超えています。一部の読者にとっては、聖書の登場人物が普通すぎたり、年寄りすぎたりします。ダイナミックとも勇敢とも思われません。所詮、これらの人物や物語は子供の頃から日曜学校で聞いてきたのと同じ人物、同じ物語なのです。さらに、文化の壁があります。教会で催されるキリスト降誕劇に出てくる多数の役者のように、ローブをまとい、次々と登場する大昔の羊飼いや男たちと自分を重ね合わせることは私たちにとって困難なことです。

しかし、サイエンスフィクションや超自然的ファンタジーが、より簡単に私たちの想像力をかきたてる理由の大きな要因となるのは、聖書に出てくる見えない世界について、私たちが教えられてきた考え方です。私が長年にわたり教会で聞いてきた内容は、要点を把握しそこなっているだけでなく、超自然世界を退屈なものにしています。さらにまずいことに、教会の教えは、見えない世界、超自然世界の力を奪い、無力なものにしています。

見えない世界について多くのクリスチャンが真実であると思っていることは、真実ではありません。天使には翼はありません。ケルビムは、天使・御使いと呼ばれることはなく、動物的であるため、天使には教えられません。御使い・天使は常に人間の姿をしています。悪霊には角も尾もなく、彼らは私たちに罪を犯させるためにいるのではなく、私たちが罪を犯すのに悪霊の助けなど必要ありません。聖書は悪霊にとりつかれた様子について、当然ながら恐ろしい表現を使用していますが、知的な悪は、人を操り人形にするよりも邪悪なことを行います。そのうえ、御使いや悪霊はマイナーな存在です。教会が大物たちとその計略に言及することは決してないでしょう。

神々は実在する

本書の第1章で、聖書に書かれていることを本^に、信じているかと尋ねました。これを抜き打ちテストだと思ってください。

神はご自身が決めたことを遂行する神族から成るタスクフォースをお持ちだと聖書は言っています。それは神の会衆、会議、または大庭 ダニエル7・10では審判と呼ばれています 詩篇89・5〜7、ダニエル7・10。これを最も明確に示しているのが詩篇82篇1節です。Good News Translation 邦訳は口語訳がこれに近い) がうまく表現しています。神は神の会議のなかに立たれる。神は神々のなかで、さばきを行われる。」

考えてみると、これは驚くべき御言葉です。私はこの御言葉を初めて熟考したときには、動転しました。しかし、この御言葉が意味するところは、一目瞭然、文字どおりのことです。他の部分と同様、詩篇82篇1節も聖書の他の部分と関連して理解する必要があります。この場合、神々について聖書が語っていること、そして神々という言葉をもどのように定義するかということに関連して理解します。

神々と訳された元のヘブライ語は *elohim* (エロヒム) です。私たちの多くは、エロヒムをたった一つの意味、つまり父なる神の名前の一つとして長年にわたり理解してきたため、より広範な意味でそれを考えることは難しいかもしれません。しかし、この言葉は見えない霊界のあらゆる居住者を指しているのです。この言葉が神ご自身 創世記1・1)、悪霊 申命記32・17)、そして死後の人間 第一サムエル28・13) を表すために使用されているのは、そのためです。聖書では、霊界を住処とする、肉体的な存在はみなエロヒムなのです。

このヘブライ語は、神のみがお持ちの二連の能力を指すものではありません。聖書は、神をその他すべての神々と区別するために、エロヒムという言葉ではなく、他の方法を使用しています。たとえば、聖書は神々に聖書の神を拝めよと命じています 詩篇29・1)。神は創造主、そして王 詩篇95・3、148・1く5) です。詩篇89編6く7節は、大空のうちに、だれか主と並ぶものがあるでしょうか。神の子らのうちに、だれか主のような者があるでしょうか 第一列王記8・23と詩篇97・9も参照」。主は聖なる者の会議において恐るべき神」と言っています。聖書の著者たちは、イスラエルの神に並ぶものがないこと、すなわち神は「神の中の神」であること 申命記10・17、詩篇136・2) を率直に表現しています。

「聖なる者の会議」に属するこれらの存在は実在するのです。本書の最初の章で、神が天の万軍と会合し、アハブ王を処分するための方法を決めたという御言葉を引用しました。その箇所では、天の万軍のメンバーは「霊」と呼ばれています。霊界が実在し、そこには神、および神が創造された霊的存在 御使いなど) が住んでいると信じた場合、私たちは前述の引用箇所やその他の箇所に記載された神の超自然的タスクフォースも実在することを認めざるをえません。さもなければ、霊的現実があることに口先だけで同意しているにすぎません。

そして、聖書は神の会議のこれらのメンバーを霊と特定しているため、神々は石や木でできた単なる偶像ではないことがわかります。像は天上の会議で神に仕える者ではありません。神に対抗する神々を崇拜する古代人が、偶像を作ったことは事実です。しかし、彼らは自分たちの手で作った偶像が真の権力ではないことを知っていました。手作りのそれらの偶像は、神々が犠牲を受け

取ったり、信者に知識を授けたりするために宿ることのできる物体にすぎませんでした。信者は儀式を行うことによって、神々に彼らのところへ来て偶像に宿るように懇願しました。

会議の構造と役割

詩篇82篇1節の神々は、同じ詩篇の後半では「いと高き者の子」詩篇82・6）と呼ばれています。神の子らは聖書に数回出てきますが、いつも神の御前に現れています（ヨブ1・6、2・1、38・7）。ヨブ記38章7節は、神が地球を形作り、人類を創造される前から彼らが存在していたと語っています。

これは非常に興味深いことです。神はこれらの霊的存在を神の子らと呼んでいます。私たちが子孫の創造にかかわっているために、彼らを息子や娘と呼ぶのと同様に、霊的存在は神が創造されたものなので、その表現に「家族的」な言語が使用されていることにはうなづけます。しかし、父であることに加え、神はそれらの存在の王でもあります。古代の世界では、王はその拡大家族を通して統治することがよくありました。王位はその継承者へと受け継がれました。統治はファミリービジネスでした。神は神の会議の主です。そして、神の子らは神との関係ゆえに、神に続く最高の位にあります。しかし、本書を通して説明するように、何かが起こりました。彼らの一部が不忠者となったのです。

神の子らは、意思決定者でもあります。第一列王記22章 およびその他多くの箇所から神の御業は、人類の歴史と関わり合うことを伴ったことがわかります。神は、邪悪なアハブが死ぬときが来たと決められたとき、その方法の決定を神の会議に任せられました。

聖書の中で私たち人間にかかわる会議は、詩篇82篇と第一列王記22章の会議だけではありません。帝国の運命を決めた会議も二つあります。

ダニエル書4章では、バビロンの王ネブカデネザルは、神に罰せられ一時的な狂気に陥りました。この処罰は、「いと高き者の命令」ダニエル4・24）および「見張り人たちの宣告」ダニエル4・17「CBリビングバイブル」として言い渡されました。見張り人とは、神の会議の神族に使用された言葉でした。それは、彼らが眠ることもなく、人類の出来事を常に注意深く見守っていたことを表しています。

聖書に描かれている天上の会議のセッションのシーンは、神の会議のメンバーが神の統治に参与していることを語っています。少なくとも一部のケースでは、神はご自分が希望されることを命令されていますが、それを達成する方法は超自然的存在に自由に決めさせておられます。

御使いたちも神の会議に参加します。聖書の元の言語では、旧約および新約聖書で御使、(angel)と訳されている言葉は、実際にはメッセージャーを意味します。御使、という言葉は、職務説明です。御使いは人々にメッセージを届けます。御使いとその職務について、および神の会議のメンバーのその他の職務については、後述します。

このことが重要である理由

ここまで本書で読んだすべての内容に対するあなたの反応は、興味をそそられる。聖書の中でこんなことに気付いたことがない。でも、これだけの情報が、私の日常生活、そして私の教会での役割にとって意味するところがあるとしたら、それは何だろう」といったようなものかもしれません。その答えはというと、本書に示した真実は、神が誰であるか、私たちがどのようにその神と関わるか、そして私たちの地上における目的を理解することと大いに関係があります。このことをより明確にするために、各章の末尾にこのようなセクションを設け、その章で説明した真実の具体的な意義を解き明かします。

この章では、聖書で神の宇宙的陣営がどのように描写されているか、およびそれらの描写が神、そして究極的には神の私たちへの関わり方についてどのような洞察をもたらしているかを検討しました。

まず、神の天の家族のファミリービジネスは、神が地上の家族とどのように関わるかを示すテンプレートです。このことについては、次の章で詳しく考察しますが、ここに例を挙げておきます。皆さんは神がなぜ会議を必要とするのかとっておられるかもしれません。神は、超自然界においても、何かを行うために助けを必要とするはずはありません。神なのですから。しかし聖書は、神が劣る存在を使って物事を成し遂げられることを明確に示しています。

神は天上の会議を必要としておられるわけではありませんが、それを利用することを選ばれるのです。また、私たちをも必要とされません。神は福音を必要とするすべての人たちに大声ではっきりと語ることによって、神に心向けるように励まし、それを良しとされることもできるのです。また神は、ご自分の声を人々の頭に吹き込むことによって、他人を愛させることもできます。しかし神はそれをなさいません。代わりに、あなたと私も含めた人間を使って物事を成し遂げられます。

次に神は、すべてがご自分の希望どおりになるように、出来事を運命づけることができます。しかし、それはなさいません。アハブ王の物語では、神は天のアシスタントたちに神の御心を遂行する方法を決定させました。つまり、彼らに自由意志を使わせたのです。このことは、すべてが運命づけられているわけではないことを示しています。これは霊界だけではなく、この世界にも当てはまります。

聖書に示された霊界には構造があります。神はGEOです。神に仕える者たちは神の家族です。彼らは神と一緒に統治します。つまり会社の運営に参与しているのです。

驚くことに、聖書は人類についても同様に語っています。エデンでの当初から、神は共に地球を治めるために人類を創造されました。神はアダムとエバにこのように言われました。生めよ、ふえよ、地に満ちよ、地を従わせよ」創世記1・28)。アダムとエバは、神の子、つまり神の地上の家族でした。神は彼らと共に生活し、彼らが全世界をエデンのようにすることに参与することを望みでした。

これはほとんどの読者にとっては親しみのある概念です。いまひとつ明らかではないことは、アダムとエバがエデンにいた神の家族の唯一のメンバーではなかったということです。神の天の家族もそこにいたのです。エデンは、神が住んでおられた場所です。そして神がお住まいのところには神の家族も住んでいます。私たちは天国を、私たちが神とその天使たち、つまり神の家族と一緒に住む場所として考えています。それは当初から意図されていたことであり、将来実現します。新しいグローバルなエデンになって地上に戻った天国 黙示録21・22)で聖書が終わっているのは偶然ではありません。

私たちの運命を理解するには、神の二つの家族が同じ空間に共存していたときに戻る必要があります。園に戻る必要があるのです。

第3章

かつての王と未来の王

神の天上の会議、つまり目に見えない家族とタスクフォースについて、簡単に説明しました。さらに検討しなければならぬことが沢山あります。特に、イエスやサタンなどの主要なキャラクターはこの構図にどのように当てはまるのかを見る必要があります。見えない世界で何が起きているかについての検討に立ち戻る前に、私たち自身について新鮮な角度から考える必要があります。見えない霊界で神の会議を通して行われる神の統治は、地上における神の統治（神学者はこれを神の国と呼んでいます）のテンプレートです。そのすべては創世記のエデンの園で始まりました。

エデンー神の拠点

「エデンの園」と聞いたときに最初に思いつくことは何ですか。私が話したほとんどの人はアダムとエバを考えるそうです。エデンは彼らの住まいでした。神が彼らを置かれた場所です（創世記2・15〜25）。

しかしエデンは神のお住まいでもありません。エゼキエルはエデンを「神の園」（エゼキエル28・13、31・8〜9）と呼んでいます。これは実際に何ら驚くことではありません。それより意外なのは、エゼキエルはエデンを「神の園」と呼んだ直後に、「神の聖なる山」と呼んでいることかもしれません（エゼキエル28・14）。

古代宗教の多くでは、豪華な庭園や近づくに難い山々は、神々の住処と考えられていました。

聖書では、これら両方の表現がエデンに使用されています。エデンは神のお住まいであり、そのため神が諸事を司られた場所でもあります。神の本拠地、拠点でした。

そして神がおられるところには、神の会議も一緒にいます。

神の体現者たち

聖書の最も重要な箇所の一つは、神と神の会議の両方がエデンを住まいとしていたことをほのめかしています。創世記1章26節では、神は「われわれにかたどって人を造り…」とおっしゃっています。神はこの意図をグループに告知されているのです。誰に語りかけておられるのでしょうか。神の天軍、つまり神の会議です。三位一体の他のメンバーに語りかけておられるわけではありません。他のメンバーと神（父）の考えは同じだからです。ここでは、神が語りかけておられるグループに神の決断が伝えられます。

この告知は簡単に理解できません。私が友達に、「ピザを食べに行こう！」と言っているようなものです。そうしよう！明確です。しかしここで見落としてはならないことがあります。神は実際には、このグループを意思決定の過程には含めておられないということです。

神の会議の他のセッションとは異なり、神の会議のメンバーはこの決定には参加していません。その次の節（創世記1・27）では神が人類を創造されていますが、創造者は神のみです。人類の創造は、神ご自身が行われることです。ピザの例えに戻ると、私が自分の言ったことに従って、皆を車に乗せてピザ屋に連れて行き、支払いも私がすると主張した場合、すべては私が行うことになります。人類の創造もそういうことです。

唯一、神のみが人類を創造されるということは理にかなっています。神の会議に属する神族にはそのような力はありません。しかし、このことはさらに奇妙なことに繋がります。創世記1章27節では、人間は神のかたちに創造されています（神は自分のかたちに人を創造された）。創世記1章26節の「われわれのかたち」はどのようなものでしょうか。

実は、どうもなっていないません。「われわれのかたち」から「神のかたち」へ（創世記1・26〜27）の切り替えは、興味深いことを語っています。われわれのかたちに似せて人間を造ろう（Job リビングバイブル）という神の御言葉は、神と、神が語りかけられている者たちとの間に何か共通なことがあることを意味しています。それが何であろうと、人類は創造と同時にそれを共有します。私たちは、どこか神と似ているだけではなく、神の会議を構成する神族とも似ているのです。

その「何か」は、「神のかたち」という語句から伝わってきます。創世記1章26節をより正確に訳すと、神は人類を「神のかたちとして」創造されたということになります。人間であることは神の体現者であることです。私たちは、言ってみれば神を代表する者です。

神のかたちは、知性のように神から与えられた能力ではありません。能力は失うことができますが、神のかたち（体現者）としての地位を失うことは不可能です。そのためには人間でなくなることが必要になるからです。人間はそれぞれ、受胎から死まで、常に人間であり、常に神の体現者なのです。人間の命が聖なるものであるのは、そのためです。

私たちは神をどのように代表しているのでしょうか。前の章で、神は神の見えないタスクフォースである神族とその支配権を共有されていることを説明しました。神は地上の人類ともそれと同じことをされます。神は見えるものも見えないものも含むすべてのもののいと高き王です。神は支配します。神はその支配を霊界と人間界の家族と分かち合われます。私たちが地上にいるのは、神の希望どおりの世界造りに参加し、神と共にそれを楽しむためです。

最終的に神はその方法を教えてくださいました。イエス様は、神を代表した究極的な例です。イエス様は見えない神のかたち（ヨハネ 1・15）、神の本質の真の姿（ヘブル 1・3）と呼ばれています。そのために私たちは御子のかたちに似たものにならなければなりません（ローマ 8・29、第二コリント 3・18）。

二つの会議、一つの宿命

これらすべてに含まれる真意を理解いただけただけでしょうか。人類は基本的に、地上における神の陣営、神の会議なのです。私たちは、神の天の家族と共に神の御前に生きるように創造されました。私たちは神を楽しみ、神に永遠に仕えるように造られています。当初は、地上でもそのようになるはずでした。エデンは天と地が交わった場所でした。神とその会議のメンバーは、人類と同じ空間を占めていました。

それは何のためだったのでしょうか。

神はアダムとエバに「生めよ、ふえよ、地に満ちよ、地を従わせよ。また海の魚と、空の鳥と、地に動くすべての生き物とを治めよ」（創世記 1・28）とおっしゃいました。

これは神の体現者の任務でした。彼らは創造物の世話役兼王として神に仕えるのです。人類の任務は、地を一面に覆い、エデンを地球全体に広め、神の国を拡大することでした。この任務は二人の人間には大きすぎたため、神はアダムとエバが子を作ること望まれました。

ご存知のとおり、アダムとエバ、そしてその子孫は失敗する結果になりました。人類は罪を犯したのです。それさえなければ、地球は徐々にグローバルエデンとなつていったはずですが。私たちは完璧な地球上で永遠の命を持ち、神とその霊的家族と共に生きていたことでしょう。

神は人類を愛しておられたので、アダムとエバをお赦しになりました。しかしあの時点から、人類はアダムとエバの足跡をたどる宿命となったのです。私たちは誰もが罪を犯し、神の介入がなければ、死に値する者です（ローマ6・23）。私たちは人間であるがゆえ罪人なのです。救いが必要なのです。

私たちが神の聖なる家族に加わることを神が望まれているという考えは、聖書で語られている驚くべきことの一部を理解するために役立ちます。

この考え方は、聖書が信者を「神の子」（ヨハネ1・12、11・52、ガラテア3・26、第一ヨハネ3・1〜3）と呼んでいる理由を説明するものでもあります。また、信者が「神の子としての身分が授けられる」（神の家族に養子として迎えられる）（ガラテア4・5〜6、ローマ8・14〜16）と表現されている理由も明らかになります。さらに、私たちが神と神の御国の「相続人」（ガラテア4・7、テトス3・7、ヤコブ2・5）および「神の性質にあずかる者」（第二ペテロ1・4、第一ヨハネ3・2）と呼ばれる理由も語っています。イエス様が、戻られた後で信者に「神のパラダイスにあるいのちの木の実を食べることをゆるそう」（黙示録2・7）とおっしゃっている理由もわかります。神が諸国民を支配する権威を私たちと共有される（黙示録2・26〜28）だけではなく、ご自身の王座も私たちと共有する（黙示録3・21）ことを約束されている理由もわかります。この人生を通して前進することによって、エデンに戻るのです。天国は地上に戻ってきます。

新しいグローバルエデンを治めること、それが来世で私たちが行うことです。私たちは、当初にアダムとエバが協力して作り出すはずであったことを楽しむことになりました。永遠の命とは、始終ハーブを奏でたり歌ったりすることではありません。それは、神ご自身、復活されたイエス様、および私たちの仲間である他の体現者（大間および超自然的存在）と共に、想像を絶するほど完全で汚点のない創造物を発見し、享受していくことです。

このことが重要である理由

意外かもしれませんが、前述のすべては、人生を変えるような考えにつながっています。神のご計画がまだ見えなくても、私たちの人生が神を代表し、そのご計画を進めるものであることを意識しながら生きることにより、私たちが毎日に臨む態度が変わります。

神の元々のご計画は、地球全体をエデンのようにすることでした。神は、地球全体にエデンのような神の統治を拡大することに人類が参与することを望まれました。アダムとエバに、子孫を作り、創造物の主人、世話人となることを命じられました（創世記 1・26～28）。この命令は人間の墜落の後、忘れられたわけではありません。実際、あの恐ろしい洪水の後、この約束が回復されました（創世記 8・17、9・1）。エデンは失われましたが、神はその復興を意図されています。最終的には、神の統治、神の国は、イエス様が再来されて神が新しい天と地（創世記 21章と 22章ではエデンとよく似ている）を創造されるときに、フルスケールで再到来します。そのときまで、私たちは神の真実とイエス様の福音をあらゆる場所に広めることができます。また、あらゆる場所です。私たちが出会った人々に対して、神を体現していくこともできます。私たちは、今ここでエデンを復興するための神の使者であり、イエス様がそのご計画のクライマックスをもたらしにくださる日を待ち望んでいます。

自らを神の使者、神の体現者として意識すると、私たちの意思決定は重要な意味を持ちます。罪に迷うことのなくなったクリスチャンは、聖霊の助けによって神のご計画を達成することができます。私たちがこの地上に置かれているのは、神と生きる人生のすばらしさを、福音を必要としている人たちに広めるためです。彼らもそのような人生を楽しむことができるということ。私たちの人生は多くの人々と交わります。それらの出会いの記憶は、彼らの人生だけではなく、彼らが触れる他の人々の人生へと波紋のように広がります。私たちを通して垣間見ることができるのは、神と一緒に歩む人生か神のいない人生かのいずれかです。その中間はありません。

すべての人間が神の体現者であるということを知ること、私たちは人間の命を聖なるものと見なすようになります。これは、生と死にかかわる重要な倫理的な決定だけにとどまりません。私たちがここまで学んできたことは、お互いをどのように見ているか、および相互にどのように関連し合うのかに大きく影響します。神の世界には人種差別の余地はありません。不正と神を代表することは相容れません。権力乱用は、家庭でも、職場でも、政府でも、どこであっても不信心な行動です。神はエデンで神の子らとそのような接し方はされませんでした。ですから、私たちが神の体現者である仲間たちと関わるうえで、不正が入り込む余地はありません。

最後に、神を代表するということは、どの仕事も神を褒めたたえるものであり、靈的、な召命であることを意味します。その任務はすべて、世界をエデンに近づけ、仲間である他の体現者たちを祝福することの一環となる可能性があります。神は、ミニストリーに従事する人々を、その職務内容のために、より神聖または特別であるとは見なしません。神が大切に思われるのは、私たちがそれぞれ置かれた場所でのように神を代表しているかどうかという事です。暗闇に立ち向かい、神が私たちに希望されるような人生を分かち合う人も、それをしない人もいます。チャンスは目を見張るようなものでなくてもいいのです。ただそれを掴む必要があるだけです。

エデンでの神の意図は壮観なものでしたが、このビジョンははやくにくなりました。完璧なお方は神のみです。天上の存在も含めて、不完全な者の手中に委ねられた自由は、悲惨な結果を引き起こします。

第4章

天上の反逆

前章の最後に、神族か人間かにかかわらず、不完全な存在の手中にある自由意志は、悲惨な結果を引き起こすという見解を書きました。これは控えめな表現です。聖書の前の方の章で語られている大災害は、どれも人間と超自然的存在の両方が関与していますが、そのポイントを表しています。

神が、超自然界では神族と、地上では人類と支配権を共有することをお決めになったことを思い出してください。これが「われわれのかたちに、われわれにかたどって人を造り」創世記1・26」という神の御言葉、および神がその後神にかたどって人類を創造されたという事実の背景となっていました。霊的存在と人類は、神の体現者なのです。私たちは神の支配権を共有し、共同支配者として神を代表しているのです。

一方では、これは素晴らしい決定でした。自由意志は、神に似た者としての一要素です。自由意志がなければ、神のようになることはできません。自由意志なしでは、愛や自己犠牲などの概念は成り立ちません。ただ「愛する」ようにプログラムされているのであれば、意思決定は必要ありません。それは本物の愛ではありません。台本どおりの言葉や行動は本当のものではありません。このことを考えると、私はスター・ウォーズ・シリーズ最後のエピソードの『「エダイの帰還」へ連れ戻されます。オビワン・ケノービの霊が、父ダース・ベイダーが 今では人というよりも機械だ』とルークに告げます。それでも、最後にはそれが真実ではないことが判明します。ベイダーは自分の命と引き換えに帝王からルークを救います。彼は、ただプログラムされた機械ではなかったのです。彼の決断は彼の心からのものです。彼の人間性、彼の自由意志によるものです。

しかし、神の決断には暗い側面があります。知的能力を持った存在に自由を与えるということは、彼らが選択を誤ったり、意図的に反逆したりすることもあることを意味します。これは基本的には、間違いない起こることです。真に完璧な存在は神のみだからです。神が本当に信頼できるのは、神ご自身のみです。エデンで物事がうまくいかなかったのはそのためです。

パラダイスでのトラブル

エデンの設定を考えてみてください。アダムとエバは孤立していませんでした。神の会議と共に神がもそこにおられました。エデンは、地を「従わせ」創世記1・26(28)、エデンの生活を地球の他の場所へ広めるための天・人類の拠点です。しかし、会議の一人のメンバーは神のご計画を快く思っていないませんでした。

創世記1章で見られたように、創世記3章もエデンが他の神族の住処であることをほのめかせています。創世記3章22節では、アダムとエバが罪を犯した後、神は次のようにおっしゃっています。見よ、人はわれわれのひとりとなり、善悪を知るものとなった」。この表現は、創世記1・26(「われわれのかたち」)の表現と同様な道しるべ・手がかりのようなものです。

創世記3章の主役のへびは、本当のへびではありませんでした。実際には動物ではなかったのです。動物園のガラス張りの中に入れようとしても無駄だったでしょう。そのうえ、へびの方も不愉快なことだったでしょう。このへびは天上の存在だったので。ヨハネの黙示録12章9節は、この存在を悪魔、サタンと特定しています。

一部のクリスチャンは、ヨハネの黙示録12章7(12)節に基づいて、天地創造の後まもなく、御使いたちの反逆があったと推測します…

さて、天では戦いが起った。ミカエルとその御使たちとが、龍と戦ったのである。龍もその使たちも応戦したが、勝てなかった。そして、もはや天には彼らのおる所がなくなった。この巨大な龍、すなわち、悪魔とか、サタンとか呼ばれ、全世界を惑わす年を経たへびは、地に投げ落され、その使たちも、もろともに投げ落された 黙示録12・7(9)。

しかし、この箇所に記載された天における戦いは、救い主の誕生と関連付けられています 黙示録12・4(5)、12・10)…

龍は子を産もうとしている女の前に立ち、生れたなら、その子を食い尽くそうとかまえていた。女は男の子を産んだが、彼は鉄のつえをもってすべての国民を治めるべき者である。この子は、神のみもとに、その御座のところ、引き上げられた。

その時わたしは、大きな声が天でこう言うのを聞いた、

今や、われらの神の救と力と

国と、神の

キリストの権威とは、現れた。

われらの兄弟らを訴える者、

夜昼われらの神のみまえて彼らを訴える者は、投げ落された。

聖書は、エデンでの出来事以前に、神の体現者たち（大類か天上の存在かにかかわらず）が神に反対していたり、反旗を翻していたというようなことは一切示していません。創世記3章で状況に劇的な変化がありました。

へびの犯罪は、自由意志によって神の権威を拒否することを選択したことでした。神はアダムとエバがいわゆるファミリービジネスに加わるものと決めておられました。彼らが地球全体にエデンを広げるものだ。しかし、敵はそれを望みませんでした。彼は自分を神の位置に置きました。彼は心のうちに次のように言いました。わたしは天にのぼり、わたしの王座を高く神の星の上におき、神々の山に座する」ネザヤ14・13、[13]からの邦訳。

彼は不快な事実を知ります。へびの策略がアダムとエバの罪につながったため、へびは神の住まいから追放され（全ゼキエル28・14〜16）、天から落ちてしまった」ネザヤ14・12）のです。つまり命が永遠には続かない、死が支配する地上へと追放されたのです。命を与える主人となる代わりに死の主人となったのです。つまり、エデンの出来事が地上での不朽の命の喪失を意味したため、敵は全人類を自分のものとしたこととなります。新しいエデンで永遠の命を持って神と一緒に生きるためには、人類は神によって贖われなければならなくなりました。

副産物は、一連ののろいでした。へびに対するのろいには、預言も含まれていました。神は、エバの子孫とへびの子孫が対立するとおっしゃいました。主なる神はへびに言われた：「わたしは恨みをおく、おまえと女とのあいだに、おまえのすえと女のすえとの間に」創世記3・14〜15）。エバのすえ（子孫）とは誰でしょうか。人類です。ではへびの子孫とは誰でしょうか。これはやや難解です。使徒ヨハネは、へびの子孫の例として、イエス様を憎んでいたユダヤ人のリーダーたちなどを挙げています。イエス様は、あなたがたは自分の父、すなわち、悪魔から出てきた者」とおっしゃっています（ヨハネ8・44）。また裏切り者の

ユダのことも悪魔とお呼びになりました（ヨハネ6・70）。へびの子孫とは、へびと同じように神のご計画に敵対する者すべてのことです。

悪い種

さらに多くのトラブルが発生するまで、そんなに長くはかかりませんでした。アダムとエバの子供の一人が殺人者となってしまったのです。カインはアベルを殺しました。これはカインが、悪しき者から出ている」ことを示しています（第一ヨハネ3・12）。聖書の物語の中で人口が増えるのに伴い、悪もはびこりました（創世記6・5）。

さて今度は別の超自然的な罪が発生します。これは、日曜日の朝のお説教ではあまり語られることがありませんが、地上における悪の拡大に大きな影響を与えました。今回は反逆者が複数いました。創世記6章5節で人類全体に伝播され広まった悪は、同6章1〜4節の神の子らが人間の娘たちにネピリムとして知られる人間の子をませたというストーリーにつながっています。

創世記においては、その他に何が起こったかについてあまり多くが語られていませんが、聖書の他の箇所や、聖書外のユダヤの伝統にもこのストーリーの断片が見られます。新約聖書の著者たちはこれらをよく知っており、聖書でも引用しています。

たとえば、ペテロとユダは、大洪水の前に罪を犯した御使いたちについて書いています（第二ペテロ2・4〜6、ユダ5〜6）。この一部は聖書以外のユダヤの文献を情報源としています。ペテロとユダは、この罪を犯した神の子らは審判の日まで牢獄へ閉じ込められた、つまり服役中だと言っています。

彼らは、聖書で「主の日」と呼ばれている神の最後の審判の一部になります。ペテロとユダの情報源は、聖書学者たちにはよく知られています。その一つは『第一エノク書』という書物です。この書物は、イエス様の時代のユダヤ人や初代教会のクリスチャンに人気がありました。神聖で啓示によるものとは見なされていませんでした。しかし、ペテロとユダはその内容の一部を重要だと考え、自分たちの書いた書簡に含めたほどです。

これらの文献は、神の子らは神的知識を与えることで人類を「助けたい」と思っていたのが横道にそれたか、自分たちの独自の体現者を創造することで神を真似たか、たかどちらかと推測しています。また、悪霊はどこから来ているかについての説明も含んでいます。悪霊は、大洪水の前または最中に殺されたネピリムの亡霊です。これらの悪霊は、人間を苦しめ、再び人間に化身しようとして地上を放浪しています。創世記6章1〜4節に出てくるネピリムの子孫は、聖書の創世記に続く巻ではアナクとレパイ

ム 民数記13・32〜33、申命記2・10〜11）と呼ばれました。これらのレバイムの一部は、へびが投げ倒された下の陰府（イザヤ14・9〜11）に現れます。新約聖書の著者たちは、後にこの場所を地獄と呼んでいます。

これらの考えは、当初のユダヤ人の著者たちが創世記6章1〜4節の脅威を理解していたことを示しています。神の子らは、神族と人類が共存していたエデンを、独自の方法で再編成しようとしていました。彼らは、サタン（敵の元祖）と同様に、地上で起こるべきことについて自分たちの方が神よりもよく知っているものと考えていました。神の統治を復興するためのご計画を変更しようとして、結局、悪い状況をさらに悪くしてしまいました。

創世記6章1〜4節のエピソードは、へびの種と呼応するものでした。つまり神への意図的反抗であっただけでなく、後に起きる一層悪い出来事の前兆でもありました。モーセとヨシユアの頃、イスラエルの民が約束の地を獲得しようとする際に遭遇した一部の敵対者は、散在する巨人の一族でした（申命記2・3）。これらの巨人はさまざまな名前でも知られていました。民数記13章32〜33節では、アナクびとと呼ばれています。彼らは、創世記6章1〜4節に出てくる神の子らの子孫であるネピリムの子孫だといわれています。旧約聖書には、イスラエル人はダビデの時代が来るまで体の大きいこれらの敵と戦っていたと記されています。ダビデはゴリヤテを殺し（第一サムエル17）、ダビデの手下はゴリヤテの兄弟を殺して最終的にこの脅威を取り除きました（第二サムエル21・15〜22）。

このことが重要である理由

へびに対する預言的のろいと、その後が続いた天上の反逆は、神学者が霊的戦いと呼んだ、善と悪の戦い、神とその民に対する長い戦いの初期段階です。それは、見える世界と見えない世界という二つの領域の戦場で繰り広げられる戦いです。

これらのストーリーは奇妙かもしれませんが、次のように重要な教訓を与えてくれます。人間の宿命に関しては、神には天上の競争者がいました。現在もそうです。地球と人類に関する神の御心に対する抵抗は、霊界と人間の世界の両方でいまだに健在です。しかし、神は天と地の再統合について独自の「ご計画」をお持ちです。敵対的な妨害は必ず罰せられます。神にとって人類は大きすぎるほどの価値があるのです。神の人類の家族に関する独自の「ご計画」は、変更されることも覆されることもありません。

これらの御言葉は、前向きな教訓を与えてくれます。神に対する長年の戦いは、自由という神の特質を共有する体现者（大間と神族）を創造しようという神のご決定に遡ることができませんが、神は悪の原因ではありません。

聖書では、神がその体现者たちを促して背かせたとか、体现者たちの反抗が運命づけられているとかいうことは示唆されていません。神が将来を知っておられるという事実は、それが運命づけられていることを意味するわけではありません。ダビデがペリシテ人から城郭都市ケイラを救ったときのご記されている第一サムエル記23章1〜14節などの箇所から、このことを確信できます。戦いの後、サウルはダビデがこの街に知っていることを知ります。サウルはダビデに王座を奪われるのではないかとこの被害妄想から、しばらくの間ダビデを殺そうとしていました。サウルは、城郭の中にダビデを閉じ込めようと、部隊をケイラに送り、計画を知ったダビデは神に次のように尋ねました。

ケイラの人々はわたしを彼の手に移すでしょうか。しもべの聞いたように、サウルは下ってくるでしょうか。イスラエルの神、主よ、どうぞ、しもべに告げてください。」

主は言われた、彼は下って来る：彼らはあなたがたを渡すであろう。」（第一サムエル23・11〜12）

そこでダビデは私たちの誰もがしたであろうことをしました。つまり、大急ぎでこの街を去りました。このことから、神が出来事を予知されていても、運命づけられているとは言えないことがわかります。第一サムエル記23章では、神が二つの出来事を予知されましたが、それは実際には起こりませんでした。神が天上の叛逆と人間の失敗を予知されていたということは、神がそれらを起こさせたということの意味するわけではありません。予知には運命づけは必要ありません。

人間の墜落はこの観点から見ることがあります。神はアダムとエバが失敗することを予知しました。不意を突かれたわけではありません。神は、現実と潜在のすべてのご存知です。神が、この世に悪と反抗が侵入すること、大間を誘惑して反抗させた天の叛逆者と人間の両方の側で、を予知することができたという事実は、神がそれを発生させたことを意味するわけではありません。

私たちが独自に経験する悪についても、同じ見方をする必要があります。神は人間の墜落を予知され、それを正すご計画を備えておられました。また、私たちが罪人として生まれ、正直に言う（と何度も）失敗することも予知でした。しかし、神はそれらの失敗を運命づけてはおられません。私たちは罪を犯したとき、それを自分の罪であると認める必要があります。私たちが罪を犯すのは、それを選ぶからです。神のご意思でそうなったとか、運命だったから選択の余地がなかったなどとは言えません。

しかし、神は私たちに對する愛を示され、わたしたちが まだ罪人であった時、わたしたちのためにキリストが死んで下さった」のです（ローマ5・6〜8）。神は私たちが将来何を行うかを知っておられながら、私たちが愛してくださいました。私たちに罪を犯す自由をくださったのではなく、福音を信じてイエス様のために生きる自由もいただきました。

神は、善良な人たち、そしてクリスチャンにも悪いことが起こることをご存知です。私たちもそれを経験から知っています。悪がこの世の中にあるのは、人々（および神族）に悪を行う自由があるからです。私たちの神は、ご計画を成功させるために、ひどいことを運命づけたり、恐ろしい犯罪の発生を必要としたりするようなひねくれた神ではありません。神が悪を必要とされることは決してありません。神のご計画は、悪があるにも関わらず前進します。悪は克服され、最終的には裁かれるのです。

私たちは、神はなぜ今すぐに悪を廃絶しないのかと尋ねるかもしれませんが、それには理由があります。神が悪を廃絶するには、神のように完全ではない神の体現者（人間と神族）を廃絶しなければなりません。そうすれば悪の問題は解決されますが、他の天上の存在や人類を創造して神と共に統治させようという神の元々のアイデアが大きな間違いであったことになりました。神が間違いを犯すことはありません。

私たちは、神が人間に自由などをお与えにならなければよかつたと思うかもしれませんが、そうだとしたら人類はどうなっていたでしょう。人類に自由を与えることを選択されたことにより、神は私たちを何も考えない奴隷やロボットにしないことを選ばれたのです。自由意志がなければ、奴隷やロボットです。自由は私たちが神と共有する特質ですから、それなしでは、実際に神の体現者となることはできません。神はロボットではありません。神は私たちをご自分の似姿として造られました。これも間違いではありません。神の似姿としての人類という考えを神はとても気に入っておられたため、それとは反対の決定を下すことはできませんでした。そのため、神は悪がこの世に侵入した後、人類を救い、エデンを取り戻し、目から涙をことごとくぬぐい取るための手段を考案されたのです（黙示録7・17、21・4）。

神に對抗する長い戦いを見てください。神はある戦略をお持ちですが、最初の行動を起こされるまでには、状況は悪化します。

第5章

宇宙的地理観

前の章で取り上げた天上の反逆には共通点がありました。どちらとも人類のための神のご計画と神の統治の復興のご計画を横取りすることを狙った超自然的な反逆でした。この章では、人間から始まったもう一つの反逆について検討します。

この反逆は私たちに苦境をもたらし、私たちはそれをいまだに経験しています。そしてその苦境には超自然的な存在が関わっています。神の復興戦略の大闘争は、イエス様の再来しか解決できない状態へと悪化しました。

バベルの塔

バベルの塔の物語 創世記1・1～9)は、聖書の中でも最もよく知られていると同時に、ほとんど理解されていないお話です。子供たちは日曜学校で、神が地上の人間の言語を混乱させたときのこととしてこの物語を学びます。

大洪水の後、神はアダムとエバにお与えになった「地を満たせ」という命令を繰り返されました。神は、神の統治の影響を人類全体に広めようとしておられました。これは、またしてもうまくいきませんでした。人間がそれを拒否したのです。反逆心を持っていた人間には、もっと良いアイデアがありました（彼らはそう思っただけです）。彼らは、全地のおもてに散るのを免れるために塔を建設しようと決めました（創世記11・4）。奇妙な論理です。確かに、見事な塔を建てれば、彼らは有名になることができます（創世記11・4）。しかし、そうだからと言って、彼らが地球全体に散り散りになることをどのように防ぐことができるのでしょうか。

この答えは塔に秘められています。古代バビロンやその周囲の都市がジグラットという塔を建てたことは、聖書学者や考古学者に知られていることです。ジグラットの目的は、人間が神々と出会う場所を提供することでした。これらは神殿域の一部でした。

世界をエデンのようにして、神の知識と統治を津々浦々まで広げるのではなく、彼らが望んだのは神を一箇所に下らせることでした。

それは神のご計画ではなかったため、神は快く思われませんでした。そのようなわけで、神の会議に対して神は再び言われました。さあ、われわれは下って行って、そこで彼らの言葉を乱し、互に言葉が通じないようにしよう」創世記11・7)。神はそれとおりにされ、人類は別れ別れになり、分散しました。この出来事は、創世記10章にリストされた諸国の発祥を説明しています。これがほとんどのクリスチャンが知っている話です。では、彼らが知らない話をしましょう。

神々とその国々

バベルの塔で起こった出来事を説明する箇所は、創世記11章だけではありません。申命記32章8〜9節(9)の邦訳)は次のように説明しています。

いと高き者は人の子らを分け、諸国民にその嗣業を与えられたとき、神の子らの数に照して、もろもろの民の境を定められた。主の分はその民であって、ヤコブはその定められた嗣業である。

訳によっては、最初の文の「神の子ら」の代わりに「イスラエルの子ら」としているものがあります。しかし、バベルの塔の時点ではイスラエルは存在していませんでした。神がアブラハムを召されたのはバベルの出来事後です(創世記12)。イスラエルの子ら」という訳は正しいはずがありません。聖書の最古の手書き原稿である死海文書に見られるのは「神の子ら」という用語です。ESVでは正しい訳が使用されています。

言い回しは重要です。神が国々を分けられたとき、神の子ら^の間で分けられたのです。神は国々を天上の会議のメンバーに割り当てられたのです。これが、聖書が説明するところの、他の国々が他の神々を礼拝するようになった理由です。バベルの出来事までは、神は全人類との関係を希望されていました。しかしバベルでの反逆によりそれが変わりました。神は天上の会議のメンバーに他の国々を統治させることをお決めになりました。

神は人類を裁かれたのです。大洪水の後も、人類は、エデンで開始された神の御国のご計画を再開しませんでした。そのため神は、新しい国家イスラエル 申命記32章9節によると神の「分」を創設することを決定されました。神は、バベルの塔の物語りのすぐ次の章である創世記12章で、アブラハムを召されることによってそれを開始されました。

神による他の神々への諸国の割り当てが旧約聖書全体の骨組みとなっています。どのようにかという、旧約聖書の残りの部分では、他の国々の神々およびそこに住む人たちと対立するイスラエルの神とその民イスラエルについて記述されています。

これは神が最初から意図されたことではありません。神がバベルで国々に対して行われたのは裁きであったことは事実ですが、それらの国々が永久に見捨てられることを意図されておられたわけではないのです。アブラハムと契約を結ばれたとき、神はアブラハムによって「地のすべてのやからは：祝福される」創世記12・3）ことを明らかにされました。神は、いつか諸国を神の家族に戻すことを計画しておられたのです。

パウロはこのことを知っていました。アテネの異教の哲学者たちへの説教で、パウロは次のように言いました。

ひとりの人から、あらゆる民族を造り出して、全世界に散らされました。あらかじめ、どの国がいつ興り、どの国がいつ滅びるかをお決めになり、国々の境界も定められました。

これもみな、人々が神を求め、神を探し出すためでした。事実、神様は私たちから遠く離れておられるではありません。使徒行伝17・26〜27「πνεύμα」からの邦訳。

神はモーセを通してその民に「全天下の万民」申命記4・19〜20）を拜んではならないと警告されました。全天下の万民とは、天上の会議のメンバーを表すために他の箇所でも使用されている表現です 第一列王記22・19）。使徒行伝17章26〜27節では、国々が神を求めるようになることが神の目的であったことが明らかです。

しかし国々の上に置かれた神々は二通りの方法でこの計画を妨害しました。

先ほど詩篇82篇1節で見たとおり、神は会議の神々を集められました。この詩篇全体を読むとその理由がわかります。諸国の神々は、神の真の願いと義の原則に反するような方法で、それらの国々を不正に統治しました。神は会議が始まるのと同時に彼らを次のように告発されました。あなたがたはいつまで不正なさばきをなし、悪しき者に好意を示すのか」詩篇82・2）。3〜4節でも不正についてこれらの神々を攻撃された後、主は、暗闇の中をさまよう国々が真の神に立ち戻るための助けを彼らが与え

なかつたとおっしゃっています。彼らは知ることなく、悟ることもなくて、暗き中をさまよう。地のもろもろの基はゆり動いた」 詩篇82・5)。

悲しいかな、結局のところイスラエル人は真の神を求める代わりに、「授からない」他の神々を拜んだのです 申命記29・26、32・17)。神の反応は次のように迅速で厳しいものでした 詩篇82・6(7)。わたしは言う、あなたがあたがたは神だ、あなたがたは皆いと高き者の子だ。しかし、あなたがたは人のように死に、もろもろの君のひとりのように倒れるであろう」。

神々は永遠の命を失い 詩篇82・7) 人のように死ぬことになったのです。聖書の他の箇所から、この裁きは終末に関係していることがわかっています。ネザヤ34・1(4)。詩篇82篇の最後に、筆者は神が最終的に国々をその嗣業として取り戻されることに希望を託しています。後でわかるように、この願いは新約聖書でかなえられます。

申命記32章の世界観

申命記32章の世界観のため、聖書の地理観は宇宙的です。土地は神聖である(つまりヤハウエに捧げられている)か、異なる神の領域であるかのどちらかです。この世界観は聖書の多くの箇所に反映されています。たとえば旧約聖書のダニエル書では、異国について、天上の「君」たち(ダニエル10・13、20(21))によって治められていると言っています。もう一つ例を挙げましょう。ダビデがサウル王から逃亡しているとき、イスラエルからペリシテびとの領域へと追い込まれました。第一サムエル記26章19節では、ダビデは「彼らはわたしを主の地から追い払い、異教の神々しか拜むことのできない地へとやられたのです」(26)からの邦訳」と叫んでいます。ダビデは別の神に乗り換えたわけではありません。神がどこにでもおられることを否定しているわけでもありません。しかし、イスラエルは聖なる地であり、真の神に属する場所でした。ダビデは、異なる神の領域で身動きがとれない状態だったのです。

この点を強調している、私のお気に入りの旧約聖書の物語は第二列王記5章にあります。ナアマンはシリア軍の司令官でした。彼はライ病患者でもありました。エリシャの指示に従ってヨルダン川で七回身体を洗った後、奇跡的にライ病が癒えました。ナアマンはエリシャに「わたしは今、イスラエルのほか、全地のどこにも神のおられないことを知りませんでした」と言いました(15節)。預言者エリシャは報酬を受け取らないので、ナアマンは驟馬に土を載せて持ち帰ってもよいか、謹んで尋ねました。土ですか。なぜ土が欲しかったのでしょうか。それはその地がイスラエルの神に属していたからです。神聖な地だったのです。

新約聖書でも同じような考え方が見られるのは偶然ではありません。パウロは、敵対的な天上の存在について、支配、権威、主権、位など、さまざまな用語を使用しています（エペソ1・20〜21、3・10、6・12、コロサイ1・16、2・15）。共通点は何でしょう。これらは地理的な統治者の支配権を表すために使われていた周知の用語でした。

使徒パウロは、聞き及んでいたある状況に対応して、コリントの教会に二通の書簡を書きました。最初の書簡では、悔い改めることもなく不品行な生活を送っている人を排除するよう教会のリーダーに命じています（第一コリント5・1〜13）。興味深いことに、パウロは「彼をサタンに引き渡してしまおう」と書いています（第一コリント5・5）。この言い回しをどのように理解すればいいのでしょうか。

パウロが言ったことは、旧約聖書の宇宙的・地理的な世界観の背景に照らしたとき初めて意味を成します。旧約聖書の神学では、イスラエル、および神がイスラエル人に与える土地カナンの地がヤハウエの「分」でした。神の存在がその地を清め、神聖なものにしたのです。当初は、ヤハウエの存在は幕屋の中でした。イスラエルびとが旅を止め野営を張ったとき、契約の箱が中央に配置されることで、イスラエルの野営は聖域となりました。後に、イスラエルがカナンに居を定め、ヤハウエが神殿内に臨在され、約束の地は聖域として清められました。ヤハウエとその民は拠点を得ました。現在は、ヤハウエの臨在は信者の中に宿ります。私たちは神の宮なのです（第一コリント6・19、第二コリント6・16、ローマ8・9）。これは、キリストのからだである信者たちは、神の新しい民、新しいイスラエルであることを意味します。パウロはガラテア人への手紙3章で次のようにこのことを明確にしています。

このことから、心から神に信頼する人はだれでも、アブラハムの真の子孫となることができるのです…

私たちはみな、すでに、イエス・キリストを信じる信仰によって神の子どもとなったからです。バプテスマ（洗礼）を受けてキリストと一体とされた今は、キリストをその身にまもっているのです。もはや、ユダヤ人とギリシヤ人、奴隷と自由人、男と女という区別はありません。みな、キリスト・イエスにあって一つなのです。そして、キリストのものとなった今、私たちはほんとうの意味でアブラハムの子孫であり、アブラハムに与えられた神の約束を相続したのです。ガラテア3・7、26〜29 JCBリビングバイブル

信者、そして信者が集まる場所は聖域であるため、罪は排除しなければなりません。イスラエルびとの野営の周囲の土地や周辺の国々など、他の神々の支配下にあった場所が不浄の地と見なされたように、新約聖書の時代も現在も、世は不浄の地です。その

ために、悔い改めない信者を追い出し、世界つまりサタンの領域に戻すようにというパウロの命令があるわけです。教会から追放されるといふことは、不浄の領域に戻されるといふことでした。罪はそこに属するのです。

このことが重要である理由

バベルで神が国々に裁きを下された結果としての宇宙的地理観は、イスラエルの苦悩の背景です。また福音の土台となります。イエスキリストの十字架での御業のグッドニュースは、神の民がユダヤ人だけではなく、イエスキリストを信ずるすべての人となったことです。ガラテア3)。弟子たちが世界へと入っていくのに伴い、サタンの領域は神の領土へと変えられていきます。神の国は前進し、国々の支配を取り戻していきます。

教訓は、この世は私たちの母国ではないということです。暗闇が地球を覆っています。信じない人たちは、基本的に霊的な力の捕虜となっています。開放されるためには福音が必要です。私たちの武器は福音であることを忘れないでください。私たちは、もろもろの支配や権威に直接対決する権限を与えられていません。使徒たちからそのために受け継いだ霊的賜物はありません。しかし、福音を忠実に述べ伝えることで、形勢は一変します。大宣教命令は霊的戦略です。このことについては、後の章で検討します。

もう一つの教訓は、真の信者の集まりをすべて聖域として見なす必要があるということです。外観、建物、集会のサイズなどには関心を持たれません。重要なのは、二人または三人が集まっているところには、イエスキリストもその中におられる（マタイ18・20）ということです。その空間は聖域です。それがどれだけ小さく、無名であっても、すべての集会は霊的戦いの最前線にあるのです。どの教会も同じ任務を背負っています。暗闇の帝王が勝つことはありません。

宇宙的地理観については、イエスキリストのミニストリーの箇所でも再考します。ひとまず、戦線が張られました。世界の国々は神により裁かれ、相続権を奪われました。神がやり直されるときがきました。つまりご自身の分を分けられるときがきました。

第6章

言、御名、御使い

前章では、聖書の宇宙的な地理観についてお話ししました。バベルでの人類の反逆に応えて、神は国々を見捨てられました。そして天上の会議のメンバーである神の子らに人類を委ねられました（申命記32・8～9）。見捨てられた国々に代えて、神は新しい民、神ご自身の国を造られることになるのです。この民が、神の使者として地上における神の国を取り戻すのです。しかし、その領域にいた他の神々と人々が、イスラエルと神の強敵となるため、この取り組みは非常に難航することになります。

新しい神の民は、アブラムという男から始まります。彼の名前は後にアブラハムに変えられます。バベルの塔での審判の後まもなく、神はアブラムを訪ねられました。

アブラハムが言に出会う

ほとんどのクリスチャンは、創世記12章で神がアブラハムを訪問されたときの話をよく知っています。神はアブラハムに故里を出て見知らぬ土地へ行くように命じられます。神はアブラハムを導いてくださることを約束されます。そしてアブラハムの神となることをお告げになり、特別な契約による約束を与えられます。アブラハムとサラは高齢であったにもかかわらず、子をもうけることができるようにされました。この子から多くの国民が生まれ、それらが神の新しい地上の家族を形成することになります。彼らを通して国々は神の祝福を受けます。

私たちは、アブラハムと神との出会いはアブラハムの頭の中で聞こえた天からの声であると考えがちです。おそらく神が夢に出てこられたのだと考えることもあります。聖書は、神が預言者やその他の人々に対してそのような働きをされたことを明らかにしています。しかし、アブラハムの場合は違います。神はより劇的なことをされました。神が人間として来られたのです。神とアブラハムは直接向かい合って話をしたのです。

創世記12章6〜7節はこのことを示唆しています。聖書は神がアブラハムに現れたと言っています。三つ後の章で神は再度現れます。創世記15・1〜6)。このときは神は幻で、主の言葉」としてアブラハムに臨まれます。言葉」はアブラハムを外へ連れ出し、アブラハムの子孫は数え切れないほどの数になるということを星を見せることによって主張したことからしても、これは頭の中の声ではありませんでした。創世記15・5)。

神は他の場面でも人間としてアブラハムに現れました。創世記18)。約束の子であるイサクに対しても。創世記26・1〜5)、イサクの子に対しても。創世記28・10〜22、31・11〜12、32・24〜50)同じようにして、同じことを約束されました。

人間の姿をした神を表す一方法として、言葉」または神の声は予期しない場所に出てきます。私の好きな例の一つは、第一サムエル記3章にあります。少年であったサムエルは、夜眠ろうとしているときに自分を呼び続ける声を聞きました。サムエルは、祭司エリの下で神に仕えていましたが、最終的にはエリがそれが神であると悟りました。第一サムエル記3章10節で、神がサムエルのところへ再び来られました。主はきて立ち、前のように、サムエルよ、サムエルよ」と呼ばれた。「この記述では神は立っておられますし、章の終わり。第一サムエル3・21)には、主の言葉」は習慣的にサムエルに現れたと書かれているため、これは人間の姿の神であったことがわかります。

神の言葉」が人間の姿で現れたもう一人の預言者はエレミアでした。エレミアが、預言者となる召命を受けたときのこと書かれているエレミア1章には、言葉」が彼に臨んだと書かれています。エレミアは、言葉」を神ご自身と特定しています。主はその御手でエレミアに触れられました。エレミア1・1〜9)。

人間の姿の神

神が人間として現れるというのは、実際にはナザレ人イエスとして地上に来られる以前のずっと昔から、旧約聖書のパターンでした。そのことを考えてみると、なるほどと思います。神は私たちとは全く異なります。聖書は、神の本質、真の栄光の存在を見て、なお生きていることができる人間はいないことを示唆しています。神に物理的に出会った聖書の登場人物は、死ぬものと予測されていました。創世記32・30、申命記5・24、士師記6・22〜24)。しかし、彼らは死にませんでした。それは神が人間の精神が処理できる何か、すなわち炎、雲、そして、クリスチャンの多くが認識する以上に頻繁に)人間などを通してご自身の存在にフィルターをかけておられたためです。

多くの場合、人間の姿による神の出現は、主の使」との出会いとして記述されています。この御使いは、頻繁に登場するキャラクターです。たとえば、モーセに対して燃える柴で現れます。出エジプト記3・31)。柴の中の神は、エジプトから神の民を導

き出すためにモーセを使うと約束されます。神は、ベテルでヤコブの夢の中に現れました（創世記28・10〜22）。この神は主「ヤハウエ」と特定されています。後に、別の夢で神の御使がヤコブに現れ、彼が前にベテルでヤコブが出会った神であることを単刀直入に告げました。

聖書教師たちの多くは、この御使いを神ご自身と特定することをためらいます。しかし、神ご自身であることを確実に示している例が複数あります。最も重要な例は、神がモーセに律法をお与えになって間もなく起こりました。イスラエル人たちが約束の地に旅立つ準備をする中で、神はモーセに次のようにお告げになりました。

見よ、わたしは使をあなたの前につかわし、あなたを道で守らせ、わたしが備えた所に導かせるであろう。あなたはその前に慎み、その言葉に聞き従い、彼にそむいてはならない。わたしの名が彼のうちにあるゆえに、彼はあなたがたのたがをゆるさないであろう。

しかし、もしあなたが彼の声によく聞き従い、すべてわたしが語ることを行うならば、わたしはあなたの敵を敵とし、あなたのあだをあだとするであろう。 出エジプト記23・20〜22)

ここで言う「使」は普通の御使いではありません。この御使いは罪を許すこと（または許さないこと）ができます。この御使いのうちには神の名があります。この表現は奇妙ではありますが、重要です。「名」は、旧約聖書で神ご自身、神の存在そのものまたは神の本質を表現するために使用されていました。たとえば、イザヤ書30章27〜28節では、主の御名を人格として、すなわち神ご自身として位置づけています。

見よ、主の名は遠い所から

燃える怒りと、立ちあがる濃い煙をもって来る。

そのくちびるは憤りで満ち、

その舌は焼きつくす火のごとく、

その息はあふれて首にまで達する流れのようである。

今日でも戒律を順守するユダヤ教徒たちは神を *ha-shem*（御名）と呼びます。

この御使いが人間の姿の神であったということを知るためのもう一つの方法は、出エジプト記23章20〜22節を聖書の別の箇所と比べることです。燃える柴でモーセが出会った御使は、そのうちに神の名前を持つ御使であり、実際にイスラエル人たちをエジプトから救い出し、約束の地へと導きました。士師記2・1〜3)。しかし、主もヨシユア24・17〜18) 神ご自身の存在も申命記4・37〜38) 同様にされました。主」、存在 (Presence)」、および 主の使」は、どれも同じお方、すなわち神を指し示すために使われている表現です。しかし御使いは人間の姿をしています。

この点を主張する最も説得力のある聖書の箇所は、同時に非常に曖昧でもありません。気付く人もあまりいません。それは臨終のシーンです。死を目前にして、ヤコブはヨセフの子供たちに祝福を与えることを望みます。その祝福の中で、ヤコブは彼の生涯における神との出会いのいくつかのエピソードを回想します。彼は祝福を次のように始めます 創世記48・15〜16)。

わが先祖アブラハムとイサクの仕えた神、

生れてからきょうまでわたしを養われた神、

すべての災からわたしをあがなわれたみ使よ…

そして、創世記48章16節では、ヤコブは何と そのお方がこの子供たちを祝福してくださいますように」 *אֲנִי* からの邦語訳)と祈っています。神と御使いの二人の人格のことを言うように 彼らがこの子供たちを祝福してくださいますように」とは言っています。ヤコブは そのお方がこの子供たちを祝福してくださいますように」という祈りにおいて神と御使いを融合させています。

さらにシヨッキングなのは士師記6章のギデオンの召しです。主と主の御使いの両方が同じシーンに登場します 6・22〜23)。旧約聖書でも、神は一人以上の人格でした。そしてそれらの人格の一人が人として来られたのです。

イエスー言、御名、御使い

ここまでの神についての記述はお馴染みの神です。つまり新約聖書で語られているイエス様の旧約バージョンです。

アブラハムは人間の姿の神である言に出会いました。ヨハネ1章1節で、使徒ヨハネは次のように書き記しています。初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。ヨハネ1章14節でヨハネは言が 肉体となり、わたしたちのうちに宿っ

た」と言っています。ヨハネの福音を一世紀のユダヤ人が読んだとき、その心は言として来られた神ご自身へといぎなわれます。実際、イエス様はアブラハムが 彼（イエス様）のこの日を見た」、そしてアブラハムの生れる前からイエス様はおられたと断言されました。

モーセは、燃える柴で、そしてその後も、主の御使い、つまり人間の姿の神に出会いました。御使いはイスラエルをエジプトから約束の地へと導きました。しかし、ユダはその短い手紙に あなたがたはみな、じゅうぶん知っていることではあるが、主が民をエジプトの地から救い出して後、不信仰な者を滅ぼされたことを、思い起してもらいたい。」（ユダの手紙5）と綴っています。御使いは人間の姿の神でした。御使いは、後に聖処女マリアに生まれる三位一体の第二の人格だったのです。

神の存在と御名により、この御使いは他のすべての御使いたちと区別されました。新約聖書では、イエス様は折に触れて「御名」として父なる神のことを語っています。十字架へとつながる裁判のために捕らわれる直前、ゲツセマネの園でイエス様は次のように祈られました。父よ、世が造られる前に、わたしがみそばで持っていた栄光で、今みにわたしを輝かせて下さい。わたしは、あなたが世から選んでわたしに賜った人々に、み名をあらわしました。そしてわたしは彼らに御名を知らせました」（ヨハネ17・5〜6、26）。この最後の文章でイエス様は何を意味されたのでしょうか。イエス様は、神の名前が何であるかを人々に知らせたとはおっしゃっていません。彼らはユダヤ人でした。神の名前は知っていました。それはヤハウェです。彼らは旧約聖書を持っていました。聖書の数千の節から神の名前を調べることもできます。イエス様が人々に御名を表したというのは、神ご自身を人々に表したという意味です。イエス様は人々が目の前にした神だったのです。イエス様は肉となられた御名だったのです。

このことが重要である理由

この考察において、聖書的な情勢を理解するところまできました。皆さんがご存知の聖書の物語はすべて、見えない世界における重要な霊的争いを背景として起こっています。それは神々による勝者総獲得の衝突です。

見えない世界についての聖書の見解では、神には強敵がいました。神が創造された他の神々です。彼らはかつては神に忠実でしたが、神に背きました。パウロが闇の世の主権者、支配、権威、および位（エペソ6・11、コロサイ1・16）として表現したのは、これらの叛逆の神々です。彼らは依然としてこの世に存在します。新約聖書には、彼らがいなくなったとはどこにも書かれていません。彼らは神の支配に反対するために生きています。福音によって神が愛する人間の家族と永遠に結ばれることを否むために生きています。

これらの闇の世の主権者の一人は死の神です。アダムとエバはこの神に騙されて永遠の命を失ったため、この神は人間に対して正当な権利を持っています。ヤハウエの民の絶滅がこの神の目的でした。イスラエル人たちがカナンに入ったときに神の子孫が考えていたのは、神の民がカナンを獲得するのを防ぐために、殺すか殺されるかの戦いを展開することでした。イスラエルがこの土地に入ったあとも、闇の世の主権者の目的は変わりませんが、戦略は変わりました。つまり神の民を誘惑して、他の神々を崇拜させれば、ヤハウエは彼らを追い出すだろうということでした。実際そのとおりになりました。神はその民を追放されました。

しかし、闇の世の主権者は、ヤハウエがご自身のご計画を断念される方ではないことも知っていました。元々の反逆に対するのろいでは、エデンにおける人間の墮落による影響を元に戻すことのできるエバの子孫が、やがてやってくるのが預言されています。闇の世の主権者は、ある時点で約束の君が出現することは知っていましたが、パウロが言うように、神のご計画を正確には把握していませんでした。第一コロサイ2・6〜8、エペソ3・10、6・12)。それは、いと高き神によって、全人類から意図的に隠されたミステリーだったからです。

第7章

交戦の規則

ここまでのあらすじ：神はバベルで国々とその人々を見捨てられました。それらの諸国民に割り当てられた神々が支配権を持ちました。申命記32・8～9）。神がアブラハムによって再出発されたとき、イスラエルの影響を通して、いつかそれらの諸国を取り戻す計画であることは明らかでした。しかしそのためには、諸国の神々は、その主権と崇敬を放棄することが求められます。詩篇82・6～8）。それは見える世界と見えない世界の両方における争いを意味しました。イスラエルは、生まれると同時にそれらの神々の照準となりました。

ヤハウ エとは？

聖書の物語の中でイスラエルの立場が不安定になるまで、あまり時間はかかりませんでした。ヨセフの物語 創世記37～50）にイスラエルがエジプトへ行った理由が説明されています。兄弟たちはヨセフに対して悪をたくらみましたが、神の摂理によってそれは飢饉からのイスラエルの救いに変えられました。創世記46・3～4、50・20）。エジプトからすぐに出ることをイスラエルに命じられなかったのも神の意図でした。神は、ヨセフに尊敬の念を持っていたパロの死に伴って、敵が次の王の座に就くことになることをご存知でした。出エジプト記1）。神はエジプトがイスラエルに強制労働を課すことを予見しておられました。創世記15・13～16）また、ときが熟したらご自身がイスラエルを救い出されることもご存知でした。創世記46・4）。

しかし、なぜ待つ必要があったのでしょうか。神は、苦しみに対して常に適切な理由をお持ちです。私たちは、必ずしもそれを理解できるわけではありません。しかしヨセフの場合、聖書の言葉によって理由が明らかにされています。

モーセがエジプトから逃れて荒野に居を定めた後、神はモーセをエジプトへ送り返すために、燃える柴で彼を召されました。出エジプト記3・1～14）。その命令は単純でした。パロに「わたしの民を去らせよ」出エジプト記5・1）と告げることで

した。しかしパロには別の考えがありました。エジプトではパロは生身の神であり、その栄光と権力の象徴でした。このパロが、ヘブルの牧者たちの神である見えない神の言うなりになることなどはありえませんでした。彼はモーセの神が実在するかどうかも知りませんでした。彼は「主とはいったい何者か。わたしがその声に聞き従ってイスラエルを去らせなければならぬのか」出エジプト記5・2」と嘲るように答えました。

間もなく神からの答えが返ってきます。手痛い答えです。神がパロを畏にはめたのです。神は「わたしが彼の心をかたくなにするので、彼は民を去らせないであろう」出エジプト記4・21」とおっしゃっています。神はエジプトと戦う必要がありました。何世紀にもわたってイスラエルを虐げてきたエジプトとその神々が罰せられるときがきたのです。パロがかたくなになったのもその策略の一部でした。聖書は、それから訪れる災難（特に長男の死）がエジプトの神々を狙ったものであったことを語っています。出エジプト記12・12、民数記33・4）。これはパロの家系に対する直接的な攻撃となりました。夜中になって主はエジプトの国の、すべてのういご、すなわち位に座するパロのういごから、地下のひとやにおる捕虜のういごにいたるまで、また、すべての家畜のういごを撃たれた」出エジプト記12・29）。

パロは神を嘲けていましたが、形勢は大逆転したのです。後にパウロが言っているように、まちがってはいけない、神は侮られるようなかたではない」ガラテア6・7）のです。イスラエルをエジプトから解放する過程でエジプトに及んだ打撃は、望ましい効果をもたらしました。イスラエルの神がエジプトとその神々に与えた痛手について、はるか遠くのカナンまで伝わったのです。ヨシユア2・8〜10）。モーセがようやく戻ってくると、その舅であるミデアンびとのエテロは、次のように教訓を総括しました。今こそわたしは知った。主はあらゆる神々にまさって大いにいますことを」出エジプト記18・11）。

ですから、紅海に向こう側で、パロとその軍を嘲けて、次のように独自の問いかけを行ったのは不思議ではありません。主のよきな神がほかにいるだろうか。出エジプト記15・11）。

エジプトを脱出して紅海を通過した後、イスラエルびとたちはどこを目指しているかを知りました。彼らは神の地上の住まいであり拠点であるシナイ山で神と対面するのです。

実のところ、イスラエルびとたちは神についてあまり知りませんでした。出エジプトの当時は聖書はまったくありませんでした。神についてイスラエルびとたちが持っていた唯一の知識は、親から聞き、世代から世代へと伝承されてきた物語から得たものです。

今日、聖書でその物語を読むことにより、私たちは神が何をされようとしておられたのかを明確に理解することができます。イスラエルびとたちには学ぶことがたくさんありました。シナイ山は教室のようなものでした。

イスラエル―神の家族と地上の代表者

エジプトを出る前に、パロの前に立ったモーセは、神から次のようなメッセージがあることを彼に告げました。オスラエルはわたしの子、わたしの長子である。…わたしの子を去らせて、わたしに仕えさせなさい」出エジプト記・22(23)。神に息子がいるという考えは重要です。ここではそれはアブラハムの全子孫を指しています。この考えは、神によるアダムとエバの創造に遡ります。

神は人間の家族を望んでおられました。神が造られた地球上で、神が造られた人類と一緒に住むことを望まれたのです。神は見えない家族と人間の家族が神と共に住み、仕えることを望まれました。そして人類が増殖し、地球全体がエデンのようになること。しかし、神がバベルの塔で人類を見捨てられた時点では、神には子がいませんでした。アブラハムを召されるまでは。イスラエルは神の新しい家族でした。当初のご計画に立ち戻るときが来たのです。アダムとエバが神の地上の似姿であったように、イスラエルがその役割を果たすこととなります。

シナイに戻ることは帰郷を意味しました。天上の会議もそこにいて、神のご計画が再発動されるのを見ていました。彼らは神とその民との間の新しい契約、すなわち律法の証人となりました。

神の律法―神の会議によって伝えられる

神が十戒を言い渡されたときには天上の会議がシナイにいたと申し上げましたが、驚きましたか。出エジプトとシナイへの旅に関する映画には御使いたちは出てきません。しかし、聖書は御使いたちがそこにいたと言っています。御使いたちが神の律法を伝えたとさえ言っています 使徒行伝 7・52(53)。

また、律法は「神の指を持って書きしるした」とも記されています 申命記 9・9(10)。この表現はお馴染みでしょう。人間の姿をした神です。神はシナイにおられ、創世記に出てくる主の御使いについてのストーリーのように、人間として出現されました。神とその天の万軍がモーセとイスラエルに律法をお与えになったのです。

律法をいただいたモーセ、アロン、アロンの息子たち、およびイスラエルの七十人の長老たちは、ふたたび人間の姿のイスラエルの神を見ることができずした。このときは会って食事をしました。出エジプト記24・9〜11）。イエス様の時代の最後の晩餐が主の血による新しい契約を確定したのと同様に、この食事もシナイにおける神のイスラエルとの新しい契約、つまり律法を祝うためのものでした。

神はイスラエルが聖くなるように、律法をお与えになりました。ヤビ記19・2）。神は、自身の家族として誰にでも識別できるようにイスラエルが他の民から区別されることを望まれました。神が他のすべての神々および地上のすべてと異なるように、神の民も他の民とはつきりと異なる必要がありました。

聖さとは何を意味したのでしょう。その背景となった概念は何だったのでしょうか。聖さは奇妙であることではありません。聖さとは、神と一体になること、神に献身すること、そして神と正しい関係にあることによってもたらされる、人生の良いことをすべて楽しむことです。神は他の諸国がイスラエルによつて魅了され、神のもとに戻ることを望んでおられました。申命記4・6〜8、28・9〜10）。聖書でイスラエルが「祭司の国」出エジプト記19・6）、および「もろもろの国びとの光」ネザヤ42・6、49・6、51・4、60・3）と呼ばれているのはそのためです。すべての国々を祝福するために国全体がアブラハムの地位を継承しました。創世記12・3）。

信じる忠誠

神と正しい関係にあることは、救いについて語るもう一つの方法です。しかし、私たちが日曜学校でよく教えられたことにもかかわらず、イスラエルの救いは規則を守ること、律法を厳守することによって実現されたものではありません。旧約新約を問わず、救いは獲得するものでも受けて当然のものでもありません。信仰に答えて神の恵みによつて与えられるものです。

イエス様の死と復活の後に生まれた私たちと同様に、イスラエルにも信仰が必要でした。神がすべての神の中の神であること、神がイスラエルをご自分の民とされたことを信じる必要があります。神の中の神にアクセスできるのはイスラエルだけでした。律法は、イスラエルがどのように救いを達成するかということではなく、彼らが信じる神に対してどのように忠誠を示したかということにかかわります。イスラエルの救いは、神の中の神の約束と人格を信じることで、そして他の神の崇拜を拒否することでした。それは心から信じる、ことと忠誠を尽くす、ことでした。

ダビデ王は、姦淫を犯したり、殺人を画策したりするなど、恐ろしいことを行いました（第二サムエル記11）。律法に従うと、ダビデ王は法に違反した者であり、死に値しました。それでも、いと高き神としてのヤハウェに対する信仰が揺らぐことはありませんでした。彼の忠誠が他の神に移ることはありませんでした。神はダビデに慈悲深く対応されました。

新約聖書でも同様です。福音を信じることは、イスラエルの神が人間として地上に來られ、私たちの罪の犠牲としてご自分の意思で十字架で亡くなられ、三日目に復活されたということを経験することです。私たちは、それを信仰によって受け入れ、他のすべての神々を見捨てることによってイエス様への忠誠を示さなければなりません。他の神々が救いについて何と言っているかにかかわらず、聖書は、イエス様以外の名による救いはありません。使徒行伝4・12）、そして信仰を変わずに持ち続ける必要がある（ローマ11・17〜24、ヘブル3・19、10・22、38〜39）と言っています。個人的な失敗は、イエス様を別の神と引き換えることとは違います。神にはその差がおわかりです。

このことが重要である理由

出エジプトと、シナイでの出来事には興味深い象徴性があります。モーセたちが人間の姿をした神とシナイ山で食事をするシーンは、即座に私たちの注意を引きまします。モーセと一緒に七十人の長老がいます。神がお見捨てになった国々が創世記10章に出てきますが、それらを数えると七十か国あります。イスラエルの神がこれらの諸国を裁かれたとき、これらの諸国は神の子ら（つまり他の神々に割り当てられました。申命記4・19〜20、32・8〜9）。長老七十人、神の子ら七十人、そして廃嫡された諸国七か国であるのは、なぜでしょう。

この一致は意図的なものです。イエス様が地上のミニストリーを開始されたとき、七十人の弟子をお遣わしになりました（ルカ10・1 JCB リビングバイブル）。これは大宣教命令の前触れでした。この数は、イエス様の弟子が神の国の支配のための諸国を取り戻すという考えを示しています。神の国は、ヨハネの黙示録21〜22章に出てくる新しいグローバルなエデンで、終末のときに最終的な形になります。七十という数が繰り返されていることには、神の地上の新しい家族であるイスラエル、すなわちアブラハムの子らが、失ったものを回復するための手段となるというメッセージが秘められています。

しかしそれだけではありません。使徒パウロはガラテア3章に、信じる者はアブラハムに与えられた約束を継承したと書いています。イエス様を信じる者はすべて信仰をとおしてアブラハムの子です（ガラテア3・26〜29）。つまり、あなたも私も神々から

諸国を取り返す任務を負っているのです。他の神々の霊的支配からイエス様への信仰へと人々を導くことは私たちの任務です。私たちは地上における神の新しい会議です。そして天の栄光を授かるとき、私たちは新しいエデンで神の天上の家族に合流します。

聖書は、これらの考えを多くの箇所ですべて伝えています。ヨハネの黙示録は、終末に信者がイエス様と共に諸国の統治を継承することを記述しています。黙示録3・21)。それは、バベル以来これらの諸国を支配してきた神の子らに私たちが取って代わることを意味します。信じる者には、神の子となる権力がある。ヨハネ1・12、第一ヨハネ3・1〜3)とヨハネが言っているのは、そのためです。終末には、実際に天上にあつて敵対的な神の子に私たちが取って代わります。

信者間の争いを世の法定に解決させるのを止めさせるために、信者たちへ手紙を書いたとき、パウロが「あなたがたは知らないのか、わたしたちは御使をささげばく者である」(第一コリント6・3)と言っているのもそのためです。新しい地球上で神聖なものとなる栄光を授かる)とき、私たちは御使いたちよりも上の地位に置かれます。私たちはいつの日かイエス様に似たものにされ(第一ヨハネ3・1〜3、第一コリント15・35〜49)、現在神に敵対する神々の支配下にある諸国をイエス様と共に統治します。黙示録2・26)。アブラハムの霊的の子孫である信者たちは、最終的には、エデンでの失敗に起因する死のろいと共に諸国の廃嫡を覆します。

私たちはこの宿命を信じているかのように生きる必要があります。旧約聖書の計画のすべてが私たちにつながっているのです。エデンを振り返ってみてください。神は天上の家族と人間の家族という神の二つの家族がエデンで生活し、共に統治することを望んでおられました。そのご計画は反逆によって破壊されてしまいましたが、エジプトからのイスラエルの救いによって蘇りました。アブラハムの子孫からメシアが出て、エデンでの失敗を取り消します。創世記3・15)。イスラエルなしには、私たちの宿命はありません。

神々とその信奉者たちがふたたびイスラエルを抹消しようとするのは、まさにそのためです。

第8章

聖なる空間

イスラエルは、シナイ山で一年以上過ぎました。なぜそんなに長い間シナイ山にいる必要があったのでしょうか。彼らは既に神と契約を結び、十戒を授かっていました。

しかし、学ぶことはまだたくさんありました。

祖先のアブラハム、イサク、ヤコブの神を信じ、忠誠であることを約束することと、神が期待されること、および神がどのような方かを知ることが別のことです。

聖さの概念

旧約聖書にある風変わりな律法や慣例の多くは、神が唯一、無二であることを人々に教える必要性に基づいていました。その性質と品性において、神は無二であり、人間やその他のものとは完全に異なります。イスラエルにとっては、それは常時強調しなければならぬ真実でした。それを怠れば、神が普通の存在であると考えられてしまうかもしれないからです。

神特有の唯一無二性の考えを示すために聖書で使われている言葉は「聖さ」です。それは「聖別される」こと、または「はっきりと異なる」ことを意味します。この概念は必ずしも道徳的な行いに関するもの、つまり、私たちは神固有の道徳的基準を反映するよう行動するべきであるという考えに関するものではありません。ただし、それが含まれてはいることは事実です。レビ記19・2)。

神は単に聖さについての知的な説明をイスラエルに与えることに満足されていませんでした。神の唯一無二性の概念が古代イスラエルの生活に浸透することを神は望まれていたのです。聖書には、儀式（象徴的行動）を通して、そして聖なる領域に近づくための規則によってこれが成し遂げられていたと書かれています。

神はどのように 無二であるか？

この問いに対する短い答えは「あらゆる面において」ですが、それでは抽象的すぎます。聖書はずっと現実的であり、イスラエル社会での生活の儀式や規則がそれを反映しています。

たとえば、聖書は神がイスラエルの生命の源泉であっただけではなく、生命そのものであったことを教えています。神は、死、病、欠陥のあるこの地球のものではありません。神の領域は超自然です。私たちの領域はこの世です。神が占める地上の空間は、神の存在によって聖なるものとなり、異世界のものとなります。私たちが占める空間は普通の空間です。神は「普通」とは正反対です。

古代イスラエルでは、人々は、神と同じ空間を占めるためには、招かれ、清められなければならないという事実がこの考えが反映されています。旧約聖書の多くの法がこの清めを統制しています。

イスラエルの人々はさまざまな活動や条件によって、この聖なる空間を占めることに対して不適格（汚れたもの）とされました。性交、失血、特定の身体障害、および死体（大間・動物）との接触はすべて、イスラエル人を汚れたものにしていました。イスラエルの人々は、動物の死骸を食べる特定の猛禽（はげわし、たか）（レビ記 11・13〜19）や、死骸の中にあることのある生き物（さかげ、ねずみ）（レビ記 11・24〜40）を食べることを禁じられていました。

これらの場合、汚れは道徳上のことではなく、命の喪失、および神の完全性への不適合に関連していました。論理は単純でも、現代人の考え方には馴染まないものです。失血や精液は、命を作り維持するものの喪失として受け取られました。神を命の喪失に関連付けてはならず、命を与えるお方として考える必要があります。そのような体液を失った後に「清め」を要求することにより、神の本質を思いださせました。死体に触れた後で汚れたものとなった後にも同様な「清め」が必要とされました。肉体的な欠陥や怪我のためにイスラエルの神聖な領域から除外されることもあります。この場合、それは欠陥が神の完全性とは相容れないからです。

これらすべての律法は、超自然的な世界観を強調することを意図していました。

汚れの問題の解決

汚れていて、聖なる空間に近づくには不相応であることは、古代イスラエルの人々にとって重大な問題でした。汚れている人は所定の場所に犠牲や捧げ物を持っていくことはできませんでした。解決策は、儀式的な清めでした。この儀式自体に犠牲が要されることも、待ち期間があることもありました。

犠牲の血の論理、つまり人または物に血をつけたり振りかけたりすることによって、清いとされ、聖なる空間を占めることができるという考えは、私たちにとって馴染みのないものです。しかし、犠牲の血には神学的目的がありました。それは贖い（代償）の概念を紹介することでした。血液は生命力（レビ記17・11）であったため、動物の命を奪うことにより、神ご自身の条件以外の方法で神に近づくことは死を意味するという教訓を教えました。犠牲の血は、イスラエル人の汚れた不潔な状態を正すための慈悲深い代償でした。

教えのポイントは、犠牲による贖いによって神がイスラエル人の命を守られたということです。人間は神の似姿に造られているため、人命は動物の命よりも神聖だったので（創世記1・26、9・6）。イスラエルの人々はその存在そのものを、アブラハムとサライが子供を授かることを可能にした超自然的介入に負っていました（創世記12・1〜3）。しかし、人間の命は、聖なる神の前には危機にありました。犠牲は、神が生と死を支配する力をお持ちであること、そして神はイスラエルに哀れみをかけることをお望みであることを人々に思い起こさせました。

地上の天国 および地獄

神の唯一無二性に注意を向けることにより、神についてだけではなく、超自然的な境界についての考えも伝えられました。領域の区別」という考えは、イスラエルの超自然的な世界観の基盤となりました。神の存在の宿る場所が聖であるとする、それ以外の場所は聖ではなく、普通であるか、場合によっては敵対的な悪の場所でした。

神ご自身の存在は、エデンを思い起こさせるものによって示されました。幕屋と神殿の多くの特徴は、人々が、天と地が融合したエデンを思い起こすように設計されていました。金の燭台は、命の木にちなみ、木のように形作られ、飾りが施されました（出エジプト記25・31〜40）。

この燭台は、神の座として機能するように設計された蓋のあるあかしの箱（出エジプト記25・10〜22）が置かれていた至聖所の入り口をさえぎっていた垂幕の前に配置されていました。

至聖所内のケルビムも、エデンとのつながりを明確に示しています。エデンの園のケルビムは、エデンの神の住まいを守っていました（創世記 3・24）。

至聖所内のケルビムは、あかしの箱の蓋（贖罪所）を守っていました（出エジプト記 25・18～20）。後に、ソロモンが神殿を建設した後、幕屋の天幕構造は神殿内に移動し、二体の巨大なケルビムが神の御座として箱の上に設置され、あかしの箱は神の足台となりました（第一歴代志 28・2）。

また、神殿は、豊かに生い茂る木々と動物のイメージであふれるエデンの園のように飾られました（第一列王記 6・7）。花々、ヤシの木、ライオン、ザクロなどが建築物に彫り込まれました。これらは神が人間の家族と住むために最初に地上に来られたときの場所を視覚的に呼び起こすものでした。

イスラエルの人々は、宇宙の地理の暗い側面も思い起こす必要がありました。イスラエルの宿営、そして後にはイスラエルの国家が聖域（神とその民の住まい）であるとすると、イスラエルの外の地域は非聖域でした。

神は、シナイ山よりもずっと前に、他の諸国をお見捨てになり、他の神々にそれらを与えられました（申命記 4・19～20、32・8～9）。

神はいずれの日にかこれらの諸国を取り戻されますが、聖書の時代にはこれらの諸国は暗黒の領域でした。イスラエルの儀式の一つがこの教訓を忘れないほどの詳細をもって痛感させてくれます。

それはレビ記 16章に説明されています。毎年守られているその贖罪の日（ヨーム・キップール）には、聖域と非聖域についての興味深い教訓的実例が含まれていました。

二頭のやぎが関わっています。二頭は犠牲となり、その血は一年分の人間の汚れを清めるために聖所に撒かれました。犠牲となったやぎは「主のため」のものでした。他方のやぎは殺されず、祭司が象徴的に人々の罪をそのやぎに移行した後で、荒れ野に送られました。そのやぎは「アザゼルのため」のものでした。

「アザゼル」とは誰・何なのでしょう。訳によつては、アザゼルの代わりに身代わり、という言葉を使っているものもあります。死海文書では、問題のヘブライ語は悪霊の名前を表す固有名詞です。約束の地へと荒れ野を旅する間、イスラエルの人々は、悪の勢力が宿営を脅すことを恐れたため、悪霊に犠牲を捧げてきました（レビ記 17・7）。なんとと言っても荒れ野はイスラエルの宿営の外であったため、悪の実体の領域でした。この習慣は止めなければならず、アザゼルのためのやぎがそれを達成したのです。アザゼルのためのやぎは、悪の神々への供え物ではありませんでした。つまりやぎは犠牲の捧げ物にはされなかったのです。代わりに、このやぎを荒れ野に追いやることは、聖域（イスラエルの宿営）を罪から清めるための象徴的な方法でした。

このことが重要である理由

新約聖書では、さまざまな変化がありました。同時に、そのままであったとも言えます。神は依然として唯一無二のお方です。神は聖なるお方であるため、神の御前に出るには私たちも清められる必要があります。これは、イエス様の十字架での御業を信じることによって達成できます。

イエス様が私たちに代わって行ってくださいましたことすべてに超自然的な含みがあります。彼は荒野野、すなわち悪の勢力のある場所へ行かれ、サタンの誘惑を克服されました。この出来事の後、イエス様のミニストリーが始まり、最後には「死の力を持つ」悪魔に打ち勝たれました（ブル2・14）。イエス様は聖都の外で十字架につけられました（ブル13・12）。私たちの罪を負われたイエス様は汚れた者になりました。そしてエルサレムは聖域だったのです。

イエス様の死と復活が私たちを清め、神の御前に出るのにふさわしい者とされるのです。私たちの罪は「取り去られた」のです（ローマ11・27、第一ヨハネ3・5も参照）。汚れた罪びとであっても、キリストにある者は聖なる者なのです。不完全であっても、イエス様のために私たちの欠陥は度外視されるのです。簡単なことなのです。それでいて奥深い意味を持ちます。

私たちは、イスラエルの人々は多くの意味で私たちよりも霊的に恵まれていたと考えがちです。なんといっても彼らにはその真つ只中に神の存在があったのです。彼らは超自然的、宇宙的地理が現実であった世界に住んでいました。私たちは、イスラエルの人々が持っていたものを持ってさえいれば、そして神を絶えず思い起こさせるものが現実であったとしたら、もっと霊的であったであろうと考えがちです。

新約聖書は、私たちの現実には神を絶えず思い起こさせるものがあると述べています。

聖域をマークするための幕屋や神殿は要りません。私たちの体が聖域なのです。パウロは、地に属する私たちの体を「幕屋」と読んでいます（第二コリント5・4）。それは至聖所を満たしたあの神の存在が私たちの中にも宿っておられるからです（ローマ8・9〜11）。この地上における私たちの霊の住まいである体は最終的には死に、大の手によらない永遠の家（第二コリント5・1〜3）である天から賜われるそのすみか、つまり新しいエデン（地上に戻った天国）によって置き換えられるのです。

今日、神はその霊を通して信者に内在されるため、教会や信者の集いはどれも聖域なのです。悔い改めず罪に生きているクリスチャンを追放するようにコリントの人々に告げるときにパウロが「彼をサタンに引き渡す」ようにと指示したのはそのためです。教会は聖域だったのです。信者の交わりの外は、サタンの領域でした。罪とその自己破壊が属するのはこの領域でした。

超自然的な目で自らを見るとときが来ています。あなたは聖なる空間にふさわしい神の子です。それはあなたがすることやしないことのためではなく、キリストに在って神から子たる身分を授けられているからです（ローマ8・15、ガラテア4・5）。あなたは暗闇の領域から救い出され、その愛する御子の支配下に移された」のです（コロサイ1・13）。

私たちはキリストに在っての自分と、それが世界に対して持つ意味を片時も忘れてはなりません。

第9章

聖戦

聖書は論議の的となる書物です。聖書を神の御言葉と見なさない人たちは、その内容に反論することがよくあります。しかし、聖書の一部はクリスチャンにも違和感をもたらします。約束の地を征服するためのイスラエルの戦いがその適例です。

なぜでしょう。それは主に殺害のためです。無差別で徹底しすぎているように思えます。都市の全人口、つまり男性、女性、子供、そして家畜までも殺す必要があったのはなぜでしょうか。居住者に降参させればよかったのではないのでしょうか。虐殺するよりも追放した方がよかつたのではないのでしょうか。

これらの反対意見には答えがありますが、その答えはクリスチャンにとって問題と同じほど違和感のあるものです。征服の話をイスラエル人の超自然的世界観を通して見てはじめて、その論拠と動機を理解できます。

イスラエルの超自然的論理

約束の地を獲得するための戦いには、二つの要因があります。どちらの要因も、世界を人間の住まいとしてだけでなく、見えないう霊的な戦いの戦利品として見るイスラエルの世界観に深く根差しています。既にそれら両方について検討しましたが、再確認しましょう。

一つの要因は、バベルの塔での出来事からの影響です。バベルの塔で、諸国が神に反逆した後、神はそれらの諸国との直接的な関係を望まないと決心されました。代わりに、神の会議、つまり神の子らにそれらの諸国の統治を委ねられました（申命記4・19〜20、32・8〜9）。その後、神はアブラハムを召され、彼とその妻サラが子（イサク）をもうけることができるようにされました。イサクはイスラエルの民の祖先となるのです。

詩篇82篇ではこれらの神々が墮落してしまったことを学びました。彼らは不正を許容しました。人々はいと高き神の代わりにこれらの神々を拝みにきました。そのため、彼らは神とその民であるイスラエルの敵となりました。これらの諸国の一部は、神がエジプトの後で神の国家であるイスラエルに与えると決められておられたカナンの地内にあつたため、モーセとイスラエルの人々は、それらの地を占領していた人々がイスラエルの不倶戴天の敵であり、それらの人々の神々がイスラエルを破壊するために尽力するであろうと信じていました。

第二の要因は、イスラエルの人々にとつてさらに恐ろしいことでした。これは、イスラエルの人々が約束の地であるカナンの境に到達したときの出来事によって最も明確に説明できます。

モーセは、カナンに十二人のスパイを送り、その地と住民について報告するように命じました。スパイは、土地自体は神が言われたとおり、「乳と蜜」の流れている素晴らしい地であることを示す証拠を持って戻ってきました（民数記13・27）。しかし、彼らはここで次のような爆弾発言をしました。わたしたちが行き巡って探った地は、そこに住む者を滅ぼす地です。またその所でわたしたちが見た民はみな背の高い人々です。わたしたちはまたそこで、ネピリムから出たアナクの子孫ネピリムを見ました。わたしたちには自分が、いなこのように思われ、また彼らにも、そう見えたに違いありません」（民数記13・32〜33）。

ネピリムについては前にお話ししました。ネピリムは神の子たちと人間の娘たちから生まれた禍々しい子たちです（創世記6・1〜4）。カナンでイスラエルのスパイが見たアナクびとの巨人たちは、ネピリムの子孫でした。これらの巨人たちは、約束の地を獲得するためにイスラエルの人々が倒さなければならぬカナンの地全体、諸国、町々に散在していました（民数記13・28〜29）。約束の地とその神々を制覇するという課題は以前も困難に見えましたが、このときにはまったく不可能に見えました。また、この地を乗っ取るためには、肉体的に異常なサイズの戦士たちに立ち向かわなければなりません。

イスラエルがアナクを倒すのを神が助けてくださることを信じていたのは、スパイのうちヨシユアとカレブの二人だけでした。残りのスパイは、イスラエルが負けると言っただけで人々を説得しました。パロとその軍隊をあれほど徹底的に破壊された神、それと同じ神がイスラエルに勝利をもたらすために介入してくださると神を信頼する代わりに、これらのスパイは、わたしたちはその民のところへ攻めのぼることはできません。彼らはわたしたちよりも強いからです」（民数記13・31）と弱音を吐いたのです。

神はこれに対して、「この民はいつまでわたしを侮めるのか。わたしがもろものしるしを彼らのうちに行ったのに、彼らはいつまでわたしを信じないのか」（民数記14・11）と答えられました。実際、神は非常にお怒りになり、イスラエルの相続権を奪うと

脅されました。これはバベルの塔で諸国に対して神が取られた措置と同じです。今度はモーセを使って再度やり直すのです。わたしは疫病をもって彼らを撃ち滅ぼし、あなたを彼らよりも大いなる強い国民としよう」 民数記 14・12)。

モーセは神に思い直すよう懇願しました 民数記 14・13～19)。神は思いとどまりましたが、人々の不信仰を見過ごすことはできませんでした。彼らは教訓を学ぶ必要がありました。厳しい教訓ですが、神はモーセに次のようにおっしゃいました。

わたしはあなたの言葉のとおりにゆるそう。しかし、わたしは生きている。また主の栄光が、全世界に満ちている。わたしの栄光と、わたしがエジプトと荒野で行ったしるしを見ながら、このように十度もわたしを試みて、わたしの声に聞きしたがわなかった人々はひとりも、わたしがかつて彼らの先祖たちに与えると誓った地を見ないであろう。またわたしを侮った人々も、それを見ないであろう…

あなたがたは死体となつて、この荒野に倒れるであろう。あなたがたのうち、わたしにむかつてつぶやいた者、すなわち、すべて数えられた二十歳以上の者はみな倒れるであろう。エフンネの子カレブと、ヌンの子ヨシユアのほかは、わたしがかつて、あなたがたを住まわせようと、手をあげて誓った地に、はいることができないうであろう。しかし、あなたがたが、えじきになるであろうと言ったあなたがたの子供は、わたしが導いて、はいるであろう。彼らはあなたがたが、いやしめた地を知るようになるであろう。 民数記 14・20～31)

「十度」というのは、聖書の時代の比喩的表現で「何度も」という意味です 創世記 31・7、ヨブ 19・3)。この時点までは、神は人々の不平に寛容でした。エジプトで奴隷をしなくてもよくなったことに大喜びする代わりに、彼らは食べなければならぬ食物について愚痴をこぼしたり 民数記 11・1～4、31～35)、神に選ばれたリーダーであるモーセについて不平を言ったり 民数記 12・1～16) していました。しかし神の忍耐が尽き、今度は彼らの不信仰が大きな代償を払うこととなります。イスラエルは、信じなかった大人たちがすべて死に果てるまで、四十年間砂漠をさまようこととなります。

第二のチャンス

イスラエルは約束の地を勝ち取る第二のチャンスを得ます。申命記 2～3章には、四十年の放浪の旅で、イスラエルの人々がヨルダン川の反対側の地（「トランスヨルダン」と呼ばれる）、約束の地の東側にどのようにして行き着いたのが年代順に記録されています。トランスヨルダンの地とは、アブラハムの甥であるロットの子孫とヤユブの兄のエッサイの子孫に神が与えられたエド

ム、モアブ、アンモンでした。その地に住んでいた人々のほとんどは、イスラエルの人々の親戚であったこととなります。しかしそうではない人々もいました。

神は特別な目的でこの旅をすることをモーセに指示されてきました。それは、遠い親戚を訪れることではありませんでした。イスラエルの人々は、最終的にバシヤンとして知られる地域へ入りました。この地域には恐ろしい評判がありました。聖書以外の古代の書物では、バシヤンは「へびの土地」として知られていました。この旅に関連して言及されているバシヤンの二つの主要都市アシタロテとエデレイ 申命記1・4、ヨシユア13・12)は、死者の世界である下の陰府へのゲートウェイと見なされてきました。イスラエルの超自然的な世界観のコンテキストでは、神はイスラエルを地獄の門へ導かれたこととなります。

それだけではありません。

神は、イスラエルの人々をそこへ導かれ、二人の王シホンとオグに出会わせました。これら二人の王はアモリびと 申命記3・2〜1、31・4)であり、レパイムの支配者でした。申命記2章11節にも記されているように、アナクびとも同じくレパイムと見なされてきました。神はモーセを介して、同様な巨人たちによって占領されている別の地域へと人々を導かれました。それらの巨人たちはイスラエルのスパイたちを恐れさせ不信仰にさせました 民数記13・32〜33)。何年も前のこの出来事は、イスラエルの四十年の放浪の原因となりました。

神はなぜイスラエルの人々をこの地に導かれたのでしょうか。この対決は、四十年後に行わなければならないことの予兆だったからです。イスラエルは、神から授かった地を占領するために、最終的にヨルダン川を渡らなければならないのです。神は民を試しておられたのです。このとき、民は信じて戦うのでしょうか。戦えば、勝利によって将来に向けての自信と信仰を得ることができるとでしょう。

イスラエルの人々は何年も前にそのような機会に背を向けていました。しかし、今度は物語は異なる結果となりました。モーセが書いているように、われわれの神、主が彼を渡されたので、われわれは彼とその子らと、そのすべての民とを撃ち殺した…：こうしてわれわれの神、主はバシヤンの王オグと、そのすべての民を、われわれの手に渡されたので、われわれはこれを撃ち殺して、ひとりをも残さなかった」 申命記2・33、3・3)のです。預言者アモスは、何年も経ってからアモス書でこの対決について語り、その結末について次のように書いています。「主は」アモリびとを彼らの前から滅ぼした。これはその高きこと、香柏のごとく、その強きこと、かしの木のようにであった」 アモス2・9)。

第二のチャンスの荒々しい開始となりました。神は、当てもない四十年の放浪という代償につながった不安や恐怖に彼らが立ち向かうことを要求されました。あの紅海を分けられた神が彼らの味方としておられたのです。それを思い出すときが来ていたのです。

破壊の対象」

イスラエルはシホンとオグに勝ちました。ここで、私たちは、約束の地の制覇にはときとして壊滅が含まれていた理由を初めて理解します。巨大なレパイムびとが住んでいた町々の全人口が「破壊の対象」とされました（申命記3・6）。それは復讐が目的ではありませんでした。目的は、ネピリムの血統を確実に廃絶することでした。イスラエルの人々にとって、反逆的で墮落した天上の存在から生まれた巨人の血統は悪霊的でした。イスラエルは悪霊の遺産と共存することはできませんでした。

ときが経ち、イスラエルがヨルダン川を渡ってカナンに入る前にモーセは死にました。リーダーシップはヨシユアへと受け継がれました。ヨシユアはイスラエルによる約束の地の制覇のため多数の軍事作戦を指揮しました。これらの軍事作戦は、前述のように敵対的な諸国を追放すること、そしてその過程で巨人族の血統を廃絶することという二つの要因によって導かれました。

このことを背景に見ると、約束の地の制覇は聖戦、つまり闇の勢力に対する戦いでした。神に敵対する神々の支配下にある敵は、聖書によると実在する霊的実体です。

制覇の論理はヨシユア記11章21〜22節にうまく要約されています。

この戦いの間にヨシユアは、ヘbron、デビル、アナブ、ユダやイスラエルの山地に住む巨人族、アナクの子孫を捜し出し、町もろとも全滅させました。それで、イスラエルの地から巨人族は絶えました。ガザ、ガテ、アシユドデにのみ一部が生き残りしました。

このことが重要である理由

ヨシユアの作戦の大半は成功しましたが、完全ではありませんでした。数人の巨人は脱出しました。これはそんなに重要には見えませんが、将来の出来事を予示していました。一部の巨人はガテに行き着きました。ガテはペリシテびとの町となり（ヨシユア13・3）、ダビデ王の時代のゴリアテの出身地でした（第一サムエル17・4）。また、ガテの巨人はゴリアテだけではありません

でした 第一歴代志 20・5(8)。約束の地の制覇の際に破壊の対象となった者すべてが実際に破壊されたわけではなく、制覇が最優先指令のすべてを達成しなかったという事実は、イスラエルに影響を及ぼします。

士師記は、ヨシヤが死んだ時点ではその他の面でも制覇が不完全だったと語っています。制覇は完全に実現されることはありませんでした。イスラエルは十分やったと自ら判断して、他の諸国を追放せよという神の命令に背きました。しかし、部分的従順は不服従と同じです。

イスラエルは、神の目標が達成する寸前に戦いを止めてしまったということによって、何世紀もその決断の代価を払うことになります。士師記では悪循環を繰り返します。イスラエルは敵対的な諸国に何度も圧倒され、神への忠誠を信じることはほとんどなくなってしまうました。ダビデ王とその子のソロモンの時代になるまでには状況は改善されましたが、ソロモンが亡くなると、イスラエルは内戦と偶像礼拝に陥りました。

征服の栄光は壮絶な失敗によって記憶から薄れていきました。すんでのところで勝利を逃したのです。神の国による統治、つまりエデン復興のご計画は、見事に失敗しました。バベルから出現した超自然的世界観 不信仰の諸国が悪神の支配下にあるという世界観)は、変わりませんでした。イスラエルは破れ、散り散りになり、その約束の地は他の神々とそれらの民たちの支配下に置かれました。これと同じ世界観は、新約聖書にも浸透しています。パウロは、闇の勢力を表すために支配、位、権力などの用語を使用しています。これらの用語は、古代にそれぞれ地理的支配を示すために使用されていました。

イスラエルの人々の失敗の原因は、神の民の側の不服従と不信仰でした。人間は弱いものです。私たちは、神はなぜ私たちをかまわれるのかと思うかもしれませんが、しかし、エデンを振り返ると、理由がわかります。神は人類にご自身を投じること決意されていたのです。私たちは神の似姿であり、神の地上の家族なのです。地球を統治するための神の当初のご計画には私たちが含まれていました。神の会議による地上での統治への人類の参加を神が放棄されたとすれば、それは神がご計画を首尾よく実施できないこと、または初めからそのご計画はまずい考えであったというメッセージを発信することになります。神がご自身の目標を達成できないはずはありません。前の章でも述べたように、神が間違いを犯されることはありません。

罪と失敗という古くからの問題に対して新しいアプローチをとるときが来ました。エデン的な国の支配を復活させることにおいて、人類を信頼することはできません。成すべきことを実行することができるのは、神ご自身のみです。ご自身の契約の義務を果たすことができるのも神だけです。しかし、人類が無視されることはありません。それどころか、神が人間にならなければなら

いのです。神はご自身が律法と契約を全うし、さらに全人類の罪の罰をご自身で負われるのです。この考えられないような解決策を成功させるには、それを誰からも秘密にしておく必要があります。これには、神の目的に敵対する、知性をもった超自然的存在も含まれます。これはたやすいことではありませんでした。

第10章

ありふれた風景の中に潜む

人間の墮落以来、神はエデンの当初の目的を復活させようとしてこられました。それは、神の天上の家族と地上の人間の家族と一緒にお暮しになることです。神は、神の善なる統治を地球の残りの部分まで広げるために、アダムとエバに生めよ、増えよと申し付けられました。地球全体が、天と地が融合する場所、人類が天上のものを楽しむことができる場所、そして天上のものが地球と人類を楽しみむことができる場所となることを望まれたのです。その試みがどうなったかは、ご存知の通りです。

失敗の歴史

人類は罪を犯し、神の御前から追放されました。エデンは閉鎖されたのです。天上の敵であるへびは、神の御前から、死が支配し命が永続しない地上へと追放されました。へびは死の神となったため、全世界、全時代の全人間の命を要求する権利を持ちました。人間は罪を犯し、罪の報酬は死だからです（ローマ6・23）。

大洪水の後、神はノアとその家族にエデンの目的を再度お伝えになりました。生めよ、増えよと。それはやり直しました。にもかかわらず、人類は反逆しました。神に従って神の知識と統治を広める代わりに、彼らは神が来られるように塔を建てました。

またもや失敗です。神はそれを求ておられませんでした。神は諸国の言語を混乱させ、それらの諸国の統治を神の天上の会議に委ねられました。その後、アブラハムとサラを通して、新しい人類の家族から再出発することをお決めになりました。神は神の国の統治が復活したら、アブラハムの子孫を通して、他の諸国にお戻りになるつもりでした（創世記12・3）。

これも失敗に終わりました。イスラエルをエジプトから導き出し、シナイへ、そして約束の地へと至らせる次の試みも同様でした。イスラエルが失敗したのです。最終的に神はダビデ、そしてソロモンを立てられました。しかしソロモンの死後、イスラエルは他の神々に従っただけでなく、お互いに敵対しました。神は約束の地からイスラエルを追放しなければなりませんでした。

神の存在を切り離すと、人類の物語は失敗の物語です。それは人間の墮落以来、人類は滅びるばかりだからです。人間はすべて不完全であり、神から遠ざかっています。神の御国を開始して維持することを委ねることのできる人間の指導者はいません。彼らは、神のみに忠誠を尽くすことに抵抗します。彼らはそれぞれ好きなようにします。人間は罪を犯し、失敗し、神の大敵である死の神に合流します。新しいエデンの世話役・君主であることの恵みを分かち合うという神のビジョンは、人間なしでは達成できません。神のご計画の人間側の責任を果たす唯一の方法は、人間が新しくされることです。人間の墮落ののろいの解除が必要です。

そのために、神にはお考えがありました。

解決策——そして問題

神は、人間を超える人を必要とされました。誘惑に負けず、常に服従し、君主にふさわしく、死んで自分の力で復活することによって死ののろいを解くことができる人です。これをすべて実現する方法は一つしかありません。神ご自身が人間になられることです。神ならば、人間として、全人類のためにご自身のご計画を満たし、エデンを復興できます。人間が、復活の力によって赦され、イエス様のように聖なるものにされて 第一ヨハネ3・1〜3) はじめて、エデンが現実となります。

しかし、問題がありました。神の当初のビジョンを回復するために、神であったお方が、この地で死に、復活されるという計画が発覚した場合、闇の勢力がそれにはまるはずがありません。

これは、まさにコリントの教会宛の書簡にパウロが書いていることです。

むしろ、わたしたちが語るのは、隠された奥義としての神の知恵である。それは神が、わたしたちの受ける栄光のために、世の始まらぬ先から、あらかじめ定めておかれたものである。この世の支配者たちのうちで、この知恵を知っていた者は、ひとりもいなかった。もし知っていたなら、栄光の主を十字架につけはしなかったであろう。 第一コリント2・7〜8)

パウロは誰のことを言っているのでしょうか。支配者、という言葉は、総督ピラトやユダヤ人のリーダーたちなど、人間の権威を表すこともあります。パウロは天上の悪霊の権力も視野に入れています（エペソ2・2）。人間であるか天上の存在であるかにかかわらず、神の敵には情報を伏せておく必要があります。すべてが神人の死と復活にかかっていました。

これを秘密にしておくにはどうすればよいのでしょうか。

謎の救い主

エデンの復興がかかっていた神人とは、もちろん、メシアであるナザレ人イエスでした。しかし、このメシア的計画が秘密であったということに驚かれましたか。旧約聖書を読めば計画全体を知ることができるのではないのですか。いや、知ることはできません。

驚くべきことに、旧約聖書には、実際に神でありながら、人類の罪のために死ぬお方について、メシアという言葉を使用している箇所はありません。苦しみのしもべ」を描写したイザヤ書53章11節でもメシアという言葉は使われていないのです。イザヤ書53章にはメシアという言葉は一度もでてきません。さらに、イザヤ書のその他の箇所では、「しもべ」は救い主個人ではなく、イスラエルの国を表しています（イザヤ41・8、44・1と2、21、45・4、48・20、49・3）。また、「油をそそがれた」という意味のメシアという言葉は、ほとんどの場合、ダビデ、またはその後で統治したダビデの子（子孫）の一人を指しています。

実際には、私が言っていることの証拠、つまり、死んでから復活する天上からの救世主のプロフィールを旧約聖書で見つけることが困難であるということは、新約聖書で明らです。

イエス様から、死ぬためにエルサレムへ行くと告げられたときの弟子たちの反応を考えてください。イエス様の発言は、彼らを当惑させ、苦悩させました（マタイ17・22と23）。弟子たちは「そうでしたね。御言葉で読みました」とは言いませんでした。ペテロはそのことでイエス様をいさめようとしました（マタイ16・21と23）。

弟子たちは、神のこの新しい「計画」について、何の認識もなく、何も気付いていませんでした。彼らはイエス様のことを、ダビデの子孫であり、その王位の正当な継承者として、そして旧約聖書の預言者と同様に奇跡を行った人としてしか考えていませんでした。

復活の後でさえ、弟子たちが苦しみのメシアを理解するためには、超自然的にその心が開かれなければなりません。死から復活された後、イエス様は彼らの前に現れ、次のようにおっしゃいました。

わたしが以前あなたがたと一緒にいた時分に話して聞かせた言葉は、こうであった。すなわち、モーセの律法と預言書と詩篇とに、わたしについて書いて書いてあることは、必ずことごとく成就する。」そこでイエス様は、聖書を悟らせるために彼らの心を開かれました。 (ルカ 24・44～45)

神が死に、死から復活されることによって、人間の墮落ののろいを解くという神の「新しいご計画」は、旧約聖書ではまったく明らかではありません。代わりに旧約聖書全体、数十箇所の手掛かりが散在しています。「箇所すべてが明かされることはありません。メシア的プロフィールは、振り返ってはじめて明らかになります。それでさえも、何を探し、何を期待すればよいのかを知っている人に限ります。

もちろん、知的で邪悪な超自然的存在は、預言されていたダビデの子が生まれたことを知っていました (マタイ 8・28～29、ルカ 4・31～35)。これだけのことは旧約聖書から理解することができました。しかし、悪霊が何を言っても、イエスさまが死んで復活するために地上に連れられ、のろいを解かれるということを経験したという印象は与えられません。

パウロが言ったように、それらの悪霊とサタンがこのことを理解していたならば、ユダのような者を動かして、イエス様を裏切らせ、イエス様の死を望んでいた者たちへ手渡させるようなことはしなかったでしょう。悪魔と彼に同調した者たちについてさまざまなことが言えますが、彼らは脳なしではありません。彼らは、だまされてイエス様を殺したのです。それは神のご計画どおりでした。これは、彼ら自身の崩壊につながる一連の出来事の始まりです。ユダへの誤った指図は、神のデザインによるものでした。

プロフィールの一部

振り返ると、私たちは弟子たちよりも明確にメシア的プロフィールの断片を見ることができません。天上からのダビデの子ののろいを解くために死んで復活することを記述する箇所はありませんが、旧約聖書全体にこのメシア的プロフィールの糸のようなものが通っています。このご計画がどのように展開されたかを既に見ている私たちは、この糸を見つけて、パターンを追跡できます。

たとえば、「神の子とはだれか」を尋ねます。旧約聖書では、その回答は「オエス様」ではありません。アダムは神の子で、最初の人間でした。イスラエルも神の子と呼ばれています。出エジプト記4・23、ホセア11・1。イスラエルの王も神の子と呼ばれています。詩篇2・7。

新約聖書では、イエス様は「第二のアダム」であり「神の御子」です。ローマ1・4、第一コリント15・45、第二コリント1・19、ヘブル4・4。

「神のしもべとはだれか」と尋ねます。アダムは神に仕えました。創世記2・15。イスラエルも神の僕と呼ばれました。ネザヤ41・8、44・1〜2、44・21、45・4、48・20。ダビデ、およびその血筋の他のイスラエルの王たちも神のしもべと呼ばれました。第二サムエル3・18、詩篇89・3、第一列王記3・7、第二歴代志32・16。イエス様もしもべと呼ばれました。使徒行伝3・13、4・30、ピリピ2・1〜8。

これらの神の子たちおよび神のしもべたちは苦しみましたか。その地上での命はある時点で終わりましたか。その存在は新しくされましたか。新しいエデンに彼らの将来がありますか。回答はすべて「はい」です。アダム、イスラエル、ダビデの子孫の王たちは、すべて神の御前、つまり神が住んでおられた地上の場所（エデンおよび約束の地）から追放されました。それでも、彼らは新しいエデンで贖われ、神、および復活されたイエス様と一緒に暮らすことになりました。

ポイントとは、これらの人物はすべて何らかの方法でイエス様を指し示すこと、そしてイエス様がそのパターンを完成させる方であることです。イエス様は、断片がすべて見つかり、所定の位置に収められたときに明らかに明らかになる統一像です。すべてがありふれた風景の中になりましたが、振り返ることなしには検知できません。

このことが重要である理由

知的な悪、つまりサタン、悪霊、諸国を治める神々は、すべてを知っているわけではありません。彼らは、神の御心を持っておらず、それを理解することもできません。私たちは、彼らが超自然的存在であるために、全知であると見なしがちですが、そうではないのです。全知のお方は神お一人だけです。そしてその神は私たちの味方なのです。

人間の墮落のため、サタンは私たちの管轄権を持っていました。それはどういう意味でしょうか。アダムの罪のために「死が全人類にはいり込んだ」（ローマ5・12）のです。へびは、のろわれ、投げ倒され、死者の世界である陰府（地獄とも呼ばれる）を統治しています。人間の墮落のため、人間はすべて死に、悪魔が支配する陰府（行くことが運命づけられています）を

十字架で死に、死から復活することによって、神の救いのご計画を成就するために、イエスさまが最初に、来られたとき、すべてが変わりました。エデンの復興の最初の一步は、死ののろいを逃れるための手段を人間に与えることでした。信じる者すべて、神の家族と御国のメンバーとされた者は、死ののろいと死の支配者の人質ではなくなりました。イエス様が御国を復活させるためのミニストリーを開始されるときに、次のようにおっしゃったのはそのためです。ルカ 10・11〜19。わたしはサタンが電光のようになら落ちるのを見た」ルカ 10・18。イエス様は、彼の死と復活によって罪びとの負債が支払われ、サタンが私たちの魂を要求する権利を失うことをご存知でした。御国は死神の終焉の始まりでした。

私たちは、私たちが何者であるか、そして私たちのアイデンティティがどこから来ているのかを再び思い出す必要があります。信者たち 集会的に教会)は、キリストのからだと呼ばれます。そしてイエス様のからだは復活しました。イエス様が復活されたため、私たちも復活します 第一コリント 15・20〜23)。イエスさまは死人の中から最初に生まれた方です。私たちは、天に登録されている長子たちの教会)です (ヘブル 12・22〜24)。ヨハネが言ったように、しかし、彼を受け入れた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである」ヨハネ 1・12)。神の子たちは死からよみがえるため、サタンには彼らを要求する権利はありません。生きている者を死人の世界で探す理由はありません。

人間であつても、天上の存在であつても、忠誠者であつても敵対者であつても、神はその手の内をお見せになることはありません。メシアが神の目的を達成される方法の具体的な詳細は、隠されなければなりませんでした。しかし、神は、来られるメシアが人間の姿をした神であること、そしてエデンの御国の復興が最終目的であることは彼らにお知らせになります。次章二つで説明するように、それは、人々の心に信仰を促し、暗闇の権力に自らの崩壊を始動させるように仕掛けるために必要な最低限の情報でした。

第11章

超自然的な意図

前章では、旧約聖書で示されているメシアは、ありふれた風景の中に潜んでいることがわかりました。エデンの復興と人類の救いのための神のご計画の鍵となったのは、メシアであるイエス様が十字架で死を遂げ、死からよみがえられることでした。

ダビデの血を引く人間の王が、罪に陥ったり、霊的に迷ったりすることなく、その民を支配することができることを保証できる唯一の方法は、神ご自身が人間になられることでした。その王が神の民の代わりに死に、死からよみがえってはじめて、神は罪を公正に裁き、同時にすべての民に救いを提供することができたのです。新しくなったエデン的な国を支配する神の家族会議における墮落した人々の居場所は、メシアの死と復活によってのみ確保されます。

しかし、そのために必要なことを考えてみてください。イエス様は、暗闇の超自然的権力に操られた人間、自分たちが何をしていいのかも実際に理解しない人間によって確実に殺されなければなりません。パウロがコリントの人々に言ったように（第一コリント2・6〜8）、結果がどんなものなのかを彼らが本当に知っていたなら、主を十字架にかけるようなことは決してしなかつたでしょう。

イエス様の生涯とミニストリーは、このことを背景に考えたほうが理解しやすくなります。たとえば、新約聖書の読者は、十字架に至るイエス様のミニストリーは、幾分思いつきであったという印象を持ちがちです。なんといいっても、各福音は必ずしも同じ出来事を記していません。たとえば、イエス様の生誕は二つの福音（マタイとルカ）にしか記述されておらず、博士たちに言及しているのはそのうちの一つのみです（マタイ2）。福音書ごとにシーンの順序が若干異なることもあります。しかし、記録された十字架に至るまでのイエス様の行動（つまり、病人を癒し、神の国を説き、罪びとを赦し、偽善に立ち向かうといった行動）は、

ときどき奇跡を行いながら旅する博識者の思い当たりの行動以上のものでした。福音のストーリーでは、見掛け以上に多くの出来事が起こっています。イエス様の行動には、秘められた重要な真意がありました。

悪を出し抜く

イエス様の公のミニストリーの始まりを告げた出来事は、彼のバプテスマでした。神がイエス様をその御子として公に特定されたのは、バプテスマにおいてです（マルコ1・11）。そして、バプテスマのヨハネが「世の罪を取り除く」者としてイエス様を特定しています（ヨハネ1・29）。ヨハネのこれらの言葉を讀むと、イエス様の十字架上の死をすぐに思い起こします。しかし、ヨハネの弟子たちはそのことは考えていませんでした。実のところ、誰もそれを考えていませんでした。バプテスマの後の三年に渡るミニストリーの終わりに近づき、イエスさまがその死のことを話し始められると、イエス様ご自身の弟子たちがその考えを拒否しました（マタイ17・22〜23、マルコ9・30〜32）。主が間もなくお亡くなりになるなどということは、彼らにとって思いもよらないことでした。ばかげた話でした。彼らは、十字架でのイエス様の死が初めから計画されていたことを理解していませんでした。なぜでしょう。それは、前の章でもお話ししたように、旧約聖書では「計画は明確に示されていなかったからです。

バプテスマの後、イエス様はサタンと対決するために御霊によって荒野に追いやられました（マタイ4・1、マルコ1・12、ルカ4・1〜13）。悪魔がイエス様を試しに来たということは、イエス様が誰なのかを、つまりイエス様が神の「自治」を地上に再度設置するという使命を持つメシアであるということを知っていたことを示唆しています。そもそも、油を注がれたお方「メシア」は、ダビデの血を引く王なのです。「この世の君」（ヨハネ12・31）であるサタンは、イエス様がサタンの支配の対象、イスラエルを作られる前にバベルの塔で神がお見捨てになった諸国に狙いを定められるであろうことを理解していました（申命記4・19〜20、32・8〜9）。

私たちのほとんどは、イエス様とサタンのシーンを思い出すことでしよう。サタンはイエス様を三度試しました（マタイ4・3〜11）。イエス様に神との関係を損なわせるためのサタンの三つ目の戦略は、神の御子に世界の諸国を提示することでした（マタイ4・8〜9）。イエス様は、それを取り戻すために来られたのだから、とサタンは考えていました。

悪魔は、再び高い山へイエス様を連れて行き、この世のすべての国々とその栄光を見せ、言いました。もしあなたが、ひれ伏してわたしを拝むなら、これらのものを皆あなたにあげましょう（マタイ4・8〜9）。

サタンの提案は神のご計画を巧妙に変えるものでした。それは、神の民となる権利を剥奪された国々の回復という、神の望まれたとおりの結果を得ることのできる提案ではありません。任務完了です。イエス様は、神ではなくサタンを拝むだけでよいのです。

サタンの提案は、神のご計画がイエス様の死を必要としたことをサタンがまだ認識していなかったことを示しています。イエス様もそのことをサタンに知らせませんでした。イエス様はその拒否の理由をサタンに説明されませんでした。彼はサタンに「退け」とおっしゃっただけです。神はご自分のものであったものを、ご自身のタイミングで、ご自身の方法で取り戻されるのです。イエス様の使命は、すべての国々を統治することだけではありませんでした。家族を再建することも重要でした。この家族には、イスラエルだけではなくすべての諸国が含まれていました。これは罪の贖いが必要であることを意味しました。神の当初のご計画どおり、神の統治には神の子たちが含まれます。人間の贖罪、そして神のご計画の実施のために十字架は不可欠でした。イエス様は計略にはまるようなことはありませんが、悪魔はやがて神の計略にはまります。

エデンを垣間見る

イエス様は荒れ野での誘惑の後すぐに、二つのことをされました。最初の弟子たち（ペテロ、アンデレ、ヤコブ、ヨハネ）を召され、悪霊にとりつかれた人を癒されました（マルコ1・16〜28、ルカ4・31〜5・11）。弟子たちの召命と、癒しは、どちらも継続され、パターンのはじまりとなりました。イエス様は、さらに多くの弟子たちを召されると共に、悪霊を追い出す力とあらゆる病、障害、状態から人々を癒す力を彼らに与えられました。

イエス様は、まず十二人の弟子を召されました。この数は偶然ではなく、イスラエルの十二の部族に対応します。イエス様は、イスラエルを視野に入れて御国のご計画を開始されました。イスラエルはなんといつても、他のすべての国々に優先して選ばれた神の分なのです（申命記32・8〜9）。後にパウロは、福音を広めることについても、同様な見方をしています。つまり、ユダヤ人から始め、異邦人へと広めるのです（ローマ1・16〜17）。

イエス様は十二人の弟子で終わりにされませんでした。ルカ書10章では、さらに七十人に癒しと悪霊の追放の権限を与えておられます（ルカ10・1、9・17）。この数も偶然ではなく、創世記10章に挙げられた国々の数です。すなわち、バベルの塔での出来事で神から見捨てられ、他の神々の支配の下に置かれた国々です（申命記4・19〜20、32・8〜9）。七十ではなく七十二としている訳もあります。それは、旧約聖書の古代の文書では、創世記10章の国々の名前が七十二個になるように書かれているからです。

どちらにしても、要点は同じです。これらの弟子たちの派遣は、創世記10章の国の数に対応しています。十二人の弟子たちの召命がイスラエルへの神の国の到来のしるしであったのと同様に、七十人の派遣は神の国が国々を取り戻すことのしるしでした。

七十人が戻ったときのイエス様の次のような対応は、多くを物語っています。わたしはサタンが電光のように天から落ちるのを見た」(ルカ10・18)。このメッセージは劇的です。大逆転が進行中でした。人々がイエス様に属すると、人間に対するサタンの権利はなくなります。彼ら(信仰者たち)を告発する」(黙示録12・10 新共同訳) ためのサタンの神へのアクセスは終わったのです。彼は論拠のない告発者となりました。

捕まえられるなら捕まえてみる

三年に渡り、来るべき神の御国について述べ伝えられ、人々に神の愛を示されると共に、エデンの園のような世界での生活がどのようなかを明示された後、イエス様は、最後(真の目的)のための準備を始められました。

エルサレムへの最後の旅が始まる直前に、イエス様は弟子たちをイスラエルのはるか北へと連れて行かれました。受難を招く必要がありました。超自然の権力に挑戦するにはもってこいの場所を選択されました。

イエス様は、ピリポ・カイザリアという土地へと弟子たちを導かれました。しかし、それはローマの名前でした。旧約聖書の時代には、この地域はバシヤンと呼ばれていました。バシヤンについては本書の第9章でお話ししました。バシヤンは陰府へのゲートウェイ(地獄の門)と見なされてきました。ピリポ・カイザリアは、ヘルモン山のふもとに位置します。ユダヤ人の考えでは、創世記6章1〜4節に書かれているように、神の子たちが反逆して地球へやってきたのはこの場所です。要するに、旧約聖書の時代には、バシヤンとヘルモンは宇宙の悪の権力のグラウンドゼロだったのです。

イエス様が「あなたがたはわたしをだれと言うか」(マタイ16・15)というあの有名な質問をされたのは、この場所でした。そのときペテロは「あなたこそ、生ける神の子キリストです」(マタイ16・16)と答えました。イエス様はペテロを褒め、次のようにおっしゃいました。

バルヨナ・シモン、あなたはさいわいである。あなたはこの事をあらわしたのは、血肉ではなく、天にいますわたしの父である。そこで、わたしもあなたに言う。あなたはペテロである。そして、わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てよう。

黄泉の力もそれに打ち勝つことはない。(マタイ16・17〜18)

イエス様が「岩」と呼ばれたものについては、何世紀にもわたり議論されました。これを理解するための鍵となるのは、この地域の地理です。ピリポ・カイザリアは、最北の地域バシヤンに位置します。旧約聖書の時代には、この地域には陰府へのゲートウェイがあると考えられていました。ピリポ・カイザリアは、山のふもとにあります。「岩」はその山です。「地獄の門」は、まさにイエス様と弟子たちが立っていた場所です。

イエス様は、暗闇の権力に挑戦しておられたのです。人間の墮落で、人類は神と生きる永遠の命を失い、代わりに、死、および神からの永遠の分離という報酬を受けました。死の神であり、サタンおよび悪魔として知られるへびは、人類に対する権利を持ちました。人間はそれぞれ陰府でサタンに合流します。しかし、神は別のお考えをお持ちでした。人類の罪の報いを受けるためにイエス様を遣わすという秘密のご計画は、地獄の門に対する正面攻撃になります。死の神とその勢力は、神の御国に逆らうことにはできません。突き詰めると、マタイ書16章の箇所イエス様は悪魔の玄関口へ行かれ、彼の主張に挑戦されたこととなります。イエス様はサタンを挑発しなかったのです。なぜでしょう。イエス様が死なれることにより、神の秘密のご計画を実行に移すときが来たからです。

口頭での挑戦が十分ではなかったかのように、イエス様はさらにもう一歩踏み込まれました。イエス様のミニストリーにおける次の出来事は、変容であったことは、マタイ、マルコ、およびルカの福音書で共通しています。マルコの福音書9章2〜8節には次のように書かれています。

六日の後、イエスは、ただペテロ、ヤコブ、ヨハネだけを連れて、高い山に登られた。ところが、彼らの目の前でイエスの姿が変わり、その衣は真白く輝き、どんな布さらしでも、それほど白くすることはできないくらいになった。すると、エリヤがモーセと共に彼らに現れて、イエスと語り合っていた。ペテロはイエスにむかって言った、「先生、わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです。それで、わたしたちは小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのために、一つはモーセのために、一つはエリヤのために」。そう言ったのは、みんなの者が非常に恐れていたもので、ペテロは何を言ってよいか、わからなかったからである。すると、雲がわき起って彼らをおおった。そして、その雲の中から声があった、「これはわたしの愛する子である。これに聞け」。彼らは急いで見まわしたが、もはやだれも見えず、ただイエスだけが、自分たちと一緒ににおられた。

変容はヘルモン山で起こります。イエス様は、ペテロ、ヤコブ、およびヨハネにご自分が誰であるか、つまり神の栄光を体現される方であることを明かすためにこの地をお選びになりました。サタンと暗闇の権力に対して私は私のものを取り戻すために地球

に、来た。神の御国が近づいたと通告されたのです。事実上、私はこの場所にいる。対処せよ」ということです。変容の直後、イエス様はエルサレムへ向かわれ、ご自身がそこで死なれることを弟子たちに話し始めたのは、偶然ではありません。弟子たちはそのようなことは聞きたくありませんでした。しかし、イエス様はサタンと他の悪の権力が行動を起こすように仕掛けておられました。彼らはイエス様を抹殺しなければという緊迫感を持ちます。それはイエス様がまさに望んでおられたことです。イエス様の死はすべての鍵を握っていました。

このことが重要である理由

イエス様のミニストリーは意図的なものでした。地上での神の御国の復興が、イエス様の再臨の日、つまりグローバルなエデンの到来を告げる日まで続くように、イエス様はその計画におけるご自身の役割をはっきりと見極めておられました。

私たちの人生はイエス様の人生ほど重要ではありませんが、弟子たちと同様に私たちにもそれぞれ果たす必要のある真の役割があります。私たちはこのことを信じているかのように生きる必要があります。信仰者たちは、傍観者ではなく参加者として神の家族会議に加えられたのです（コロサイ1・13）。

イエス様の意図の一つは、エデンがどのようなところであったか、そして神との生活がどのようなものかを示すことでした。神の家族と神の支配においては、病気も身体障害もありません。敵対する権力もありません。神の究極的な御国は、エデンの園よりも大きく、イスラエルよりも広範です。御国はグローバルで、すべての国々を含みます。そしてそれはエデン、つまり地上の天国です。

我々の任務は、イエス様を真似ることです。イエス様のように、私たちも、神の似姿である仲間たちの体と魂を思いやり、王イエスに対する信仰へと彼らを導き、イエス様への忠誠の決意を強めるよう励ますことができます。メシアに倣って、心のいためる者をいやし、捕われ人に放免を告げる（ネザヤ61・1）ために、必ずしも超自然的力が必要ありませんが、これらは超自然的な行いです。暗闇への抵抗と戦略的なビジョンを要します。親切な行いは、御霊によって誰かの心を導くために必ず使用されます。語られた福音が実を結ばないことはありません。イエス様の親切は、そのメッセージと合致していました。相互に滅殺されることはありませんでした。これは信仰者が真似ることのできるパターンです。そして、御国のビジョンの職務内容です。

最後に、知的な悪には制限があるだけでなく、神の御国のビジョンと行動に対しては脆弱であるということを変更して確認できます。イエス様は既に「神の右に座し、天使たちともろもろの権威、権力を従えておられる」(第一ペテロ3・22)のです。私たちは既にイエス様と共に支配する者になっていますが、完全ではありません(コロサイ3・1、第二テモテ2・12、黙示録2・26、3・21)。地獄の門は、地上での神の御国としての教会の進行と完成には太刀打ちすることはできません。大逆転に關与するかどうかの決定は私たちのものです。

第12章

クラウドライダー 天の雲に乗って来られるお方)

前章は、地獄の門およびヘルモン山で暗闇の権力にわなを仕掛けたすぐ後で、イエス様がご自身の死について語り始めたところで終わりました。この挑戦は、主の裁判と、十字架での死につながる二連の出来事を引き起こすこととなります。クリスチャンは、主の裁判について何度も読んでいます。しかし、そこには見落とされがちな超自然的背景があります。

ユダヤ人指導者たちが最終的にイエス様の死刑を宣告し、それを遂行するために総督ピラトにイエス様を引き渡すことになった原因を理解するには、旧約聖書のダニエル書に戻って、神と、その会議である天上の万軍との会合を吟味する必要があります。

「日の老いたる者」とその会議

ダニエル書7章は、奇妙な幻で始まります。ダニエルは、四頭の大きな獣が海からあがってくるのを見ました（ダニエル7・1〜8）。これらはすべて奇妙でしたが、最も恐ろしいのは第四の獣でした。旧約聖書で解釈される夢では、物体と生き物は両方とも常に何かを表します。そしてこの夢、つまりダニエルの幻に現れた四頭の獣は四つの帝国です。それが分かるのは、ダニエルの幻がダニエル書2章のネブカデネザルの夢のテーマと一致するためです。それはバビロンとそれに続く三つの帝国に関するものでした。ただし、ここで注目するのはダニエルによる次の記述です。

わたしが見ていると、もろもろのみ座が設けられて、日の老いたる者が座しておられた。その衣は雪のように白く、頭の毛は混じりもののない羊の毛のようであった。そのみ座は火の炎であり、その車輪は燃える火であった。彼の前から、ひと筋の火の流れが出てきた。彼に仕える者は千々、彼の前にはべる者は万々、審判を行う者はその席に着き、かずかずの書き物が開かれた。（ダニエル7・9〜10）

日の老いたる者はイスラエルの神であることはわかります。特に、その座をエゼキエル書の神のみ座の幻の記述（全ゼキエル1）と比べることによって、このことは簡単に判断できます。エゼキエル書の幻に出てくる火、車輪、座上の人間の姿は、ダニエルの幻と同様です。

しかし座は一つだけではないことに気付きましたか。ダニエルの幻には複数の座があります（ダニエル7・9）。それは天上の法廷、神の会議に十分な数です。

天上の法廷は、幻に出てくる獣（帝国）の運命を決めるために会合します。第四の獣は殺され、残りの獣は無力な状態になる必要があることが決定されます（ダニエル7・11〜12）。それらは別の王および王国によって追放されます。ますます面白くなるのはここからです。

天の雲に乗ってくる人の子

ダニエルは幻についての説明を続けます。

わたしはまた夜の幻のうちに見ていると、見よ、人の子のような者が、天の雲に乗ってきて、日の老いたる者のもとに来ると、その前に導かれた。彼に主権と光栄と国とを賜い、諸民、諸族、諸国語の者を彼に仕えさせた。その主権は永遠の主権であって、なくなることがなく、その国は滅びることがない。（ダニエル7・13〜14）

「人の子」は、旧約聖書で何度も使われている言葉です。人間のことだということは当然のことですが、驚くのは、この箇所がこの人間がどのように記述されているかということです。ダニエル書7章13節では、この人について、天の雲に乗って、日の老いたる者のもとに来ると記述しています。

これが大事なことであるのはなぜでしょうか。それは、旧約聖書の他の場所では、このような記述は神ご自身のみで使用されているためです（ネザヤ19・1、申命記33・26、詩篇68・32〜33、104・1〜4）。しかしダニエル書7章では、日の老いたる者として神は既にそのシーンに登場しておられます。ダニエルはその幻の中であたかも「第二の神」を見たかのようです。神を一人以上の人格とするクリスチャンの見方と似ています。

これがまさに言わんとすることです。

命がかかっている。ご自身の裁判でカヤパの前に立たれたとき（マタイ26）、イエス様は次のようにこの考えに訴えかけることによつて、相手の痛いところを突きました。

さて、祭司長たちと全議会とは、イエスを死刑にするため、イエスに不利な偽証を求めようとしていた。そこで多くの偽証者が出てきたが、証拠があがらなかった。しかし、最後にふたりの者が出てきて、言った、「この人は、わたしは神の宮を打ちこわし、三日の後に建てることができる、と言いました」。すると、大祭司が立ち上がってイエスに言った、「何も答えないのか。これらの人々があなたに対して不利な証言を申し立てているが、どうなのか」。しかし、イエスは黙っておられた。そこで大祭司は言った、「あなたは神の子キリストなのかどうか、生ける神に誓ってわれわれに答えよ」。イエスは彼に言われた、「あなたの言うとおりである。しかし、わたしは言っておく。あなたがたは、間もなく、人の子が力ある者の右に座し、天の雲に乗って来るのを見るであろう」。すると、大祭司はその衣を引き裂いて言った、「彼は神を汚した。どうしてこれ以上、証人の必要があるろう。あなたがたは今このけがし言を聞いた。あなたがたの意見はどうか」。すると、彼らは答えて言った、「彼は死に当るものだ。」（マタイ26・59〜66）

カヤパの明確な質問に対して、無意味とも思える回答で、イエス様はダニエル書7章13節を引用されました。カヤパよ、私を本当に知りたいか？よく聞け。反応は即座です。カヤパは、イエス様がダニエル書7章13節の第二の神の姿、旧約聖書で神のみに使用される記述によつて表されている人間）であると主張しておられることを即座に理解しました。イエス様は人間の姿の神であることを主張されていたのです。これは神を冒瀆することであり、死刑の理由になります。

しかし、イエス様はもちろんそのことをご存知でした。ご自分を守ることは興味がありませんでした。神の御国を復興して、信者たちを神の家族に導き、神がバベルで拒絶した国々をコントロールする悪の支配や権威から諸国を取り戻すためには、ご自分が死ななければならぬことをご存知でした。

そして実際に死なれました。ダビデの言葉を通して磔刑がもたらす肉体的影響を示していることでよく知られている詩篇22篇で、十字架での目に見えない恐怖を垣間見ることが出来ます。苦しむ詩人は嘆きます。

わたしを見る人は皆、わたしを嘲笑い

唇を突き出し、頭を振る。

主に頼んで

救ってもらおうがよい。

主が愛しておられるなら、

助けてくださるだろう。」

雄牛が群がってわたしを囲み

わたしを囲み、

バシヤンの猛牛がわたしに迫る。

餌食を前にした獅子のようになり

牙をむいてわたしに襲いかかる者がいる。

・わたしは水となって注ぎ出され

骨はことごとくはずれ

心は胸の中で蠟のように溶ける。 詩篇22・7〜15 新共同訳

この記述の不気味なところは、バシヤンの猛牛です。前述のように、旧約聖書の時代には、バシヤンは悪霊的な神々と陰府にとつてのグラウンドゼロでした。この地域は雄牛と牛で象徴されるバアル崇拜の中心地だったのです。バシヤンの猛牛は、悪霊つまり暗闇の権力を指しています。現代では、C. S. Lewis の『The Lion, the Witch, and the Wardrobe』ライオンと魔女―ナルニア国ものあたり）に不気味な不快感と共にこのイメージが取り込まれています。この本を読んだ人も映画を観た人も、アスランが石舞台で喜ぶ白い魔女にその命を差し出すシーンを忘れることはできないでしょう。

イエス様がサタンを完全に出し抜いたように、アスランも白い魔女をばか者扱いしました。悪が勝利の瞬間であると誤解したことは、取り返しのつかない敗北につながったのです。

あなたがたは神だが、人のように死ぬ

サタンが十字架で失ったものは、アダムの子たちの命に対する権利だけではありませんでした。反逆におけるサタンの仲間、諸国の超自然的神々（*エロヒム*）は、その領域が減退し始めるのを見ることがになります。

超自然的神々は、いと高き者、つまりイスラエルの神によってそれらの諸国を割り当てられていました（申命記 4・19〜20、32・8〜9）。いつそなくなったかは聖書に書かれていませんが、彼らは神の敵となりました。神ご自身の民であるイスラエルに神の崇拜を捨てさせ、自分たちに犠牲を捧げさせたのです（申命記 17・1〜3、29・26〜27、32・17）。第2章で、天上の会議を説明するために取り上げた詩篇82篇には、*elohim*（*エロヒム*）がその権力を乱用して悪に報いたとが書かれています。彼らは神の律法や義には全く関心がありませんでした。

神は神の会議のなかに立たれる。

神は神々（*エロヒム*）のなかで、さばきを行われる。

あなたがたはいつまで不正なさばきをなし、

悪しき者に好意を示すのか。

貧しい者と、みなしごの権利を擁護し、

乏しい者と苦しむ者を公平に扱え。

弱い者と貧しい者を救い、彼らを悪しき者の手から助け出せ」。

彼らは知ることなく、悟ることもなくて、

腐敗しきっている。

「この世から義は消え失せた。」 詩篇82・1〜5 GNTLからの邦訳

この詩篇の残りの部分には、神がこの天上の会議を招集して、神々にその将来は暗いものであることを告げられたことが書かれています。神が国々を取り戻すと決断されたとき、恐怖による支配は終わります。

わたしは言う、 あなたがたは神だ、

あなたがたは皆いと高き者の子だ。

しかし、あなたがたは人のように死に、

もろもろの君のひとりのように倒れるであらう」。

神よ、起きて、 地をさばってください。

すべての国民はあなたのもだからです。 詩篇 82・6～8)

神はいつ国々を取り戻そうと決断されるのでしょうか。ダニエル書 7章 14節にその答えがあります。

彼に主権と光栄と国とを賜い、 諸民、 諸族、 諸国語の者を彼に仕えさせた。 その主権は永遠の主権であつて、 なくなることがなく、 その国は滅びることがない。

ダニエル書 7章 13～14節のメッセージは明らかです。人の子が国を受けられたとき、暗闇の超自然の権力の終わりが告げられます。イエス様は、その復活のときに御国を授かりました。神は、キリストを死者の中から復活させ、天において御自分の右の座に着かせ、すべての支配、権威、勢力、主権の上に置き、今の世ばかりでなく、来るべき世にも唱えられるあらゆる名の上に置かれました」(エペソ 1・20～21 新共同訳)。

このことが重要である理由

十字架以前は、サタンが私たちの魂に対して永遠の権利を持っていました。人間はすべて死にます。したがって、サタンの領域である陰府へ行きます。イエス様の犠牲と復活がなければ、私たちはそのままそこに残るのです。十字架におけるイエス様のお働きに対する信仰により、私たちはイエス様と共に復活します。前章で見たように、地上で御国が始まったとき、サタンは神の御前か

ら追放されました（ルカ10・18）。以後、神は信者に対するサタンの告発を聞き入れられることはありません。サタンは私たちの魂に対する権利を失ったのです。

では、私たちはなぜあたかもサタンが私たちの魂に対する権利を持っているかのうように、生きていくのでしょうか。

救いは、道徳的に完璧であることによって得られるものではありません。それは恵みにより、信仰を通して得られる賜物なので（エペソ2・8〜9）。逆に言うと、救いは道徳的に不完全であることによって失われることはありません。業績によって得られることが決してないものを、業績が良くないことによって失うことはあり得ません。

救いのポイントは、信仰による忠誠、つまりイエス様がサタンの権利を打ち負かしたことを信頼し、他のすべての神々、およびそれらが属している信仰体系から離れ去ることです。

それが、私たちが国々に延べ伝えることを命じられている神の御国のメッセージです（マタイ28・19〜20）。そして、私たちがこれに従うことにより、敵対する神々、もろもろの支配や権威の領域は、魂一つずつ、刻一刻と縮小されていきます。地獄の門、陰府は、復活には太刀打ちできません。そして福音の前進に打ち勝つこともできません。

しかし、イエス様の磔刑の時点では、弟子たちにとってこれらのことは現実のように思えませんでした。彼らはやがて劇的で忘れがたい方法でこのメッセージを理解することになります。

第13章

大逆転

イエス様の生誕、死、山上の垂訓など、福音に出てくるイエス様に関するストーリー以外に、新約聖書で最も親しまれている箇所は、使徒行伝2章で、五旬節の日にイエス様の信徒たちの上に聖霊が降られたところでしよう。この出来事は、新生教会の立ち上げ、およびイエス様の御名によるグローバルな伝道の始まりを告げます。

これはよく知られている箇所ではありませんが、ここではたいいていの人が認識しているよりもはるかに多くのことが起こっています。実際、使徒行伝2章は、イスラエル以外の諸国が神々の支配下にあったというバベル以降の旧約聖書の宇宙的地理観を覆すための作戦を告げるようにデザインされていました。五旬節の出来事は、バベルにおいて神から見放されたすべての国々に潜入するための戦略でした。霊的戦いの古代的戦略です。

五旬節

使徒行伝2章に記載された五旬節の出来事は、確かに普通ではありませんでした。

五旬節の日がきて、みんなの者が一緒に集まっていると、突然、激しい風が吹いてきたような音が天から起ってきて、一同がすわっていた家いっばいに響きわたった。また、舌のようなものが、炎のように分れて現れ、ひとりびとりの上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、御霊が語らせるままに、いろいろの他国の言葉で語り出した。さて、エルサレムには、天下のあらゆる国々から、信仰深いユダヤ人たちがきて住んでいたが、この物音に大ぜいの人が集まってきて、彼らの生れ故郷の国語で、使徒たちが話しているのを、だれもかれも聞いてあっけに取られた。そして驚き怪しんで言った、見

よ、いま話しているこの人たちは、皆ガリラヤ人ではないか。それなのに、わたしたちがそれぞれ、生れ故郷の国語を彼らから聞かされるとは、いったい、どうしたことか。」使徒行伝 2・1～8)

この素晴らしい御言葉の中で、私たちが旧約聖書の超自然的世界観に導くものは、英訳 邦訳)では明らかではありません。聖霊の到来に関連する「激しい風」は、旧約聖書では神の臨在を示すためによく使用された表現でした 第二列王記 2・1、11、ヨブ 38・1、40・6)。火も神を記述するためによく使用された表現でした 全ゼキエル 1・4、イザヤ 6・4、6・6、ダニエル 7・9、出エジプト記 3・2、19・18、20・18)。

これらの箇所から、神はその出来事の発生時にそこにおられ、その背後にもおられたということが明らかになります。神の意図されたことは、諸国に割り当てられた 申命記 4・19～20、32・8～9) にもかかわらず神に敵対するようになった 詩篇 82) 神々からそれらの国々を取り戻すための作戦を開始することでした。

そのための神の道具は、弟子たちの言葉だったのです。舌のイメージが使われているのはそのためです。神は、ユダヤ人の信徒たちが、五旬節に集まった他のユダヤ人たちに話すことができるようにされました。これらのユダヤ人たちは神に敵対する神々の支配下にあるすべての国々に住んでいました。福音を聞いて信じた彼らは、それぞれの国へ帰り、人々にイエス様について述べ伝えることになりました。

五旬節とバベル

バベルの塔での事件は、国々を分散させて、他の神々の権限の下に置くという神のご決断につながりました 申命記 4・19～20、32・8～9)。一見したところ、あの出来事と使徒行伝 2 章の出来事の間には大した関連性はありません。しかし、原語では、これら二つ間には明らかにつながりがあります。

使徒行伝 2 章の二つの主要な項目によって、使徒行伝 2 章とバベルでの出来事がつながっています。第一に、炎のような舌は分かれて「いると書かれていること、第二に、あらゆる国々から来たユダヤ人で成る群集は、「驚き怪しんだ」とあります。英語 (日本語) では、説得力に欠けるように思われるかもしれませんが、ルカはギリシヤ語で書いており、彼がここで使用した「分かれている」、「驚き怪しんだ」と訳されている言葉は、創世記 11 章 7 節と申命記 32 章 8 節から来ています。これら両方の箇所では、バベルの出来事における言語と諸国の分裂について書かれています。

使徒行伝の著者であるルカは異邦人でした。彼はギリシャ語しか読めませんでした。そのため、彼は旧約聖書のギリシャ語訳当時広く知られていた七十人訳聖書を使用していました。ヘブライ語を読める人は少なかったため、これが初期の教会の旧約聖書でした。ルカは、使徒行伝を執筆したときにバベルの出来事を思い浮かべていました。

しかし、なぜこの関係付けが必要なのでしょう。五旬節の出来事を考えてください。御霊は激しい風と火を伴って来られました。旧約聖書では神はよくそのようにして来られました。炎のような舌によって弟子たちは、お祝いのためにエルサレムに世界各地からやってきたユダヤ人たちの言語を話すことができるようになり、複数の言語を持つ混乱（バベルの結果）が解消されました。これらのユダヤ人の三千人がイエス様に関するメッセージを信じました（使徒行伝 2・41）。

イエス様をメシアとして受け入れた新しい信者たちは、そのメッセージを各自の国（バベルで散り散りになった国々）へ持ち帰るのです。創世記11章で神が人間の国々をお見捨てになった直後、創世記12章では、神は神の新しい民と国を確立するためにアブラハムを召されました。ここでは、神は、以前にお見捨てになったすべての国々から人々を集め、アブラハムの子孫であるユダヤ人の信者たちと共に、神を信ずる家族に加えられます。やがて、神の御国が敵の神々の国々を一面に覆うことになるでしょう。

信じ難いのは、使徒行伝2章に列挙された国々と、その順序です。地図で見ると、旧約聖書の終わりにユダヤ人の追放先のバビロンおよびペルシャなど、東から西（当時知られていた最端の地）へと移動しています。これらの国々は、創世記10章に列挙され、神々の支配下に置かれた国々と同じ距離と範囲に及んでいます。

戦いは血肉に対するものではない

使徒行伝の大部分では、パウロの伝道の旅に関して書かれています。パウロは、異邦人への使徒でした。つまり、イスラエルの外の国々で教会を開始するために、元々神によって遣わされた人でした。パウロの旅、およびローマ人による逮捕などによる事情が、パウロを常に西方へと移動させました。

新約聖書の書簡では、パウロは彼のミニストリーと福音の普及に対抗する霊的権力についてよく語りました。五旬節の出来事の結果、パウロは悪の実体の領域を侵害することになりますが、そのパウロが使用した語彙は、旧約聖書の宇宙的地理観を彼が理解していたことを示しています。目に見えない暗闇の権力に対して、パウロが使った用語の共通点に気付きましたか。

・ 支配・支配者（全ペソ 1・20〜21、6・12、コロサイ 2・15）

- ・ 権威 Ⅰペソ 1・20〜21、3・10、6・12、コロサイ 2・15、第一コリント 2・6
- ・ 権力 Ⅰペソ 1・20〜21、3・10
- ・ 主権 コロサイ 1・16
- ・ 主 複数 Ⅰペソ 1・20〜21、第一コリント 8・5
- ・ 位 コロサイ 1・16

これらの言葉はすべて、地理的な支配権を示しています。実際、政治的権力を握る人間について、これらと同じ言葉が新約聖書およびギリシヤ語の文献でも使用されています。パウロの言語は、領域の権威を表す言語です。それは、霊的世界と人間の世界的関係を表すために旧約聖書で使われている表現方法を反映しています。神によって除外された国々は、神とその民に敵対する霊的存在の支配下にあります。

スペインへ行く」

使徒行伝はパウロのローマへの旅で終わっています。パウロはカイザルに上訴するため、および福音を広めるためという二つの理由で、囚人としてローマに行くところでした。しかし、神に敵対する神々の支配下にある国々を取り戻すには、当時の既知の世界の果てまで行く必要があったのです。旧約聖書の時代には、その場所はタルシシと呼ばれていました。そして、パウロの時代にはスペインと呼ばれていました。パウロは、使命を全うするためにスペインまで行かなければなりません。パウロが投獄される前にローマ人たちへ書いた言葉から、彼が当時の地球最西端の地スペインに行くつもりであったことがわかります。

その途中あなたがたに会い、まず幾分でもわたしの願いがあなたがたによって満たされたら、あなたがたに送られてそこへ行くことを、望んでいるのである。…そこでわたしは、この仕事を済ませて彼らにこの実を手渡した後、あなたがたの所とおつて、イスパニヤに行こうと思う。 (ローマ 15・24、28)

パウロは、御国を復興する神のご計画が自分が生きている間に開始されたということを確認したことにより、刺激を得ました。彼は、「異邦人が全部救われるに至る」とき、オスラエル人は、すべて救われる」と信じていました (ローマ 11・25〜26)。五旬節よってに開始されたことを彼が完了するものと思っていたのです。

このことが重要である理由

パウロは、自分自身の生涯について超自然的な大局観を持っていました。彼は自らを神の道具と見なしていました。実際にそうでした。しかし、五旬節の後、それぞれが住んでいた悪霊の要塞に潜入するためにエルサレムから帰っていった新しい無名の信者たちのすべても同様です。

私たちもそうです。

私たちがパウロと同様に神の道具であるとするならば、パウロの影響力と効力が私たちよりもはるかに大きかったのはなぜでしょうか。違いの一つは、パウロが自分の人生の意味を理解していたことです。彼は、地球を支配していた権力が現実のものであること、そして彼の背後にある権力の方が強いことを信じていました。

あなたはこれらのことを信じていますか。聖書はそれらを当然のこととして提示しています。パウロ自身の人生でも、彼はそれらを当然のこととして扱いました。

パウロは世界が実際にどれほど大きいものかを知りませんでした。北米、南米、中国、インド、ノルウェー、オーストラリア、アイスランド、その他多くの地についても知りませんでした。神はもちろんご存知でした。神は、世界中に福音を述べ伝えるという仕事は、パウロの理解をはるかに超える大きな仕事であることをご存知でした。世界中に福音が届くためには、他の信者もパウロと同じ目標を目指す必要があることをご存知でした。この任務を完了するために積極的に働いていなければ、私たちは地球上での目的に取り組んでいないこととなります。私たちのニーズを満たしていただくためのみに神を求めらるならば、私たちはイエス様、十二使徒、パウロではなく、バベルの人々に似ていることとなります。

この章で吟味した御言葉のもう一つの意味合いは、悪霊の要塞という観念は聖書的であることです。悪霊のゾーンや縄張りの境界線、あるいは暗闇側の霊的な序列について詳しい説明はされていません。しかし、私たちは目に見えない権力が地球をその領域と見なしていることは知らされています。また、私たちは、それらの権力が神の御国に反対し、神の善なる支配を全土に広めるためのご計画に人々を参加させたくないと思っていることも知らされています。それは、論理や経験的証拠によって説明できない抵抗が予想されること、そして独自の力ではそれを打ち負かすことはできないことを意味します。神はその使命を推進するために、

ご自身の御霊と、目に見えない僕を私たちに与えてくださいました 第一コリント3・16、6・19、ヘブル1・13、第一ヨハネ4・4)。

私たちが自問する必要があるのは次のことです。世界、および超自然的な影響力についてパウロと同じ視点を持って私たちが毎日覚めたとしたら、人生はどのように変わるでしょうか。毎日、兄弟姉妹たちを暗闇から開放する任務を持った神の家族の一員としての地位をわきまえて生活を構成したとしたらどうでしょう。私たちが、決定することや話す言葉がそれぞれ無作為・無目的でないことを心得て、意図的に生活したとしたらどうでしょう。私たちが取り巻く目に見えない知性が私たちの決定、行動、言葉を善にも悪にも使用して、他の人々に影響を与えているということをおぼろげに信じたとしたらどうでしょう。私たちの真のアイデンティティ、将来の姿、そしてこの地上に置かれている理由を知ることにおいては、仕事、収入、才能、問題も大して重要なことではなくなります。私たちに超自然の世界も微視的世界も見えません。それでも私たちはそれら両方の世界の一部であり、それらを切り離すことはできません。

初期の信者たちはこのように考えていました。次の章で説明するように、彼らは周囲の世界が、いずれは降伏する暗闇の虜になつていと信じていました。彼らの戦いは、神に敵対する世界とその権力に対するものであったにもかかわらず、彼らは神およびその目に見えない僕たちと共にキリスト教と呼ばれるグローバルなものを静かに設立しました。彼らは霊的な戦いが現実のものであり、最終的には敗北はありえないと信じていました。私たちは、彼らが負けなかったことの証です。

第14章

この世のものではない

ゲツセマネの園で裁判のために捕らわれる前、あの有名な祈りの中で、イエス様は彼に従う者たちについて わたしが世のものではないように、彼らも世のものではありません」(ヨハネ17・16)とおっしゃいました。

信者たちは確かにこの世で暮らし、福音をあらゆる国々へ広めるといふ任務を神から課されていますが(マタイ28・19-20)、彼らは世のものではありません。

世にいながら世のものではないというこのパラドックスは、印象的なさまざまな方法で初期のクリスチャンたちに伝えられました。

聖域、聖地、および神の臨在

第8章で、聖域の概念について語りました。旧約聖書の時代のイスラエル人たちにとって、神は唯一無二の存在でした。神の存在が占有した空間は、その他すべての空間から区別されました。それは神の遍在(同時にどこにも存在すること)の否定を意味したわけではありませんでした。むしろ、神がその民とお会いになるために選ばれた領域をマークするための手段でした。それは幕屋や神殿の目的の一つでした。聖域の概念は、イスラエルの律法と儀式の多くの論拠であっただけでなく、世界が神々、およびいと高き神であるイスラエルの神との間で分割されているという宇宙的地理観を強化するものでもありました。

聖域という観念は、新約聖書にも印象的な方法で持ち込まれます。現在、神のご臨在はどこにあるか?と尋ねるだけではないのです。神は同時にどこにでもおられますが、特にそれぞれの信者の中に宿っておられます。信じられないような話ですが、あなたも聖域なのです。パウロは、はっきりと自分のからだは、神から受けて自分の内に宿っている聖霊の宮(第一コリント6・19)であると言っています。信者がグループとして集まる場所についてもこれと同じことが言えます。パウロは、コリントの教会に宛てて あなたがたは神の宮(第一コリント3・16)であると書いています。エペソの信者たちは 聖なる民に属する者、

神の家族であり…。キリストにおいて、あなたがたも共に建てられ、霊の働きによって神の住まいとなるのです」(エペソ2・19、21～22 新共同訳) とパウロは言っています。

これが意味することは驚くべきことです。私たちのほとんどは、ふたりまたは三人が、わたしの名によって集まっている所には、わたしもその中にいるのである」(マタイ18・20) というイエス様の御言葉をよく知っています。しかし旧約聖書の聖域という考えを背景として見ると、この御言葉は、暗闇の権力の中にあつて信者が集まる場所、彼らが占める霊的場所はすべて清められていることを意味します。

ヤハウエが旧約聖書で最後にお選びになつたお住まいはイスラエルのエルサレムの神殿でした。イスラエルは、神の臨在が宿られたため、聖域となりました。しかし、その聖域は周囲の国々およびそれらの敵対的な神々による脅威にさらされました。同様に、今日の信者も霊的戦いの中にいます。私たちは現在、神の霊が宿られる特別な場所、神の宮です。暗闇の権力にとりつかれた世界全体に点在する神の御臨在の光です。

サタンの手に引き渡す

この概念は、地方教会の神聖さに関するパウロの見解によつてよく説明されています。信者の集団は聖地であり、悔い改めていない罪にふさわしい場所ではありません。

第8章で、イスラエルが陣営(聖域)の神聖さを維持するために、罪にどのように対処したかを説明しました。国の罪が儀式的にやぎ、すなわち「アザゼルのため」のやぎ(レビ記16・8、10)に移される贖罪の日(レビ記16)について語りました。アザゼルは、荒れ野に宿ると考えられていた悪霊的存在でした。イスラエルの人々は、罪を持ち去るそのやぎを荒れ野へ送りました。この儀式により、人々の罪をそれが属する場所である荒れ野、霊的暗闇の場所に象徴的に送りました。

パウロは、コリントの人たちにもそれと同じ方法で罪に対処させました。つまり、罪が属する場所へそれを送るのです。第一コリント5章では、パウロは姦淫の罪に浸つて生きている男について書いています。彼を「サタンの手に引き渡しなさい」(1コリント5・5 LTB リビングバイブル)と命じています。その論拠は明確です。聖域に罪が存在する場所はないということです。信者は、悔い改めない信者を教会から排除する必要があります(第一コリント5・9～13)。教会から追放されることは、サタンの領域である世に引き渡されることです。

悔い改めないこの男の 肉が滅ぼされても、その霊が主のさばきの日に救われるように」 第一コリント5・5」という結果を望んだのです。ここに言っているのは、物理的な死ではなく、この男を誘惑する肉体的欲望の死のことです ガラテア5・24、第一コリント11・32(33)。

霊的戦いとしてのバプテスマ

この問題に関するペテロの態度は、パウロと同じでした。すなわち、信者は暗闇の権力と対抗させられているということです。戦いという彼の考えは、新約聖書の一風変わった、次の御言葉 第一ペテロ3・14(22)に見られます。

しかし、万一義のために苦しむようなことがあっても、あなたがたはさいわいである。彼らを恐れたり、心を乱したりしてはならない。ただ、心の中でキリストを主とあがめなさい。また、あなたがたのうちにある望みについて説明を求める人には、いつでも弁明のできる用意をしていなさい。しかし、やさしく、慎み深く、明らかな良心をもって、弁明しなさい。そうすれば、あなたがたがキリストにあって営んでいる良い生活をそしめる人々も、そのようにのしつたことを恥じるであろう。善をおこなって苦しむことは——それが神の御旨であれば——悪をおこなって苦しむよりも、まさっている。キリストも、あなたがたを神に近づけようとして、自らは義なるかたであるのに、不義なる人々のために、ひとたび罪のゆえに死なれた。ただし、肉においては殺されたが、霊においては生かされたのである。こうして、彼は獄に捕われている霊どものところを下って行き、宣べ伝えることをされた。これらの霊というのは、むかしノアの箱舟が造られていた間、神が寛容をもって待っておられたのに従わなかった者どものことである。その箱舟に乗り込み、水を経て救われたのは、わずかに八名だけであった。この水はバプテスマを象徴するものであって、今やあなたがたをも救うのである。それは、イエス・キリストの復活によるのであって、からだの汚れを除くことではなく、明らかな良心を神に願い求めることである。キリストは天に上って神の右に座し、天使たちともろもろの権威、権力を従えておられるのである。

この御言葉の不可解な部分に気付かれたことでしょうか。箱舟、ノア、および獄に捕われている霊どもがバプテスマとどんな関係があるのでしょうか。この御言葉はバプテスマが私たちを救うと言っていますか。

ここでペテロがしていることはパウロがローマ書5章でしていることと同様です。パウロは、ローマ書のその箇所ではイエス様について語っていますが、アダムを念頭に置いています。イエス様を、ある意味ではアダムの正反対と考えてください。ひとりの人「アダム」の不従順によって、多くの人が罪人とされたと同じように、ひとり「イエス様」の従順によって、多くの人が義人と

されるのである」(ローマ5・19) というようなことをパウロが言っているのは、そのためです。第一ペテロ3章でイエス様について書いたとき、ペテロはアダムではなくエノクを念頭に置いていました。しかし、ペテロの場合、エノクとイエス様は正反対ではありませんでした。エノクは、イエス様についてペテロが強調したいポイントを示すための比喻の役割を果たします。

何のポイントか?」と思われるかもしれませんが、結局のところ、旧約聖書のエノクに関する箇所はほんのわずかにすぎません(創世記5・18〜24)。それらの箇所からわかることは、エノクが大洪水の前に生きていたこと、およびエノクは神とともに歩み、神が彼を取られたので、いなくなつた」(創世記5・24) ということのみです。これらの箇所には、第一ペテロ3章でペテロがイエス様について語っていることとの関連性はありません。

エノクがしたことがペテロにイエス様を思い起こさせた理由を理解するには、ペテロが旧約聖書の外のユダヤの書物でエノクについて読んだことを理解する必要があります。具体的に言うと、ペテロはエノクについて多くを語っている古代ユダヤのある書物に慣れ親しんでいました。それは予想どおり第一エノクという名前の書物でした。この書は、大洪水のときの出来事について、特に神の子らが人間の女性たちと子ネピリム巨人を設けたという創世記6章1〜4節のエピソードについて、多くの詳細を提供しました。ペテロとユダがノアの時代に罪を犯した御使いについて書いたとき(第二ペテロ2・4〜5、ユダ6)、聖書の大洪水の物語には含まれない第一エノクのアイデアをほのめかせていました。たとえば、創世記の大洪水の記述は、神の子らが終末まで、死者の世界である陰府に投獄されていること(第一エノク6・1〜4、7・1〜6、10・4、11〜13)にはまったく触れていません。

第一エノク書に書かれているこれらの「獄に捕われている霊ども」に起こった何かによって、ペテロはイエス様に関する洞察を得たのです。第一エノク書の物語では、エノクは、獄にとらわれていた霊たちから神とのとりなしを頼まれた夢を見ます。エノクは神と共に歩んだ人ですから、思い直して彼らを解放するように神に懇願するには彼より適した人はいないでしょう。エノクはどのように神に懇願しましたが、凶報を受け取りました。神のお答えは「No」だったのです。エノクはその後、その答えを伝えなければなりませんでした。そのため獄にとらわれていた霊たちのところまで下ったのです。エノクは彼らが依然として裁きの対象であることを伝えました。

ペテロはこの話をイエス様の比喻として使用しました。彼が理解させたかったポイントは、イエス様はお亡くなりになったとき、陰府に下られ、墮落した神の子たちへのメッセージをお持ちになりました。イエス様が死人の世界へ入られるのを見た彼らは、彼らの仲間の悪霊たちが勝利し、間もなく牢獄から開放されると思ったことでしょう。代わりに、イエス様はご自身が間もなくよみ

がえることを彼らにお告げになりました。これはすべて神のご計画の一部でした。彼らは勝利してはいませんでした。彼らは依然として裁きの下にあり、破壊の運命にありまいた。この奇妙な御言葉が、イエス様が天に上って神の右に座し、天使たちともろもろの権威、権力を従えておられる」 第一ペテロ3・22」ところで終わっているのは、そのためです。

ペテロはなぜこれらすべてをバプテスマに関連付けたのでしょうか。ペテロの頭の中では、イエス様の死と復活は、悪霊の権力に対するイエス様の勝利の告知と共に、バプテスマに象徴されていたのです。バプテスマは、イエス様の死、埋葬、および復活を象徴しています（ローマ6・1〜11）。

ペテロにとって、これらすべてがバプテスマを指し示しているのは、バプテスマが「オエス・キリストの復活によるのである」：「明らかな良心を神に願ひ求めることである」 第一ペテロ3・21「ためです。ギリシャ語で「願ひ求める」を表す言葉は、誓約を示す言葉です。ギリシャ語の「良心」は、善悪を区別する能力を示すことがよくあります。しかし、ここではそれは適用されません。善悪の区別をわかまえることは、イエス様の死、埋葬、復活と特別な関係はありません。このギリシャ語は、確約、おろかなものではなく、好ましい確約を指す場合もあります。ペテロの第一の手紙3章でペテロが暗示しているのはこのことです。本質的に、バプテスマは忠誠の誓いであり、悪霊の権力、およびその場にいる人々へのメッセージであり、霊的戦いでどちらの側に立っているかを示すためのものでした。古代のクリスチャンは、現代人の私たちよりもこのことをよく理解していました。この御言葉のために、初代教会のバプテスマの儀式にはサタンとその使たちを拒絶することが含まれていました。

このことが重要である理由

まず、信者は自分が聖域であること、つまり神の臨在が宿る場所、旧約聖書の栄光であることを理解する必要があります。そんなふうに生きていますか。イスラエルの人々およびイエス様の時代の信者たちは、信じない人たちとは異ならなければならないという必要性を常に感じていました。信じない人たちから接触を避けられるように、わざと奇妙に振舞うことが目的だったわけではありません。イスラエルは、「祭司の国」であり「聖なる民」とされてきました（出エジプト記19・6）。神がその子らに望まれたとおり生き方をするには、実りある、生産性の高い、幸せな人生につながりました。イスラエルの人々は、敵の神々によって奴隷にされていた人々が真の神に立ち戻るように、彼らを引き付けなければなりませんでした。

私たちの世界観が、あらゆる国々から人々を救い出し、神の家族の一員にするための神のご計画と調和する場合、私たちはこの世のものではなくなります。この世のものであることは、この世の関心事に心を奪われ、それに従って生きることです。信じない

人々には、私たちの言動、倫理、および他人への態度から、私たちが皮肉、わがまま、辛らつてはなく、競争に勝つことや人を使うことに関心を持っていないことがわかるはずで、私たちは自己の欲求の満足のために生きるべきではありません。私たちは、これらと正反対のものならなければなりません。つまり、イエス様のように生きるのです。イエス様は他の皆とは違っていたため、人々は彼のそばにいることを好みました。

二つ目に、私たちの教会での活動は、神とイエス様を高めるものでなければなりません。聖書の時代には、幕屋や神殿に行くことにより、神の完全性、唯一無二性、そして子たちへの神の愛についての考えが強められました。これらのことは密接に関連しています。何も必要とされず、何者にも勝る神がなぜ人間の家族を望まれるのでしょうか。その神はなぜ、バベルで国々を見捨て、他の神々に委ねた後で、わざわざ新しい家族を作られるのでしょうか。なぜ破棄されないのでしょうか。それは神が私たちを愛しておられるからです。

愛が意味を持つのは、神が別のことをすることができたはずなのに、されなかったということを知っているからです。教会で、神がお持ちの他の特性にその愛を照らした場合のアイロニーを指摘せずに、神の愛についてのみ語ると、信者たちはその愛を当たり前と思ってしまう。それは、たとえば神の聖さを認識しない人々にとっては、安物の愛に聞こえるかもしれません。

この章で検討したことの二つ目の意味合いは、暗闇の権力は私たちの行動によって、私たちがどちらの側なのかを知ることです。彼らは馬鹿ではありません。彼らは私たちの神への忠誠を認識すると共に、私たちがバプテスマや、罪への抵抗などによって、イエス様に従う決意の下に行動するのを目撃します。また、私たちが神に対して不忠誠な行動をするときも彼らは見ており、それが私たちの生活にもたらす弱みも理解しています。信じられないかもしれませんが、私たちは霊的戦いの両方の側によって観察されているのです。

これらの真実に従って行動することは、それを理解することほど簡単ではありません。私たちは贖われてはいるものの、墮落した者なのです。これらの真実を生きるには、この世にいる理由、独自の世界で異邦人として暮らしている理由に精神と心を合わせることがあります。イエス様のように、私たちはこの世のものであるが、この世のものではありません。ヨハネ8・23、第一ヨハネ4・4)。神の子であることの意味をはっきりと把握できると、このコントラスト、および私たちの地位はさらにはっきりします。

第15章

神の性質にあずかる者

あなたは自分が何者であるかを知っていますか？

前にもこの質問をしました。もう一度問うときが来ています。私たちは、実際にこの世に住んでいます。この世のものではありません。そうです。私たちは、恵みにより、イエス様の十字架でのお働きに対する信仰により救われたのです（エペソ2・8〜9）。しかし、それは神のご計画の理解の始まりにすぎません。

エデンにおける神の本来の意図は、人間の家族を、天地創造以前から存在していた神の子らである天上の家族と融合させることでした。人間の墮落の時点でそのご計画を断念されたわけではありません。クリスチャンの皆さん、あなたがたは神のエロヒムの子たちの一人のように、そしてイエス様ご自身のように神聖な者とされるのです（第一ヨハネ3・1〜3）。

神学者たちはこの考えにさまざまなラベルを付けています。最も一般的なものに、栄光化が挙げられます。ペテロは「神の性質にあずかる者」となることとしてこれを示しています（第二ペテロ1・4）。ヨハネは次のようにこのことを示しています。わたしたちが神の子と呼ばれるためには、どんなに大きな愛を父から賜わったことか、よく考えてみなさい。わたしたちは、すでに神の子なのである」（第一ヨハネ3・1）。この章では、聖書がこのメッセージをどのように伝えているかについて見ていきます。

神の子ら、アブラハムの種

バベルにおいて神がこの世の国々を他の神々に委ねられたとき、ご自身の新しい人間の家族によってやり直すことを承知されていきました。神はバベル 創世記 11・1～9 の直後にアブラハムを召されました 創世記 12・1～8)。アブラハムとその妻サラを通して、神は当初のエデンの園のご計画に立ち戻られるのです。

神の民、アブラハムの子ら、イスラエルの人々は、最終的に地球における神の善なる統治を復活させることに失敗しました。しかし、それらの子たちの一人が成功することになります。神は、ダビデ、アブラハム、およびアダムの子孫であるイエス様において人間とされるのです。バベルで罰した国々をいつか祝福するという神のお約束は、イエス様を通して守られました。パウロはそのことについて数箇所に書き記しています。以下にその例を二つ示します。

すなわち、すでに簡単に書きおくれたように、わたしは啓示によって奥義を知らされたのである。あなたがたはそれを読めば、キリストの奥義をわたしがどう理解しているかがわかる。この奥義は、いまは、御霊によって彼の聖なる使徒たちと預言者たちとに啓示されているが、前の時代には、人の子らに対して、そのように知らされてはいなかったのである。それは、異邦人が、福音によりキリスト・イエスにあって、わたしたちと共に神の国をつぐ者となり、共に一つのからだとなり、共に約束にあずかる者となることである。 (コリント 3・3～6)。

あなたがたはみな、キリスト・イエスにある信仰によって、神の子なのである。キリストに合うバプテスマを受けたあなたがたは、皆キリストを着たのである。もはや、ユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自由人もなく、男も女もない。あなたがたは皆、キリスト・イエスにあって一つだからである。もしキリストのものであるなら、あなたがたはアブラハムの子孫であり、約束による相続人なのである。 (ガラテア 3・26～29)

前の章で説明したように、旧約聖書全体を通して、イスラエル人以外の人々は、バベルで神が割り当てられた神々の支配下の領域に居住していました。バベルでは、イスラエル以外の国々は、真の神との関係を剥奪されました。イスラエルのみが人類における神の「分」 申命記 32・9) でした。イスラエルの人々は、神に見捨てられた国々をさまざま名前前で呼びました。地理的または民族的な呼び名 (エジプト人、モアブ人、アマレク人など) がありました。新約聖書時代の総称は、異邦人でした、これはラテン語の「諸国」 (Gentis) を表す言葉に由来します。ユダヤ人でない者は、異邦人です。

新約聖書のストーリーは、アブラハムの子孫であるイエス様が、死んでよみがえることにより、アブラハムの民族的な子孫 (イスラエル人・ユダヤ人) だけではなく、以前に真の神から見捨てられた国々のすべての人々を救うというものです。前に引用した

御言葉では、パウロは神の家族への異邦人の受け入れをミステリー（奥義）と呼んでいます。神から見捨てられ、他の神々の支配下にあった国々の人々が、アブラハムに与えられた約束を継承できるということは、パウロを驚かせました。

キリストにあつては、福音を受け入れたすべての人が、真の神、アブラハム、イサク、ヤコブの神であるヤハウエの子なのです（ヨハネ1・12、ガラテア3・26、ローマ8・14）。新約聖書では家族を表す言葉（息子、子供たち、継承者など）、および神によって神の子としての身分が与えられる」というような表現を使用して、信者のことが語られているのはそのためです。相続に関連する表現は、明確かつ意図的です。それは私たちが何者であるのかを語っています。つまり、神の新しい人間の家族です。信者の宿命は、アダムとエバの元々の姿になることです。つまり、神の不滅の栄光の似姿として、神の御前に生きることです。

しかし、これも私たちが何者であるのかを完全に表現しているとは言えません。最も驚くべきことは、イエス様が私たちがどのように見られているかということなのです。

家族の再会

へブル書の最初の二つの章には、神の混合家族（天上の存在と人間）が劇的に描かれています。聖書のこの箇所は、私にとっては最も感動的な御言葉の一つです。

「へブル人への手紙1章は、イエス様が「天使たちより優れた者」（へブル1・4 新共同訳）であるという点を主張しています。神の天上の会議においてイエス様より高き者はいません。なんとと言っても、イエス様は神なのです。実際、著者は、人間になつて神の国を継承するのに適任な者は御使いたちの中にはいなかったため、神の御使いたちはイエス様を礼拝する必要があった（へブル1・5〜6）ということを指摘しています。イエス様は王です。

意外なことに、人間になられたとき、イエス様はしばらくの間、御使いたちよりも低い者となりました。彼は私たちの一人となられたのです。人間は、御使いたちのような天上の存在に劣る創造物です。へブル人への手紙の著者は、次のように問います。

人間が何者だから、これを御心に留められるのだろうか。人の子が何者だから、これをかえりみられるのだろうか。あなたは、しばらくの間、彼を御使たちよりも低い者となし、栄光とほまれとを冠として彼に与え、万物をその足の下に服従させて下さった。ただ、しばらくの間、御使たちよりも低い者とされた」イエスが、死の苦しみのゆえに、栄光とほまれとを冠として与えられたのを見る。それは、彼が神の恵みによって、すべての人のために死を味わわれるためであった。（へブル

ル2・6〜9）

イエス様がなさったことの結果は何でしょう。皆さんは救いとおっしゃるかもしれませんが、ヘブル人への手紙の著者のポイントを理解していきなさい。神はイエス・キリストにおいて人間になられたため、彼に従う人間は天の者、つまり同じ家族の一員となります。

いつか、死に臨んだときも、地上の御国の最終的な形としての新しいエデンへのイエス様の再来のときも、イエス様は私たちと残りの天上の会議を引き合わせてくださいます。イエス様は私たちがご自身のようになるために、私たちのようになられたのです。なぜなら、万物の帰すべきかた、万物を造られたかたが、多くの子らを栄光に導くのに、彼らの救の君を、苦難をとおして全うされたのは、彼にふさわしいことであつたからである。実に、きよめるかたも、きよめられる者たちも、皆ひとりのかたから出ている。それゆえに主は、彼らを兄弟と呼ぶことを恥とされぬ。

すなわち、わたしは、御名をわたしの兄弟たちに告げ知らせ、

教会の中で、あなたをほめ歌おう」と言い…

見よ、わたしと、神がわたしに賜わった子らとは」と言われた。

(ヘブル 2・10～3)

人間になること、神の会議のエロヒムの前で、それらの神々よりも低い者になることについて恥ずかしく思う代わりに、イエス様はそれを明らかにされます。それはすべて大戦略の一部だったので。会議の中に立ち、イエス様は次のことを示されます。私と、神が私にくださった子らを見てください。私たちは永遠に、一緒です。初めからこれがご計画でした。

神の栄光の天の家族に加わることが私たちの宿命です。パウロは、ローマ人への手紙 8 章 18 ～ 23 節で、このことを見事に表現しています。

わたしは思う。今のこの時の苦しみは、やがてわたしたちに現されようとする栄光に比べると、言うに足りない。被造物は、実に、切なる思いで神の子たちの出現を待ち望んでいる。それだけではなく、御霊の最初の実を持っているわたしたち自身も、心の内でうめきながら、子たる身分を授けられること、すなわち、からだのあがなわれることを待ち望んでいる。

パウロは、それと同じメッセージによって信者を激励しました。彼は、神がローマの信者たちを「御子のかたちに似たものとして」として、あらかじめ定めて下さった。それは、御子を多くの兄弟の中で長子とならせるためであった」(ローマ8・29)と彼らに語っています。コリントの教会には「わたしたちはみな、顔をおいなしに、主の栄光を鏡に映すように見つ、栄光から栄光へと、主と同じ姿に変えられていく」(第二コリント3・18)と語っています。「この朽ちるものは必ず朽ちないものを着、この死ぬものは必ず死なないものを着ることになる」(第一コリント15・53)ため、人類は造りかえられると。ペテロにとっては、神の家族会議に加わることは、「神の性質にあずかる者」となること(第二ペテロ1・4)を意味していました。ヨハネは、とても単純に「自分たちが彼に似るものとなる」(第一ヨハネ3・2)と言っています。

このことが重要である理由

クリスチャンとして、イエス様のようになる必要があるという何を聞いていますか。そのとおりですが、それを聞いたとき、私たちは善人であること、または「悪の度合いが低いこと」の観点からしかそれを捉えない傾向があります。私たちがいつの日かイエス様のようになるという、実際には信じ難いアイデアを、履行義務に変えてしまうのです。

イエス様の似姿とは程遠いことに罪の意識を感じ、心の中で「向上」を誓う代わりに、私たちはイエス様がしてくださったこと、およびこれからしてくださることに由る恵みによって、イエス様と似た者になることについての考え方を改めていただく必要があります。神の怒りを避けるために、キリストの似姿を、行わなければならない行為に変えてしまうことがあります。それは間違った神学です。それは恵みを義務に変えてしまいます。あるいは、神がいつの日か、私たちにあらかじめ定められたとおりの者にしてくださいること(ローマ8・29)に感謝し、暗闇の権力の奴隷となっている人々から神の家族に加わりたいと思われるような生き方をすることもできます。前者の観点は内向きであり、後者の観点は天を仰ぎます。

クリスチャンの今の人生は、私たちが暗闇の奴隷であったときから私たちが愛してくださった方を喜ばせることができないという恐れを中心としたものではありません。クリスチャンの人生で重要なのは、神の家族への受け入れ。イエス様が私たちの兄弟とされることを意味する)、および神の御国を地上に復興するための神のご計画における私たちの目的という二つの概念を理解することです。私たちは、現在、そして将来の新しい神の会議です。神は私たちの父です。私たちは神の子であり、永遠に神と暮らす宿命にあります。私たちは神と共に働く者であり、死の神によって所有され、暗闇の見えない権力にとらわれている者たちを開放するために神を補佐する任務を負っています。

それがエデンで始まりエデンで終わる聖書の中核です。それがあなたの宿命です。あなたの人生は、神の家族の中での地位を獲得するためのものではありません。それは獲得するものではないのです。賜物なのです。あなたの人生の意義は、子という身分を授かることへの感謝を示し、それを楽しみ、他の人たちとそれを共有することにあります。

第16章

御使いたちを治める

クリスチャンとして、私たちが何者であるのかを理解することは非常に重要です。私たちは、神の息子であり娘であり、新たに創り上げられた神の会議として、父である神の国に既に参加しているのです。しかし、それだけではありません。確かに私たちは神の家族会議ですが、目的は何なのでしょう。

私たちは既に御国の中にいますが（コロサイ1・13）、御国はまだ完全に明らかにはなっていません。つまりこの世はまだエデンになっていないのです。既に、しかしまだ」というパラドックスは、さまざまな意味で聖書を貫いています。この章では、「まだ」の部分を見聞する機会を提供することで、「目的は何か？」という質問に答えたいと思います。

御国に今生きる

神の御国への私たちの参加は、私たちがプログラムされた機能を実行する単なるロボットではないという点では、あらかじめ定められていないと言えます。それは神の似姿、神を代表する者であるという考え全体に反するからです。私たちは神に似せて創造されました。神は自由です。本物の自由を持っていなければ、神と似た者になることはできません。つまり、定義上、神と似た者とはなりません。神に従い、神を崇拜するのも自由ですが、反逆して身勝手にするのも自由です。私たちは、自分が撒いたものを収穫します。つまり、因果応報です。そして撒くことはプログラムされていません。

しかし、神は私たちよりも大きなお方です。神にはご計画がありました。それは実現します。そのご計画の成功は、人間の自由に依存しません。またそのご計画を人間の自由に合わせる必要もありません。私たちはそのご計画を覆すことはできません。同じく選択の自由を与えられている天上の存在にもそれはできません。

本書の第1章で紹介した天上の会議について考えてみてください。聖書に書かれていることをあなたが信じているかお尋ねしました。その後で、第一列王紀22章の天上の神の会議の集まりをお見せしました。神は、邪悪なアハブが死ぬときがきたと命じられました。そのため、アハブの死は必ず起こらなければなりません。しかし、それを成し遂げる方法の決定は、神の会議の霊的存在に委ねられました 第一列王記22・19〜23)。

神の御国の統治では、運命づけと自由は連携して働きます。神の目的が覆されたり、中止されたりすることは決してありません。神は、罪や反逆を許容しながら、他の自由な代表者たちを通して、望みどおりのことを達成することができます。C・S・ルイスが著書『レランドラ―金星への旅』(中村妙子訳)で神について語っているように、むろん、あなたが何をしようとも、彼はそこからよいものを作りだして下さるでしょう。しかしそれは、あなたが彼に従った場合に彼の備えて下さるよいものとは違います。」

私たちが、神の家族会議であることの今ここにおける目的は何なのでしょようか。神と連携して、暗闇から人々を解放することです。神に倣い、公正な、そして慈悲を持った生き方を人々に示すことです。ねたみを抱いた天上の知能の支配下にある敵対的な世において、まことの神についての真実を守り、広めることです。神が意図されたとおり、人生を楽しむことです。

これらの使命はすべて、将来の御国に備えたトレーニングです。この世の関心事について口論していて天上の大局観を失ってしまったコリントの人々に、パウロは「わたしたちが天使たちさえ裁く者だということを、知らないのですか」(第一コリント6・3)と尋ねましたが、彼は本気でした。パウロは、この発言で、何か具体的なことを意味していました。

国々の上に置かれる

御国の最終的な形はいまだ将来のことです。そのときには、暗闇の権力が打倒されます。悪霊的神々は、国々の支配を永久に失い、神の栄光の人間家族と会議がそれに取って代わります。ヨハネの黙示録でのイエス様の御言葉をご覧ください…

ただ、わたしが来る時まで、自分の持っているものを堅く保っていないさい。勝利を得る者、わたしのわざを最後まで持ち続ける者には、諸国民を支配する権威を授ける。彼は鉄のつえをもって、ちようど土の器を砕くように、彼らを治めるであろう。それは、わたし自身が父から権威を受けて治めると同様である。わたしはまた、彼に明けの明星を与える 黙示録

2・25〜28)

イエス様は、新しい地球、つまり新しいグローバルなエデンに戻られて王位に就かれると、その兄弟姉妹たちとそれを共有されます。もろもろの支配や権威は、その座を追われ、私たちがそれらに代わります。彼らの領地は、神に忠実な御使いたちに与えられるではありません。神の最終的なエデンの園の王国では、私たち人間は御使いたちより上の地位に就きます。イエス様は、人間の兄弟姉妹に管理をお任せになります。

ヨハネの黙示録2章28節の最後の「彼に明けの明星を与える」という御言葉に困惑しましたか。なるほど奇妙に聞こえますが、これは悪の権力が処理された後の国々を私たちがイエス様と共に支配するときのことを語っています。「明けの明星」は、天上の存在を記述するために使用されています(ヨブ38・7)。また、メシアを表す用語でもあります。メシアは天上の方であるため、彼の将来の支配を記述するために「明星という表現」が使用されることがありました。民数記24章17節には、「ヤコブから一つの星が出、イスラエルから一本のつえが起り」とあります。ヨハネの黙示録でイエスさまはご自身のことを次のように表しておられます。「わたしは、ダビデの若枝また子孫であり、輝く明けの明星である」(黙示録22・16)。

ヨハネの黙示録2章25〜28節の言い回しは強力です。イエス様は、ご自分がメシアを表す明けの明星であるとおっしゃっているだけではなく、明けの明星を私たちに下さいます。つまり、メシアの統治を私たちと共有されるのです。信者がポイントを見失うことがないように、ヨハネの黙示録3章20〜21節は、このことをさらに一歩進めています。

見よ、わたしは戸の外に立って、たたいている。だれでもわたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしはその中にはいって彼と食を共にし、彼もまたわたしと食を共にするであろう。勝利を得る者には、わたしと共にわたしの座につかせよう。それはちようど、わたしが勝利を得てわたしの父と共にその御座についたのと同様である(黙示録3・20〜21)。

私たちはどのような目的で神の性質にあずかる者とされたのでしょうか。イエス様は、会議で私たちが彼の兄弟姉妹として紹介されるのはなぜでしょう。それは神が当初の望みに従って、私たちに地球の支配権を与えることができるようにするためです。天国は新しいグローバルエデンとしてこの地球に戻ります。

永遠のエデン

創世記の最初の章から、エデンは人間、神の表現者、および御国のための神のご計画の焦点でした。そのため、ヨハネの黙示録の最後の章でエデンに立ち戻ることは、驚くべきことでも、偶然の一致でもありません。

御使はまた、水晶のように輝いているいのちの水の川をわたしに見せてくれた。この川は、神と小羊との御座から出て、都の大通りの中央を流れている。川の両側にはいのちの木があって、十二種の実を結び、その実は毎月みどり、その木の葉は諸国民をいやす。のろわるべきものは、もはや何ひとつない。神と小羊との御座は都の中であり、その僕たちは彼を礼拝し、御顔を仰ぎ見るのである。彼らの額には、御名がしるされている。夜は、もはやない。あかりも太陽の光も、いらぬ。主なる神が彼らを照し、そして、彼らは世々限りなく支配する。 黙示録 22・1〜5)

いのちの木が諸国民を癒すことに気付きましたか。もろもろの支配や権威によって支配されていた諸国は、神の新しい息子うあ娘たち（あなた方と私）によって治められるのです。

ヨハネの黙示録でいのちの木が登場したのはこの箇所が最初ではありません。ヨハネの黙示録 2 章 7 節、および 11 節で、イエスは、最後まで信仰を持ち続ける者たちに対して「バラダイスにあるいのちの木の実を食べることをゆるそう」第二の死によって滅ぼされることはない」とおっしゃいました。ここでのいのちの木の参照は、明らかにエデンの園に関連しています。第一の死は、アダムの罪とエデンからの追放によってもたらされた肉体的な死を指します。信じる者も信じない者も同様に、人類はすべて裁きの前に復活し、第二の死は最後の審判です 黙示録 21・8)。新しいエデンで神と一緒に生き続ける者たちは、第二の死を免れます。

このことが重要である理由

クリスチャンの多くは、死後の世界について不適切な見解を持っています。御言葉は、それがどのようなものかについてすべては語っていませんが、一部の側面は確かなものです。私たちは雲の上に浮かびながらハーブを奏でたり、延々と歌ったりするわけではありません。ただ天国の長いすに座って、故人や、過去の有名な信仰者とおしゃべりするわけでもありません。

そうではなくて、私たちはエデンの園が提供する人生を生きているのです。私たちは、神への忠誠を固守した天上の存在たちと一緒に、神による被造物を楽しみ、管理するのです。天と地は別々の場所ではなくなります。

自分の宿命を知ること、今ここで生きる私たちの考えの形成につながるはずです。パウロが言ったように、「目がまだ見えず、耳がまだ聞かず、人の心に思い浮びもしなかったことを、神は、ご自分を愛する者たちのために備えられた」第一コリント 2・9) のです。この壮観な、栄光に輝く結果を知ることにより、私たちは現在の状況を全体像において捉えることができます。この御言葉を書いた後、パウロはコリント人への第二の手紙で次のように述べています。

ほむべきかな、わたしたちの主イエス・キリストの父なる神、あわれみ深き父、慰めに満ちたる神。神は、いかなる患難の中にもわたしたちを慰めて下さり、また、わたしたち自身も、神に慰めていただくその慰めをもって、あらゆる患難の中にある人々を慰めることができるようにして下さるのである。兄弟たちよ。わたしたちがアジヤで会った患難を、知らずにいてもらいたくない。わたしたちは極度に、耐えられないほど圧迫されて、生きる望みをさえ失ってしまい、心の中で死を覚悟し、自分自身を頼みとしないで、死人をよみがえらせて下さる神を頼みとするに至った。第二コリント1・3（9）

神は生きている私たちを守ることができますが、死んでも、私たちはよみがえり、イエス様と共にイエス様の座に就きます 黙示録3・21）。

行き先を視野に入れた生き方とそうではない生き方があります。私たちの姿勢は、宿命に対する意識によって変わるはずですが、あなたが批判したり、けなしたり、見下したりしている相手とアパートを共有したり、同じオフィスで働いたりすることがわかっていたら、あなたはその人に対してピースメーカー、奨励者、それとも友人であるように、もう少し努力を注ぎ込むことでしょうか。私たちが信者仲間を粗末に扱うのはなぜでしょうか。敵として不信仰者に接することに費やすエネルギーと比べ、不信仰者をイエス様に近づけるために費やすエネルギーがずっと少ないのはなぜでしょうか。それは私たちが永遠を視野に入れていくかどうかによります。

あなたの幸福を保つために、イエス様はどれだけの統治をあなたと共有する必要があるのでしょうか。イエス様からのそのような賜物は何でも素晴らしいため、変な質問だと思われるでしょう。では、他の信者と地位を競うのはなぜですか。優位、注目、個人的な利益をめぐってお互いに言い争うのはなぜですか。私たちは、パウロがその宿命を思い出させる必要があったコリント人たちと変わらないのでしょうか。要は私たちが、イエス様と共に統治し、君臨するという事に満足しているかどうかということです。

クリスチャンの皆さん、あなたが何者であるか、そしてあなたに対する神のご計画を知っているかのように生きるときがきました。

結論

旅の終わりに到達しました。しかし、まだ始まったばかりと言ったほうがいいかもしれません。これまで、次のような根本的な問題を検討してきました。他の神々は存在するか。存在するとしたら、それは私たちの聖書の理解に影響を及ぼすか。聖書に記述された見えない世界が、慣れ親しみ受け入れられている部分だけでなく、普通ではなく無視されることの多い部分も含めて、実際に現実であるとすると、それは私たちの信仰に対してどのような意味を持つか。私は御言葉における超自然的プロットの大意をつかみ始めたなら、あらゆることについて違った考え方をしなければならぬことを悟りました。それは二つの言葉で要約できます。アイデンティティと目的です。皆さんも本書をお読みになり、これらの両方の分野で課題が呈されたのではないかと思います。

私たちのアイデンティティ―神の家族に私たちの居場所がある

本書で検討した内容は、クリスチャンであること、新約聖書で言う「ヤリストに在ること」の意味の理解に大きく影響します。旧約聖書に出てくる神々が現実であることを認識すると、ヤハウエ、イスラエルの神の前に他の神を持つなどという神の戒めの意味が明確になります。この戒めは、お金やボートや車に注意を注ぐことに関するものではありません。神の民に対するねたむほどの神の愛に関するものです。つまり、この戒めは実際に文字通りのことを意味しているのです。あらゆる神の中の神以外の神に忠誠を尽くすという狂気を見逃すことはありません。

神々とそれらに属する人々（諸国）が神によって裁かれた結果と共に生きなければならないことの恐ろしさは、明らかです。私たちは、かつて廃嫡され、他の神々の腐敗と搾取の奴隷となっていました。パウロが言うように、私たちは、神から遠く離れ、神の契約の愛には縁のない部外者でした（エペソ2・12）。私たちは迷い、暗闇の奴隷となり、見えない君主に仕える、神の敵でした（エペソ4・18、コロサイ1・21）。

この状況を把握することで、子たる身分を授かることや、相続の教義上の概念の意味が深まります。コンテキストを得ることができません。神は、ご自分の家族と共に地上に暮らし、自らがお造りになった世界を楽しむというご計画を取り消すことをお望みになりませんでした。バベルでは、確かに人類をお見放しになりました。しかし、次の瞬間には新しい家族を立てるため、および廃嫡された者たちが神に立ち戻るための道を開くためにアブラハムをお召しになりました（使徒行伝 10・26〜27）。

聖書の霊的世界の超自然的現実を受け入れることは、聖書を理解するために不可欠です。旧約聖書を読み進むのに連れ、偶像礼拝の罪がなぜ他の罪とは異なるのかがわかってきます。それは罪の中の罪です。イスラエルは神に忠実であるために作られました。他の神々に心を移したイスラエルは、追放され、他の国々と同様に見捨てられました。これが、聖書で救いが常に信仰に関連して説明されている主な理由です。神は最終的により良い振る舞いを求めておられるわけではありません。神は信仰、つまり信じる忠誠を求めておられるのです。私たちは心を神の中の神に合わせることを選択したときに救われます。別の道を選択した場合、私たちは撒いたものをいつか収穫します。

今日の私たちにとっては、信じる忠誠とは、十字架におけるイエス様のお働きを受け入れることを意味します。イエス様は人間の姿の神だったからです。私たちの倫理と振る舞い（働き）は、神に受け入れられるだけ十分に忠実になることではありません。イエス様を既に選んだがゆえに、イエス様の戒めに従うのです。イエス様の戒めは、私たちの幸福と満足につながります。私たちが自分と他者の破壊を避けることができます。イエス様の戒めから、神とその家族、つまり私たちの家族、見える、見えなにかかわらず）と調和した、御国つまり新しいエデンでの生活を垣間見ることができます。

私たちの目的 — エデンの復興のための神のご計画では私たち全員に役割がある

神の家族のメンバーシップには条件が一つだけあります。神の中の神に対する揺ぎない信仰です。それはイエス・キリストというお方において可能になります。このメンバーシップにはすばらしい特権が付いているだけでなく、人生の明確な目的をもたらします。

神の家族のメンバーには、使命があります。地上に神の善なる統治を復興し、神の家族のメンバーシップを拡張することにおいて、神の使者となることです。私たちは、使徒行伝 2 章で開始された大逆転（キリストのからだである教会の誕生）を、主の再来まで推進するための神の手段なのです。最初のエデンでの失敗の後、悪が人類全体に伝染病のように広まったのと同様に、福音はそれに対する解毒剤のように、感染したホスト全体に広がります。私たちは、神の中の神、すべての諸国に対する神の愛、および、

天地創造以来神が望んでおられたように地上でその家族と共に住むという神の変わらぬ願望に関する真実のキャリアアーンなのです。エデンは生き返ります。

毎年、世界の大陸間の距離が広がっているというのは科学的な事実です。しかし、「大陸移動」の進行は、人間には検知不能です。それが発生していることがわかるのは、事後に観察できるからです。神の国の確固とした、たゆまない前進も同様です。神々の領域、暗闇の権力が毎日のように縮小しているのか、またはそれらの支配下にある人間が一人一人福音によってどのように解放されているのかは、私たちの目で理解することはできません。しかし、それは目に見えない確実性です。

この全体像の中に自分を見つげるための鍵は、私たちには見えなくても神は依然としてご計画を実行されているということをしつかりと把握することです。神の賢明な摂理が私たちの生活および人間の歴史の出来事の中で働いているということ信じなければ、目に見えない超自然の世界を信じるということを心から主張することはできません。神は私たちが意図的に生き、ことを望んでおられます。神の見えない御手、神および私たちに忠実な見えない使者たちが、私たちの状況に関与し、グローバルなエデンという神の目的が、止めることのできない勢いで前進していることを信じて、意図的に生きるのです。

私たちはそれぞれ、誰かが御国へ通じるための進路、およびその御国の防衛のために重要な役割を果たします。毎日、暗闇の支配下にある人々と接する機会があり、不完全な世界で目的を全うするという難しい使命においてお互いを励ましあう機会があります。私たちの言動のすべてに意義があります。なぜ、またはどのように意義があるのかを知ることはないかもしれませんが、私たちの仕事は、理解することではなく、行うことです。信仰によって生きることは受身的ではなく、意図的です。

赦しの祈り

赦しの祈り―素晴らしいギフト

赦しの祈りは、私たちが皆人生のある時期にしばしば求めるものです。赦しは神からの素晴らしいギフトなので、あなたが努力して手に入れるものでも、容易に与えられるものでもありません。赦しは私達が生きてゆく過程にあって欠かす事が出来ません。それは過去に犯した罪から解放され、さらにあなたの将来に希望を与えてくれるからです。イエス・キリストは人類を赦す目的でこの地上に来られたのです。

赦しの祈り―イエス・キリストがしてください

赦しの祈りを提供してください。それは実は神なのです。しかし私たちはお互いに傷つけあい、悪を行なうので神は心を痛めておられます。あなたは不思議に思うかも知れませんが、なぜ神が心を痛めるのですか？なぜ私達の悪い行動が万物の創造主である神の心を痛めるのですか？神はそんなことを気に掛けるのでしょうか？創世記6章では、人々が互いに傷つき苦しめあっている、神は心を痛めたと言っています。主は人の悪が地にはびこり、すべてその心に思いはかることが、いつも悪いことばかりであることをみられた。主は地の上に人を造ったのを悔いて、心を痛め、”創世記6・5-6”。

ここで理解出来る事は、私たちが取るに足らないと思う悪い行動にも神は心を痛めているということです。そして最終的な赦しは心を痛めている神から来なければなりません。真実で正しい御方である神の御性格ゆえに、赦しは代価（キリスト）なしに与えられることは決してありません。人の行なう全ての罪は神に覚えられていて、神の真実かつ公正によって裁かれます。彼の苦しみが私たちの代価となったのです。これは、罪の赦しを得させるようにと、多くの人のために流すわたしの契約の血である」(マタイ26・28)。

人知を超えた神の愛の故に、私たちの良心が罪と自責の念から解放される必要を神はご存知です。神は私たちの悪い行いに心を痛めるだけでなく、さらに私達が当然受けるべき罪の定めを、究極の愛である恵みと寛容で赦して下さるのです。ですから私たちはフリーギフトである神の赦しを受け取るだけでよいのです。

赦しの祈り―神に赦しをお願いする

もしかするとあなたは偶然このページを開き、苦しみに終止符を打つために赦しの祈りをしたいと導かれているではありませんか？もしかすると、あなたを深く傷つけた誰かを赦せずに苦しんでいますか？イエス・キリストを主であり救い主であると告白して心に受け入れるならば、あなたも赦しのギフトをいただけるのです。もしあなたが自分の犯した罪を認めて神に赦していただきたいと願うなら、赦してもらえます！赦して下さいだけでなく、神はあなたの罪を攻めることはなさいません。もし私達

が、自分の罪を告白するならば、神は真実で正しい方であるから、その罪を赦し、全ての不義から私達をきよめてくださる」 第一ヨハネ1・9)。

もし私たちがイエスを拒むならば、神からの貴重なギフトである赦しを拒んだこととなります。事実神との和解を望まないと言っていることとなります 第一ヨハネ1・10)。しかし神から与えられる赦しを受け入れることも、拒むことも、神は私たちの“自由意志”で決断することを望んでおられます。地上での人生が終れば、自分自身の罪の責任は取らなければなりません。あなたの神はあなたと和解したいと望んでいます。神はそのひとり子を賜ったほどに、この世を愛してくださいました。それは神を信じるものがひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。」 第一ヨハネの福音書3・16)。あなたが本当に赦していただきたい！と望んでいるなら、イエスがなんと言っているか熟考し、イエスは主であり救い主であると真実にあなたの心に受け入れてください！そうすればあなたは赦され、神があなたの人生に希望と目的を与えてくださるのです。

赦しの祈りー新しい命を受け取る

赦しの祈りは新しい希望と新しい人生の始まりです。あなたの犯した罪は神がぬぐい去ってくださいます。私は彼らの不義をあわれみ、もはや、彼らの罪を思い出すことはしない。」 (ブル8・12)。

あなたは自分自身を罪びとであると認めますか？イエス・キリストは私達を罪から解放するためにこの地上に来られたのだ、と信じた時、あなたはこの赦しの祈りを本当に理解するのです。あなたにお聞きします、赦しの祈りを実行して神のひとり子であるイエス・キリストを受け入れますか？もしそうであるなら、キリストを信じて、あなたの犯した罪を悔い改め、これからの人生の主であるイエス・キリストに委ねましょう。

父よ、私があなただけを守らなかったために私の罪があなたとの間を引き離してしまいました。本当にごめんください、今までの罪深い生活から離れてあなたに従います。どうぞ私を赦してください、そして再び罪を犯すことがないように助けてください。あなたの子であるイエス・キリストが私の罪のために死んで下さったことを信じると共に死からよみがえられ、今も生きていて私の祈りを聞いて下さることを信じます。イエスが私の人生の主となられ、今から常に私の心を支配して下さるようにあなたをお招きします。あなたに従うことができるよう助けて下さる聖霊をおくってください。そしてこれからの私の人生をあなたの御心を行い歩むことができますように。イエスの御名によってお祈りします。アーメン」

悔い改めなさい。そしてあなたがたひとりびとりが罪の許しを得る為に、イエス・キリストの名によって、バプテスマを受けなさい。そうすれば、あなた方は聖霊の賜物を受けるであろう。」 使徒の働き2・38)

もしあなたが今日イエスを受け入れる決心をしたならば、神の家族へ喜んでお迎えします。イエスと似た者に成長するには、熱心に信頼して従い続けなさいと聖書は言っています。

- キリストの命令であるバプテスマを受けてください。
- キリストを信じる信仰を何方かに伝えてください。
- 毎日神と交わりの時を持ってください。長い時間を費やす必要はありません。毎日神に祈ることと御言葉を読む習慣をつけて下さい。信仰が強くなり聖書を理解できる事を求めましょう。
- クリスチャンとの交わりを求めてください。あなたを励まし支え、疑問に答えてくれるクリスチャングループを作り上げてください。
- 賛美と礼拝ができる地方教会を見つけてください。

あなたは今日イエスに従う人になりましたか？どちらかをクリックしてください。 はい！ またはいいえ

あなたは既にイエスに従う人ですか？ここをクリックしえください。

私たち全ての人は罪を犯したので、神の裁きから免れることはできません。父である神は、神を信じる人々が誰一人滅ぶことのないために御子を送って下さいました。永遠の創造主である神の御子イエスは、罪無き生涯を送り、私たちの当然受けるべき刑罰の身代わりとして死んでくださるほどに私たちを愛し、葬られた後死から蘇えたと聖書に記されています。もしこのことを心から信頼し本当に信じて、イエスだけがあなたの救い主であり、“イエスは主である”と宣言するならば、あなたは裁きから救い出され神のいる天国で永遠を過ごすことになります。

どう思われますか？

はい、私は今日イエスに従うことを決心しました。

はい、私は既にクリスチャンです。

まだ疑問・質問があります

著者からのお願い

『超自然の世界』(『Supernatural』の翻訳)は、より詳しく記述した私の学術書『The Unseen Realm: Recovering the Supernatural Worldview of the Bible』(Lexham Press, 2015)を簡約したものです。『The Unseen Realm』は、Amazon.comで英語版が販売されています。

『超自然の世界』をお読みいただき、霊的な励みとなったことを願っています。この本を皆さんに進呈することができるのは、その内容を大事に思う方々からの寛大なご寄付のお陰です。より多くの無料コンテンツをご利用いただけるように、miqdat.orgまたはnakedbible.orgを介してMiqdatへのご寄付をご検討ください。

その他の聖書の学習については、著者のホームページ(drnsh.com)をご覧ください。また著者のポッドキャストのNaked Bible Podcast(nakedbiblepodcast.com)もお聴きください。Naked Bible」という名前は、現代の伝統、宗派、およびその他の宗教的フィルターによって色付けされていない聖書的なテキストのみを教えるという私の願いを反映しています。

私のホームページをご覧になるとお分かりになるとと思いますが、私は聖書神学を人々に紹介する手段として、サイエンスフィクションも書いています。私の小説『The Façade』とその続編『The Portent』はAmazon.comで英語版のみが販売されています。